
オーラル・ヒストリー：ウィルタ・北川アイ子の生涯

榎澤幸広・川村信子・弦巻宏史



名古屋学院大学総合研究所

University Research Institute

Nagoya Gakuin University

Nagoya, Japan

オーラル・ヒストリー：ウィルタ・北川アイ子の生涯

榎澤幸広・川村信子・弦巻宏史

目次

1. はじめに
2. ウィルタ民族とは？
3. 弦巻先生・川村さんからアイ子さんを聞く（於：資料館ジャッカ・ドフニ）
4. 資料『私の生いたち』（非売品）一部抜粋
5. 写真

参照・引用文献一覧

1. はじめに

“ウィルタ”という言葉を聞いてすぐ回答できる人はいるでしょうか？ 答えはほとんどノーだと思います。それよりもイメージすら浮かばないのではないかでしょうか？ ウィルタは現ロシア共和国のサハリン島の先住民族で少数民族です。他にも、ニブフやヤクートなどの北方少数民族も存在しています。ウィルタはかつてトナカイと共に、“(われわれが自明視する) 国境”にとらわれない移動生活を行っていました。ウィルタのサマ（シャーマン）であったゴルゴロ翁の言葉を借りれば、「トナカイかって、マスとて、アザラシとて、歳とて……」¹という（資本主義システムに慣れたわれわれから見た場合）のんびりした生活を少なくとも 1920 年代位までは送っていたそうです。

しかし、戦前の南権太時代、戦後のソ連時代、彼らは国家の力に翻弄され、民族としての文化や言葉、そして場合によっては自らの生命すら奪われてきました。その一部の人たちは戦後、北海道に引き揚げ生活していました。その中に、ダーヒンニエニ・ゲンダースさんと北川アイ子さんのウィルタの兄妹がいます。細かいいきさつは後掲資料に譲りますが、彼らは 1970 年代後半から、自らの民族のアイデンティティを大事に考えるようになり、その復権運動に取り組み様々な成果をあげてきました。その一つの成果が 1978 年に建立された資料館ジャッカ・ドフニの存在です。ここには、ウィルタを始め北方少数民族の服飾品や紋様（イルガ）を始め様々な資料が展示されています。北川アイ子さんが述べられていたように、この資料館の存在は「私が死んでも民族の文化が残る」ものになっております。

しかし現在、二つの転機が訪れています。一つは、日本で自らをウィルタと名乗る最後の一人である北川アイ子さんが 2007 年 12 月 16 日、お亡くなりになられたことです（お兄さんのゲンダースさんは 1984 年に脳溢血で亡くなっています）。彼女はウィルタの文化を残すために、資料館ジャッカ・ドフニの館長を務め、そこで様々な展示品を作ったり講演活動を行ったりしておりました。彼女にとって、そういう活動が自らの民族としてのアイデンティティを残すことに繋がったからです。

¹ 田中了／D・ゲンダース『ゲンダースーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）、29 頁。

アイ子さんの死を遡る数年前、彼女はお姉さんが亡くなる時に「ウィルタがなくなってしまう……」と嗚咽されていたといいます。非常に仲の良い姉妹だったようですから、この言葉は無論言うまでもなく、大事な人の存在が失われた悲しみを表しているといえますが、それと同時に数少ないウィルタ文化を知る人の存在が失われた悲しみも示しているといえます。

もう一つの転機は、資料館ジャッカ・ドフニが 2011 年閉館されたことです。日本に存在した世界でも珍しい、北方少数民族の存在を肌で感じることができた、唯一の資料館でした。一般的に知られているような、ガラスケース内に資料が展示されている博物館とは異なり、この資料館内の展示物はほとんど手に取って触ることもでき、彼らが民族として長年培ってきた技術や精神性のすばらしさを認識することができました。同じ言葉の繰り返しになってしまいますが、そういう意味でも肌で感じることができたのです。この点、展示資料はいくつかの場所に寄贈されるようなので、各場所でアイ子さんの想いが残ることを願ってやみません。

私は、二つの転機の内、一つ目の転機をふまえた上で、この北川アイ子さんの生涯を不十分でもかまわないので何とか記録に残すことはできないかと思いました。彼女の記憶の記録を残さなければ、ウィルタとしての彼女の生きてきた証が今後関わってきた人たちがいなくなると同時に失われるを考えたからです。

そこで、ウィルタ協会の役員で北川アイ子さんと長年親交のあった弦巻宏史先生にご相談を持ちかけたところ、今回の話を快く引き受けて下さいました（相談を持ちかけた時期は 2010 年でまだ資料館は開館していました）。また、やはりウィルタ協会の役員でアイ子さんとウィルタ刺繡の師弟関係にもあり親交の深かった川村信子さんも参加して下さることになり、三人で鼎談を行うことになりました（資料館ジャッカ・ドフニ内にて 2010 年 10 月 6・7 日）。以下の記録は正にその時の記録をほとんどそのまま文書化したものです（読みやすさを配慮して、言葉の統一や重複箇所などは無論訂正しております）。

読者の方には、いきなりこの鼎談を読み始めて頂いても構わないのですが、「ウィルタとは何か」をおおまかに知って頂き、この鼎談内容をより味わい深く読んで頂けたらと思い簡単な概要を付けさせて頂きました。この数頁の文章は名古屋学院大学論集（社会科学篇）48 卷 3 号に掲載された榎澤幸広・弦巻宏史「ウィルタとは何か－弦巻宏史先生の講演記録から彼らの憲法観を考えるために－」の一部を若干修正したものです。

また、当該論文は日本でも数少ないウィルタ刺繡サークルの一つ「フレップ会」²の入会者にウィルタの存在を認識してもらうために、弦巻宏史先生が資料館ジャッカ・ドフニで講演（2010 年 10 月 9 日）をした内容が掲載されております。こちらもあわせて読んで頂けるとよりよく彼らの存在を知ることができますと思われます。

もう一つ、読者の方にふまえてほしいことがあります（私の欲かもしませんが）。こ

² フレップ会はもともと、北川アイ子さんが講師をしていた公民館講座に集まった人たちが 1983 年頃に作ったサークルです（この公民館講座に近いことは現在も行なわれ、フレップ会のメンバーが講師として派遣されています）。北川アイ子さんが存命の間はその会の顧問として指導を行なっていました。このメンバーは、北川アイ子さん亡き後も彼女が作った、ウィルタの重要な文化の一つであるイルガ（ウィルタの紋様）を参考にし様々な刺繡に発展させています。また毎年、網走市のエコセンター 2000 で作品展も行なっています。

の“北川アイ子さんの記憶の記録集”は、関係者の記憶を頼りに構成されております。だから、年数や言葉遣いなどに若干の食い違いがあるかもしれません。そこで、オーラル・ヒストリーという体裁をとらせて頂いております。私の考える“オーラル・ヒストリー”とは、本人や関係者の生の声を直接聞き、できるかぎりほぼ忠実に記録に残したもののことです。読者の中には「そんなものが歴史資料として価値があるのか？」と思う人もいるかもしれません。しかし、今までの歴史資料は公的に文書化されたものが第一級資料と考えられてきました。無論、それらの資料を大事にすることも重要ですが、これらも資料編纂者の視点に従って編纂された歴史の一側面を示しているにすぎません。しかし、これだけでは歴史の真相を正確に理解することは不完全であると考えられます。従って、様々な視点・角度から見た様々な記憶の記録化が必要になるのです。様々な角度から一つの歴史を見ることによって、歴史の真実に近づける可能性があると考えられるからです。皆さんにはまず本稿を読んで頂き“ウィルタ民族”や“北川アイ子さん”的存在について知ってほしいと思います。そして、“シベリア抑留”や“日本政府の主張”なども調べて頂き、皆さんなりの輪郭を描いてもらえると嬉しいです³。

現在、日本には様々な方々が存在しております。残念ながらその中には自らをウィルタと名乗る方はいません……このことについては、今を生きる私も含め皆さんのが今後ふまえ考えなくてはならない最重要課題だと思います。

しかし、同じことを繰り返すことは愚かなことだと考えられます。このオーラル・ヒストリーの記録がその一助になることを願ってやみません。

2012年12月3日 榎澤幸広

³ 例えば、現地を訪問するというのも一つの方法かもしれません。例えば、京都の舞鶴市には引揚記念館があります。ここには、ウィルタについて直接ふれている資料は私が知る限りではないのですが、シベリアから日本に引き揚げてきた北方少数民族の人たちはまず舞鶴の港に降り立ちました。この場所を訪れたり、港近くにある引揚記念館を見学することによって、彼らの心情や場の雰囲気を知ることができたり、歴史の一側面を補完することができるかもしれません。舞鶴引揚記念館のホームページ<http://www.maizuru-bunkajigyoudan.or.jp/hikiage_homepage/next.html>

2. ウィルタ民族とは？

ウィルタとは、“飼いトナカイ（Ulaa）と共に生活する人”の意で、遊牧を中心に狩猟・漁撈をするサハリンの先住民族で少数民族である。ウィルタの人々の特徴は、①戦争（争い）を知らないこと、②階級（上下関係）を知らないこと、③“私有”の概念を持たないこと、④文字を持たないこと、という四点をあげることができる。要するに、食糧も天（ボオ）の恵みとして必要以上に獲らないし、貧しい者には食糧を分け与えるなど、仲間同士協力し合うため、ゲンダーヌ氏の言葉を借りれば、“乞食や泥棒もいない”のである（田中了編『戦争と北方少数民族』（草の根出版会・1994、29-30頁））。また蓄積という概念も持たないし、子どもたちも自立しているため、それらをあてにせず、一人一人が大自然の中で自立して生きている。少人数でトナカイと共に移動生活をするため、様々な民族と接点を持つ。従って、文字はもたないが語学能力には長けており、皆数言語を操るし、行く先々でトラブルが起こらないようにする。ウィルタにはサマ（シャーマン）がいるが、これはボオ（天。ウィルタの神）の教えを受け予言・治病などを行う人で階級とは無縁であることも付け加えたい。

現在はロシア共和国サハリン州に多くが住み 300 人ほどと言われている。大日本帝国の領土であった南樺太時代、ウィルタ（日本人は蔑称としてオロッコを使用）を始めとする北方少数民族の人々は敷香のオタスの杜に強制的に集められそこで生活させられた。南樺太開発のためである。その居住地は、ウィルタ以外に、ニブヒ、サンダー、キーリン、ヤクートラ（以下、総称として“北方少数民族”とする）が生活していたことから、土人の杜として日本人の観光名所の一つにもされている。1941 年の樺太庁統計書である『原住民戸口調査』によれば、一番多いウィルタ 287 人 55 戸、次に多いニブヒ 97 人 27 戸を始めとして、合計 425 人 92 戸が住んでいたという。樺太庁は、彼らを言語能力に劣る未だ動物的な生活を行なう“無知蒙昧で怠惰な土人”（狂暴な性格と書いてある文献もある）と位置づけ、樺太アイヌより劣ると差を下に設け、彼らの智徳の啓発・生活の改善のため、敷香土人教育所を設置した（1930）。ここで彼らの文化とは異なる皇民化教育が行われるわけである。

太平洋戦争が激化し始めた頃、彼らの身体能力の高さに目をつけた特務機関はソ連軍への諜報活動を行なわせるため、1942 年、彼らを召集しスパイとして養成、その後活動させた。それ以外の者は、憲兵隊から徵用されたり、女子挺身隊やトナカイ部隊に動員されることになる。

しかし、1945 年 8 月 8 日、ソ連の対日参戦後、ソ連軍襲撃により、この南樺太は火の海になり（8 月 20 日）、生き残った北方少数民族の男性たちは日本軍に協力した戦犯者としてその多くがシベリアに送られた。シベリア抑留である。不明者数名を除き、戦犯者は、ウィルタ 31 名（内、16 人抑留中死亡）、ニブヒ 16 名（内、9 人抑留中死亡）、サンダー 2 名であった（総人口の 1 割以上、戸数のうち半数が戦犯者を出していることになる）。また、帰還者の大多数も何らかの障害を負っていたという。戦後ポロナイスク（敷香）に残された家族は、ほとんど女性と子どもばかりであった。彼らは日本軍に協力したスパイの一味とみなされ、彼らにむけられた目は冷たく、孤立化・内向化していくことになり、彼らは自らの文化や言語を表立って使用できなくなったという。それに加えて、ソ連時代の肅清や貧困も相まって、日本に移住した家族もいた。

ゲンダーヌ氏は約 10 年ものシベリア抑留生活を終えて帰省先に選んだのは日本であった。理由は、戦犯者の汚名を着せられてサハリンには戻りたくないこと、そして日本のために戦ったから日本に戻れば温かく皆が迎えてくれると思ったからだという。しかし勝手は違い、そのような出迎えもなく、戸籍がないことが判明し、職に就くこともままならない状況であった。その後就籍許可申立手続を行い、許可の審判が下ることになる。それと同時に、故郷に雰囲気の似ている網走での生活を始めることになる。1975 年、かつての上官の手紙から、軍人には恩給がもらえることを知り、『オロッコの人権と文化を守る会(現 ウィルタ協会)』の人たちの協力を受けて手続をするが、結果は認められなかった。政府見解として、1) 戸籍法の適用を受けていない者には兵役法が適用されないこと、2) 兵役法の下、特務機関長には召集権がないこと、3) 兵役法に基づかない召集令状は無効であること、4) 無効の召集令状を知らずに受けて従軍し、そのために戦犯者として抑留されたとしても日本政府の関知するところではないこと、5) 現行の恩給法の下では適用外であること、の五点が示されたからである。

この頃から、ゲンダーヌ氏の心境に変化が見られることになる。それまで「オロッコは滅びゆく民族です」と述べ、自分の生き方に対しても内向的であった彼が徐々に外向的になっていくのである。以下に引用する、1977 年 7 月 30 日、歴教協全道研究集会（松前）で十数分に及んで彼がウィルタ語で訴えた『ビイ ハプシウイ（私は訴える）』にそれははつきり現れている（日本語訳は田中了。田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）、84・85 頁）。

…さて、あの大きな戦争が終って三十二年がすぎました。しかし、私には戦争は終っていない。私たちウィルタやギリヤーク、またほかにもいたあの大勢の土地の人（同胞、民族）たちは、あの大きな戦争の時に連れ出され（狩り出され）て殺され、そして棄てられました。チクショウ！（ゴシプシエイ）この罪（責任）は一体誰がとるのか。日本の政府ですか、それとも日本の天皇ですか。戦争が終って三十年たっているのに未だに何をしているのか。死んで消えていったあの若い同胞は日本の国のために死んでいった。しかし未だに日本の政府は私たちを日本の国民（日本の國の人）として認めようとしない。私も日本人になって戦いました。ワシューカやヘイジロー、イガライヌも日本人として戦って死んでいきました。私たち少数民族は樺太ではクワイ（アイヌ）よりももっと悪い（下の）土人として使われました。戸籍すら与えられませんでした。ウィルタの言葉では犬よりも悪い、というのがあります、それと同じように扱われたものです。戦争の時には日本人として使う。戦争が終ればまた棄てる。チクショウ、私たちは犬コロじゃないんだ。ええい、チクショウ！いつになつたら戦後は終るのか。日本の天皇は私が苦しみの中で泣きながら五十年間生きていることを知っていますか。私はいま何もできないが、心の中では死んでいった仲間（同胞）の靈を思うと、だから私は訴えざるをえないのです。私はいまウィルタの文化を守るために、日本人・北川源太郎と別れ（訣別）しました。ウィルタ文化はウィルタが守ります。だから私はゲンダーヌにもどりました。私がウィルタに戻らなかったら、ウィルタ文化は滅びます。今まで日本人がウィルタをオロッコと呼んでたくさんの方に私たちを書いています。それでもウィルタの本当

のことは知られていない。ウソが多い。ウソが本当になったら、おそろしいことだ。ウソが大きくなったらおそろしい。 ウィルタのウソのお話をいまのうちになおしておかねばならない。それが私の大きな仕事です。 父が健在なうちに、昔から残されたウィルタの大変よい文化を守っていきたい…

これを契機に彼の民族復権の活動が進むことになる。ところで、ウィルタと表立って名乗っていたのは、ダーヒンニエニ・ゲンダーヌ氏と北川アイ子氏の兄妹二人だけである。彼らは、自分のためでなく犠牲になった仲間のために民族復権の活動をしてきた。ゲンダーヌ氏には三つの小さな夢（ヌチーカ トリチビ）があり、ウィルタ協会の協力を得てそれを一つずつ実現していった。一つ目は、資料館ジャッカ・ドフニ（ウィルタ語で「大切なものを収める家」の意）建設（1978年8月実現、2011年閉館決定）。この資料館はウィルタ協会が協力者を募り私費で建てられた。展示物はウィルタの刺繡、衣装、紋様（イルガ）、生活品など、北川アイ子氏が言うように「自分の民族の文化が残る」もの、「私が死んでも残る」ものになっている。二つ目が、サハリン同族との交流。この第一回目は1981年7月に実現している。ここで歓迎パーティが開かれた際、元婚約者との交流を果すことになるが、パーティーの最後にゲンダーヌ氏は「これからは、ウィルタ、ニブヒなどの少数民族が力を合わせて一緒に幸せを築こう。自分たちの幸せは、自分たちの力で手に入れよう」と皆に自立を訴える挨拶をしている。三つ目が、少数民族ウィルタ・ニブヒ戦没者慰靈碑「キリシエ」設立。これは網走国定公園内に1982年5月に実現している。慰靈碑は高さ2.4m、幅1.3m、白みかけ石の台座にオホーツクの海を象徴する濃緑の蛇紋石の碑をのせ、碑の表側には“静眠”、台座には“君たちの死をムダにはしない 平和のねがいをこめて”と刻みこまれている。更に、裏側には「1942年 突然召集令状をうけサハリンの旧国境で そして戦後 戦犯者の汚名をきせられ シベリアで非業の死をとげたウィルタ ニブヒの若者たち その数30名にのぼる 日本政府が いかに責任をのがれようとも この碑は いつまでも歴史の事実を語りつぐことだろう ウリンガジア・パッタアリシュ（静かに眠れ）」と書いてある。

しかし、この三つの夢が実現し、民族復権のたたかいに再度取りかかろうとした矢先、ゲンダーヌ氏は脳出血で倒れそのまま意識が戻らないまま永眠することになる（1984年7月8日）。その後、兄の遺志を継いで、長年ジャッカドフニの館長を務め、更に講演会活動やイルガの指導などを通じて民族復権の運動を行なっていた北川アイ子氏も2007年12月16日永眠することになる。この結果、ウィルタを表立って名乗る者は、日本国内で誰もいなくなってしまったことになる。

3. 弦巻先生・川村さんからアイ子さんを聞く（於：ジャッカドフニ）

(1) 1日目：2010年10月9日（土）13-18時

①聞き取りをしようとした3つの理由

榎澤 そもそも何で、こういうふうに聞き取り調査をしようと思ったのかというところからお話をさせて頂いた方がいいのかなと思います。3点ほどあります。

僕は元々、少数者の権利、少数民族の権利といったマイノリティの権利を勉強していました。それでアイヌ民族や琉球民族、あるいは小笠原諸島の先住民の研究をしたり、その他マイノリティというと女性差別の問題だとか、同性愛者差別の問題なども研究していました。その時に、10年前、いやもっと最近ですね。7、8年位前にウィルタの問題を知りました。自分の勉強不足で、このウィルタの問題、どこかでは聞いていたのかもしれないですけれどもそれまで知らなかったんです。これは本当にまずいなと思い始めてから、色々な本を読むようになりました。それで、資料を探してみるとやはりほとんどないですね。実際、本で手に入れることができたのは、有名な3冊、田中了先生の3冊の本でした⁴。ですから、それを何度も何度も読みました。

それで大学の授業で実際に使ってみたんですね。過去には、アイヌ民族の話や沖縄の話なんかも事例としてちょくちょく使っていたのですが……。ウィルタの話をしたら、みんなが唖然とした顔をしていました。まさかこんなことが日本であったのかとそういう顔をしていました。普段僕の授業は皆静かに受けているんですけども、この話の時はより一層静寂感が漂っていました。その後皆に意見感想を書いてもらったら、「なんでこんなことを小学校中学校の義務教育で教えないのか」、「こういうことこそ知らせるべきだろう。これは日本政府悪いだろう。義務教育何だと思っているんだ」と書いてくれる人がかなり多かったのです。更に、「アイヌのこととも知らないけれど、このことも知らせないといけないんじゃないのか」という意見もありました。こういうふうに言ってくれる学生が多かったです。もう90%以上はこういうふうに書いてくれたわけです。

昨年の9月に弦巻先生⁵にお会いしてから、3つの大学の後期授業でウィルタの話をさせて頂いた時にもやはりそういう反応が多かったんですね。で、2回の授業で分けて紹介したのですが、やはり9割以上がそういう反応でした。ただ残念ながら、残り1割とまではいかないんですけども、ごくわずか、ひどい発言をする学生もいました。「土人という言葉は差別的な意味合いがあるからいけないよ」と僕が授業で言っているにもかかわらず、用紙にも「土人も人間なんだから人間として扱うべきだ」という意見が書かれたりしました。まだこれは良い方ですなんですがもっとひどいものだと、「本当にそんな人いるんですか」とか。以前、アイヌの話をした時にも、「アイヌ

⁴ 田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）；田中了『サハリン北緯50度線一続・ゲンダーヌ』（草の根出版会・1993）；田中了編『戦争と北方少数民族』（草の根出版会・1994）

⁵ 弦巻宏史先生は司馬遼太郎『街道をゆく38 オホーツク街道』（朝日新聞出版・2009）、145-147頁にて紹介されている。

「っていったい何なんですか」とこういう質問を喧嘩腰で言われたりすることもあったんですね。「私もアイヌになりたいと思えばアイヌですか」とかよくわからない質問をされたこともありました。北海道の先生方が書かれている、ここで販売されている本、アイヌ教育とかウィルタ教育について書いてある本でも、「ぶしつけな手紙」が紹介されていましたよね⁶。「北海道は地名に全部日本の漢字を使っているんだから、日本のものでしょう。アイヌの皆さん、日本に住まわせて頂いているだけでも、ありがたいと思いなさい」という手紙です。ああいった考え方方が、残念ながら現在も一部根強く残っているのではないかとその時思いました。これが昨年授業で取り上げた時に特に感じたことでした。

「こういうことを教えてくれてありがとう」という反応が多かった反面、それが100%にならなかった悲しみ、これだけ2回の授業に分けて紹介したのに何%かの人たちには全然理解してもらえなかつたのかということにショックも覚えました。そこで考えたのは、記録が少ないと、いろんな人たちに情報が回らないわけですよね。だから、何らかの形で情報を残しておく必要があるということが、まず1つの理由として、これが僕自身が感じたことです。

2つ目は、「出会い」です。何の運命かわからないですが、昨年（2009年）たまたま弦巻先生にお会いできて、色々なお話をさせて頂きました。更にその時僕がおねだりをしてしまったのですけれども、キリシエ（少数民族ウィルタ・ニブヒ戦没者慰靈碑）⁷にも連れて行って頂きました。そこでも先生はお時間ないというのに色々説明して下

⁶ 北海道高等学校教職員組合少数民族専門委員会編『生徒とともに考える日本の少数民族－その現状と指導の手引き』（北海道高等学校教職員組合・1982）4・5頁。手紙の原文は以下の通り。

「拝啓

ぼくはアイヌ人が北海道に住んでいることを知って驚きました。…アイヌが北海道に先住していたなどと私は、あきれはててしまいました。…学校の歴史の時間にも、アイヌの事など教えていません。それはそうでしょう。北海道に日本人が先住していた事は地名を見ればわかります。北海道は日本語ですし、小樽、札幌、釧路、網走、箱館も、全て日本語です。何よりあなた方の住んでいる、日高や平取町、二風谷の地名自体日本語であることを見ても、北海道全体が、もともと日本の物であったことは疑う余地はありません。…

アイヌの皆さん、犬だって、三日間飼えば恩を忘れない、と言われているのに長い間、日本人に世話になっておきながら、自分勝手な理屈をつけて、人の土地をアイヌの物にしてしまおうなんて、泥棒の始まりだ！気をつけるべきでしょう。…今後とも、日本に住まわせてもらいたいなら北海道に住める様、土地をくれた親切な日本人に感謝しお礼の一つも言うべきだと思います。」

⁷ 田中了『サハリン北緯50度線一統・ゲンダーヌ』（草の根出版会・1993）、87頁。

これは網走国定公園内に1982年5月に建てられた。慰靈碑は高さ2.4m、幅1.3m、白みかけ石の台座にオホーツクの海を象徴する濃緑の蛇紋石の碑をのせ、碑の表側には“静眠”、台座には“君たちの死をムダにはしない 平和のねがいをこめて”と刻みこまれている。更に、裏側には「1942年 突然召集令状をうけ サハリンの旧国境で そして戦後 戦犯者の汚名をさせられ シベリアで非業の死をとげたウィルタ ニブヒの若者たち その数30名にのぼる 日本政府が いかに責任をのがれようとも この碑は いつまでも歴史の事実を語りつぐことだろう ウリンガジ アクパッタアリシュ（静かに眠れ）」と書いてある。

さいました。先生は特にアイ子さんと直にふれあった方ですよね。川村さんもそうですけれども、その方に出会えたというのは、何かの因果なのか運命なのかと思います。アイ子さんは残念ながらお亡くなりになられてしまいましたが、関わった方に直接お話しを聞くということは、アイ子さんという人の存在、人間としてのアイ子さんの存在、そしてそこを通して見るウィルタの存在を理解することができるんじゃないだろうか、と思ったわけです。この運命的な出会いを大切にしたいなと思ったのが2つ目の理由なんですね。

3つ目は、僕の専門が法学で、更に細かく言うと憲法学なんですね。ですから、権利とか人権の話を中心に、僕は研究しているわけです。法学者の中には、実際に被害に遭われている方々に話を聞きに行かない人がいたりします。無論全員とは言わないですが、そういう人は結構、机の上で勉強することの方が多いのが事実でして……それで、場合によっては裁判の資料なども書いてしまうということもあるので、当事者の視点というものが欠落しているとでもいいですかね。これはウィルタ協会の皆さんのが何十年も闘われて一番理解されていることだと思います。

最近、オーストラリア、南アフリカやカナダは、歴史的な記録というもの、要するに、歴史の教科書に載るものは、どちらかというと政府側の物の見方ばかりが載るので、これについて考え直そうとしているんですね。日本史でもそうですね。時の政権、例えば、鎌倉時代だったらその後の時代の人たちがその前の時代の資料を書くわけですし、室町もそうですし江戸もそうですし。だから、その政権の人たちに都合のいいことが書かれているわけですね。戦争が終わった8月14、15日当時だって、噂話でよくありますけれども、政府筋や軍の人たちは危ないと思う資料はみんな燃やしてしまったとかありますよね。ですから、はっきり言えば、裁判というものは資料というものが重要ですが、これらのケースでは、証拠としての資料、いわゆるその戦える証拠がないですね。そういう場合、どうしたらいいのかと思うんです。ここで僕は南アフリカとかの考え方を受け継ぎたいなと思ったのは、とにかく被害に遭った人から話を聞きとて記録を残そうとする姿勢です。その内容が正しいかどうかは後の人たちが判断すればいい。記録を残さなければ、つまり、その人が亡くなってしまえば途絶えてしまうんだという姿勢です。南アフリカの場合は真実和解委員会というものがあります⁸。オーストラリアやカナダは正に先住民の問題⁹。二年前にカナダとオーストラリアの首相が謝罪しましたけれども¹⁰、これらの国では先住民族の子ども

⁸ the official Truth and Reconciliation Commission website<<http://www.justice.gov.za/trc/>>

⁹ オーストラリアについては、Bringing them home: The Stolen Children Report(1997)<http://www.hreoc.gov.au/social_justice/bth_report/index.html>; カナダについては、Truth and Reconciliation Commission of Canada<<http://www.trc.ca/websites/trcinstitution/index.php?p=26>>

¹⁰ 過去の政府がアボリジニの子どもを親から強制的に隔離した政策に対して、2008年2月13日、オーストラリアのケビン・ラッド首相が謝罪した。日本語で読める記事として例えば、「豪首相、アボリジニに謝罪」(2月13日付産経新聞)、「首相が先住民アボリジニに謝罪 過去の親子隔離政策で」(2月13日付毎日新聞)。その四か月後(2008年6月11日)、カナダも先のオーストラリアの政策と類似のことをしており、その件についてハ

を誘拐して白人教育を行っていたわけです。オーストラリアは 1997 年に 500 頁以上にわたる分厚い聞き取りの記録を残していますし、カナダは今それを始めたばかりで、こういうことを日本でもやはり行っていかなければいけないんではないかと思いました。

② ウィルタ女性の視点

榎澤 その 1 つのきっかけとして、ウィルタの記録を残したいと思ったわけです。その中でもゲンダーヌさんの記録というものは、田中了先生の本で 3 冊、重要な聞き取りの本があって、それ以外にも資料も色々出ていると思うんですね。そこで僕が思ったのは、それらの資料にはアイ子さんのこととかその他色々示されてはいるんですけども、やはりウィルタの男性の話がほとんどだと思いました。ゲンダーヌさんがやはり中心。『ゲンダーヌ』という題名ですから、無論それはしょうがないです。

ただ一方で、ウィルタの女性の人たち、特に、シベリア抑留でウィルタの若い男性たちが連れて行かれて、残された人たちは女性の人たちが多くなったわけですよ。働き手を失った女性たちがどういう境遇にあったのか、その記録がほとんどないわけですね。で、キタジマ・リューバさん¹¹とか 99 年にお亡くなりになられていますキムエンシンさんについて示されている論文は明石書店から出ているものを 1 本見つけました¹²。アイ子さんについては、僕の知る限りでは、本人が語っているものが 2 つ。ここで買わせて頂いた『私の生いたち』と、後は、北方民族博物館が刊行している本の中に書かれていた口述の資料ですね¹³。『オタスの暮らしと私』¹⁴。そして、北海道新聞の記事にもアイ子さんの記録が残っているので、これも含むことができるかもしれません¹⁵。更に昨日調べていたら、小林笑子（えみこ）さんの資料もあることがわかつ

一バー首相が謝罪した。同じく日本語で読める記事として例えば、「カナダ政府、同化政策の誤り認め先住民に公式謝罪」（6 月 12 日付朝日新聞）。

¹¹ 叔父さんはゲンダーヌ。1981 年の叔父との交流からウィルタ民族として生きることの重要さを実感。その後、民族の言葉や伝統を勉強していく、同胞の仕事のあっせんや住宅の世話などボランティアに身を投じる。その活躍が認められ、1989 年、地区の北方民族専門官に起用される。1990 年には、モスクワで開催されたソ連初の少数民族会議にウィルタ代表として派遣される。1995 年 3 月 15 日付朝日新聞「見知らぬ親類が現れた ウィルタ：3（50 年の物語・第 31 話）」

¹² 千葉茂樹・藤野知明「第 6 章 踏みにじられた北方民族の軌跡」原田勝弘等編『環太平洋 先住民族の挑戦』（明石書店・1999）、203・240 頁

¹³ 北川アイ子『私の生いたち』（春の風文庫・1983）。この市販されている『私の生いたち』と内容はほとんど同じであるが、弦巻先生が兄たちの死、その後のアイ子さんの活動を記したもう一つの『私の生いたち』（非売品）の存在をこの時初めて知った。また、この中の本文を資料として後掲載しておく。

¹⁴ 北川アイ子（口述）「「オタス」の暮らしとわたし」北海道立北方民族博物館『第一回 特別展 権太一九〇五一四五—日本領時代の少数民族 -』（1997）、15・18 頁

¹⁵ 北海道新聞「ウィルタの切り紙紋様 1 ~ 7」1984 年 1 月 9 日 - 15 日掲載記事

りました¹⁶。あとそれからもう1つは、これはインターネットで公開されていて、司書の方が『アイ子さんと私』と書かれているものもありました¹⁷。そこにはババチュリとか、プッキチュリとか、白樺皮細工とか、切り絵のこととかが載っていました。たぶん何かの冊子で連載されていたのかなと思うのですが、それ位でした。

それから、アイ子さんの人となりというものは何となくは掴めてきたんですけれども、どう生き方をされてきたのか、疑問が次々とわいてきました。まあ色々な時代を経験されてきていますからね。オタスでの時代の経験もあるでしょうし、その中で経験された色々なこともあるでしょうし（1段階目）、その後結婚した男性がシベリア抑留されいなくなり、アイ子さんが二度目の結婚をされた後の生活、要するにサハリン州での生活ですよね（2段階目）。更に、サハリンから日本に引き揚げた後の網走の生活（3段階目）。この点、日本に引き揚げた理由というのも本ではありませんよ。4段階目になると、ゲンダースさんと一緒に鬪おうと、ウィルタとして生きると感じたアイ子さんの生き方。そしてゲンダースさんと彼のお兄さんのヒラナカさんが亡くなられた後、姉妹たちで頑張っていったその時代（5段階目）。何段階と簡単に分けてしましましたが、複雑な、激しいというか、そういう人生を送られていて、アイ子さんという人の記録を残さないというのも問題であると思いましたし、そこから見えてくるウィルタという生き方も何らかの形で残す必要があるのではないかというふうにも思いました。そこで弦巻先生にお電話させて頂いて、お忙しいところ時間を割いて頂いて、こういうふうな状況になっているわけです。

一応僕自身の考えとしては、そういうふうな流れで、アイ子さんのことについて、色々お聞かせ頂けたらという風に思ったんですね。先ほども言いましたが、ゲンダースさん、ウィルタの男性の視点として示されている本があるから、それと対になるといいかなと思っております。田中先生の本は名作なのでおこがましいですけれども、そうなるといいかなというふうな考え方もありますし、一番接せられていたお二人にお話しをお聞かせ願えたらと思った次第あります。

③北川アイ子『私の生いたち』から考える

弦巻 どこからお話したらいいかわかりませんので、質問形式でけっこうです。

榎澤 そうですか。僕が考えたのは、この2つの記録（『私の生いたち』と『オタスの暮らしと私』）ありますよね。これを読みながら話を進めていくのがいいかなと思いました。

¹⁶ 「北方少数民族 ウィルタの産育」女性と経験 9号（1984）、34-39 頁；「北方少数民族 ウィルタの宗教観」女性と経験 10号（1985）、52-55 頁；「北方少数民族－ウィルタの葬制・婚姻」女性と経験 11号（1986）、103-106 頁「北方少数民族 ウィルタの暮らし－社会生活・生業－」女性と経験 12号（1987）、65-71 頁；「北方少数民族 ウィルタの衣生活」女性と経験 13号（1988）、68-71 頁

¹⁷ 博物館めぐりのホームページ<<http://www.kustos.ac/lepos/page4/nadasa/index.htm>>に四つの小論文（「アイ子さんとわたし」というメインタイトル以外に副題として「プッキチュリ」、「白樺樹皮細工」、「ホホー」、「切り絵」）が掲載されている。元々は、資料館ジャッカ・ドフニ友の会ニュース『nadasa』に投稿されていたものようである。

何でそういうふうに思ったのかというと、これもインターネットで見つけたんですが、ピリカ会のあきやまさとし（秋山史）さんと読むんですかね、歴史の史と書いて。

弦巻 うへん、わからない。

榎澤 北大の先住民の遺体収容の問題について研究会をされていたようで、『歴史の真実』という本があるようですがれども、それについて報告会があったところで、その中にこれ（『私の生いたち』）が収録されているみたいなんですよ¹⁸。

弦巻 あっそうなんですか。

川村 （市販品の『私の生いたち』と照らし合わせた上で）これ（『私の生いたち』（非売品））と同じなんですね。

弦巻 途中までは同じ。

榎澤 それをそのまま読んでみます。「第三回歴史の真実（監）学習会の報告」という題名でした。2007年1月の書誌のところに、カンナカムイと書かれています。雑誌なのか文集なのかわかりませんが、そこに書かれているのをそのまま引用させてもらいますが、こう書いてありました¹⁹。

『83頁の「私の生いたち」は、オタスの杜の生き証人である北川アイ子さんの証言であるが、北大報告はこれを無視している。敗戦後、ウィルタ民族の抹殺を目論んできた日本政府と同じ立場だ。今まで北川ゲンダースさんとアイ子さんが命をかけて大切に守ってきた資料館ジャッカドフニが閉館に追い込まれている。「私の生いたち」も「歴史の真実（監）」に載せなければ消えてしまうかもしれない。何度も読み返してみた。ウィルタ協会がアイ子さんの聞き取りをまとめているが不十分であり、テキストの解説もあわせて読む必要がある』

こういうふうに書いてあるんですね。『私の生いたち』、ここで購入させて頂いたものだとすれば、80何頁もないのに、何らかの本に載せられているということですね。解説も加えられていると書かれていますし、僕も昨日インターネットで調べたら色々出てきたものの中の一つだったので、まだ原典にあたってはおりません。だから、ウィルタ協会の方々が了承したのかなと勝手に思っておりました。

弦巻 そんなことはないんですけどね。もしかしたら、何とかピリカ？

榎澤 ピリカ会員。恐らくアイヌの方か賛同者ですよね。

弦巻 そうですね。

榎澤 カンナカムイという書誌みたいなんでこれもアイヌ語ですよね。僕が特に気になつたのが、「ウィルタ協会がアイ子さんの聞き取りをまとめているが不十分であり」と言っているんですよね。

弦巻 これはウィルタ協会でまとめたのではなくて、歴教協（歴史教育者協議会）という組織がありますね。あれの北海道大会に出る時に、歴史の一証人としてアイ子さんが

¹⁸ 北大人骨事件真相究明緊急会議編『歴史の真実II（上）「帝国」学問と「オタスの杜』』（労働者共闘・労働運動活動者評議会合同事務局・2005）

¹⁹ 秋山史「第3回『歴史の真実{監}』学習会の報告」カンナカムイ23号（2007）<http://www.geocities.jp/pirika_kanto/report/kamui0713.htm>

出てくれるということになったのです。それで私が、アイ子さんのご紹介のために彼女のいろんな生き立ちを語ってもらったのを、後でまとめ一項目ずつ詳しくやろうと思しながら要点をメモしたものです。

榎澤 あっそうなんですか。

弦巻 だから、ウィルタ協会でやったものではなくて、私個人がアイ子さんの了承を得て、そしてアイ子さんも監修して証言したものです。それだけです。

榎澤 そうなんですか。そうするとお話の進め方として、これを読みながら話を膨らませていったり、僕がわからないところは質問させて頂いたりする形がいいのかと思うのですが…… これだと 83 年までの記録です。ちょうどビゲンダーヌさんやヒラナカさんが亡くなられる手前までのお話が描かれているので、ここまでが詳細に理解できるのかなというふうに思うんですね。でこの後は、これを読んだ後にその後のアイ子さんのお話を色々して頂けたら、アイ子さんの全体像がそれなりに見えてくるのかなと思うんですけども。そういう形でよろしいですか？

弦巻 はい。

④『私の生いたち』1段落目一生年月日とウィルタ名について

榎澤 それでは一段落ずつ読ませて頂きます。

『私の生いたち 北川アイ子 私はウィルタの北川アイ子です。1928（昭和3）年権太で生まれました。父は、北川ゴルゴロ、母は北川アンナでした。』

一応ここで一段落分かれているんですけども、ここだとまずポイントは生年月日のところと名前のところですかね。

弦巻 私、見本を持ってこなかったんですよね。生年月日はわかる。書いたものがあるんですよね。

榎澤 本当の生年月日？

弦巻 ええ。昭和3年何月何日って。

川村 6月。

弦巻 6月 25 日かな。

川村 先生と同じ月ですね。

榎澤 あっそうなんですか。

弦巻 はい。

川村 20日か2週あたりと思っていたけど。

弦巻 まあ、既にご存じかもしれないすけれど、お姉さんが一人いてね。

榎澤 2002年にお亡くなりになられた…

弦巻 うん。それから妹さんがいる。アツ子さんっていう。

榎澤 アツ子さん。何かにはA子さんって書いてありましたね。

弦巻 ああそうかもしれない。兄はD・ゲンダーヌっていうんだけれども、兄はいわゆる

養子として来ているんですよね。実の兄妹ではない。

榎澤 なにかアイ子さんの家によく入り浸って……

弦巻 その辺はあの人たちの世界なんですね。日本人が考えるように、養子縁組をしっかりして戸籍上どうのこうのというわけではないんですよ。

榎澤 実際この誕生日というのも、戸籍簿というか原住民簿に載せるために作られたもので、ゲンダーヌさんも誕生日がはっきりしていないとかいいますよね。

弦巻 アイ子さんについては、昭和年代に入っているので比較的正確だと思いますね。ゲンダーヌさんの生年月日については、帰国する時に船の中で大正年代にしておいた方が有利だと他の人に知恵をつけられた形で決めたみたいですね。

榎澤 これを聞いていいのかわからないのですけれども、ウィルタ名というのは？

弦巻 ないです。たぶんね。つまり 1925 年に土人の居留地が設定されるでしょ。そして土人名簿が作られる。その頃からいわゆる民族の名前はつけなくなっている²⁰。

榎澤 ああそうですね。1928 年だったらそうですね。

弦巻 ゲンダーヌはそういう点では昭和ではないんだ、大正なんだと言っているわけですよね。ダービンニエニというのはウィルタ名の姓にあたりますよね。伝承としてウィルタ名は彼女らの中であったかもしれないけれど、土人名簿には載せられなくなっている。だから、北川アイ子で載っているわけです。

榎澤 こここの名簿の話も、大正生まれとか昭和生まれとかの時代区分で考えなければいけなかつたですね。

弦巻 そうですね。1926 年を境にしておくといいですね、大正 15 年をね。

榎澤 なるほど。それで、お父さんはこちらに移住されたんですね。

弦巻 そうですね。

榎澤 サマの。お母さんのアンナさんとお父さんのゴルゴロさんの二人はゲンダーヌさんのお話で色々出てきますよね。

⑤『私の生いたち』2段落目－引揚理由について

榎澤 それでは次にいかさせて頂きます。

『戦後、1967（昭和 42）年 2 月 28 日樺太から引き揚げ、網走にきて、現在ウィルタ協会や資料館ジャッカドフニの仕事のおてつだいをしています。』

ここで一番気になるのは、プライベートなお話になってしまふかもしれないですが、引き揚げ理由に何か明確なものがあったのかということです。サハリンで何かが

²⁰この点について、私が後日発見し読んだ北川アイ子氏の証言記録の「「ウィルタ民族の一人として」－日本で本当の気持ちを訴えたいと語る」「札幌民衆史シリーズ8」編集委員会編『証言：植民地体験 ポンソンファ（鳳仙花）－日本統治下の朝鮮・サハリンの生活－』（札幌郷土を掘る会・1997）において、「昭和三（一九二八）年…その頃は、日本人名で名付けるようになっていましたので、私の名もこのようになったのです。」（174 頁）と同様のことが記されている。

あつたことによって引き揚げたのか。それともよく書かれているのは、ゲンダーヌさんが網走にいるということで引き揚げてきたという書き方をされていたんですが、その理由が全てなのかということです。何かで読んだところでは、向こうで結構差別を受けたり、同胞からも最初の結婚、ゲルゴールさんとの半年間の結婚の後、彼がシベリア抑留されて生死不明の状態であったわけですが、その後朝鮮人の方と結婚された時に同胞の方から「なんで待てなかつたのか」と責められたというお話を書いてあつたのを見たことがあります²¹。そういうのも理由として入っているのでしょうか？

弦巻 私が聞いている範囲で一番大きいのは2つあるんですね。1つは、アイ子さんが、同胞からお兄さんのゲンダーヌさんことで責められたことです。同じ同胞の人といつても、ギリヤークの人だったかもしれないし、残留の在樺太の日本人だったかもしれないけど、たぶん向こうの少数民族の人だと思うんですね。その人たちから「なぜシベリアから兄貴は戻ってこなかつたんだ。みんな向こうで死ぬか病気になって帰つて来るのに、元気で日本に行くのは、シベリアで兄貴はきっとうまいことやつたんだろ。抑留生活の中で病氣にもならず元気でこっちに帰つてくるのは都合悪いから日本に帰つたに違ひない」と言われたそなんですよ。その時、「そんな兄貴ではない。源太郎はそんな兄貴ではない」と彼女は頑張ったんですね。お酒の入つている人に殴られたこともあるんですね。それは一度や二度言われただけではないし、殴られたのは何回かわかりませんけど、たぶん1回位だと思うんですね。「人間なんてわからねえさ」って言われて、その男に殴られたらしいです。簡単に言えば、「そういう所にずっといたらきれいなままの兄貴かどうかわからない」ってね。これが1つ目です。

それからもう1つ。土人教育所で戦争というものは教わった。天皇陛下についても教わった。しかし、天皇陛下とか戦争というものがこんなにひどいものかということがわかつた。それまでは、戦争というものは全くわからなかつたのにね。そして日本は戦争に負けるわけでしょ。勝つはずが負けるわけです。彼女はそれについて、「天皇や日本の人はどう思つてゐるんだ。それを本当に確かめたかった」とそういうことは言つていましたね。だから、同族の人から差別されたというのとはちょっと違うんですね。

榎澤 言い方が悪かったんですけども、差別のことは、ロシアの人たちによるウィルタの人たちへの差別があつたのかなという点でした。それとプラスアルファで同胞の人たちに悪く言われたことも付け加えることできるのかなと思ったわけです²²。

弦巻 それはあつたかもしれないですよ。でも、私はあんまり詳しく聞いていないですね。それは後から私の推測で考えてみると、貧しい時代に、まず自分たちの民族で物を分け合うにしても、同じ地域に住んでいてもまず同族の人から分け合うということはあつたかもしれないとは思いますけどね。これは私の勝手な推測ですけどね。

榎澤 そうするとやはり2つ。兄であるゲンダーヌの正しさを証明するということ。そし

²¹ 田中了『サハリン北緯50度線一続・ゲンダーヌ』(草の根出版会・1993)、43頁。

²² このような質問に至つた理由は、1995年3月14日付朝日新聞2面「男たちがみんな消えた ウィルタ：2（50年の物語・第31話）」に、「戦後、「お前ら日本のスパイだ、とよく悪口を言われた」というキム・ウンシンの発言が記載されていたことにある。

て、最初は素晴らしいものと教え込まれた大日本帝国とその国の支配者である天皇について色々問題を確認したかったということ。

弦巻 そうですね。戦争というものがどういう戦争だったかわからない。どうしてああいうふうになってこうなったのかがわからない。だから、どういう戦争だったのかを知りたいというのがあったんですね。

そこに、お姉さんたちから兄といふるということを聞いてね。お姉さんたち、先にこちらに来ていますからね。それとこれは一番の理由ではないんですけど、当時のソビエト政権下の中の生活がものすごく貧しかったということですね。物がなかつたり色々とね。子どもも5人おりましたし大変だったということですよ。お姉さん家族やお父さんもいるし、兄ゲンダーヌもいるから、そこへ行こうってね。まあ詳しくはわからないんですけど、結婚したゴン・アンツリさんがやっぱり決意の一つに入ると思うんですね。これは私の推測ですけれども、彼は後に朝鮮に行くのにはその方がいいと考えたかもしれませんね²³。

榎澤 やっぱりパートナーが了承しなければ厳しいものもありますものね。なるほど。後でテーマとしてお聞きしたかった部分だったのですが、僕は天皇とアイ子さんの関係が重要なキーワードになるのかなと思っておりました。田中了先生の『続・ゲンダーヌ』の方で、田中了先生がサハリンに行った時に、「テンノウヘイカはどうしているのか」とウィルタなどの人々に聞かれるという、そこから話が始まっていますよね²⁴。僕は初めてここを読んだ時、何か心臓を矢で射ぬかれたような衝撃を受けたんですね。まあ毎回読む度に衝撃が走るんですが。そこで思ったのが、この天皇陛下とウィルタの人たち、ゲンダーヌさん、あるいは、アイ子さん、あるいはその家族の皆さんたちとの関係を考えないといけないということでした。これは田中先生も書かれていましたが、我々のことを一般的になんて言っていいのかわからないんですけど、大和民族というか、彼らから言うと、シシャですね。シシャの人たちははっきり言えば意識していないわけですよね²⁵。天皇陛下と言えば、今もニュースで流れると、愛子様愛子様と様と付けているわけで、ちょっとご病気になられて、精神的に色々あって学校も行けないみたいだしとか、平気でワイドショーとかニュースで垂れ流されて、何の意識もなくそれを聞いている人たちがいる中ですね。戦争が終わって何十年、本来は忘れてはならないことだと思うんですけども、何十年経っても、「テンノウヘイカはどうしている」「シシャのカミサマは病気になるのか」とか……

弦巻 「わしらのこと忘れてないか」「覚えているだろうね」とかね。彼らにとったら、ボオ（天）というのが最高の神様ですよね。そのボオより偉いってわけでしょ。ボオは見えないわけでしょ。しかし、天皇は神様で現実に生きている、現人神（あらひとがみ）なんですよ。神様なんだから、わしら一人一人のことはみんな知っているだろう

²³ 1952年にアイ子さんと結婚したゴン・アンツリさんは15歳の時、樺太に強制連行され炭坑で働いていたとのことである。ソ連時代は漁網工場で働いている。司馬遼太郎・前掲書、163頁。

²⁴ 田中了『サハリン北緯50度線－続・ゲンダーヌ』（草の根出版会・1993）、10-11頁。

²⁵ 田中了『サハリン北緯50度線－続・ゲンダーヌ』（草の根出版会・1993）、10-11頁。

と考えるわけですよ。

アイ子さんの意識の中には、当時は、天皇がやった戦争、それはどういう戦争でどうして負けてどうしてわしらがこんななんちやったのかということを聞きたかった、確かめたかったというのがあったそうです。そしてもう1つは、さっき言った、兄ゲンダーヌが本当に人変わりしちゃったのか、確かめたかったという気持ちですよ。

榎澤 そうすると、1945年に戦争が終わって、まあ実質北の方では戦争は終わっていないわけですけれども、一応 45 年位とさせて頂いて、その後アイ子さんが引き揚げてこられるのが 67 年ですよね。この間、約 20 年あるわけですけれども、その間のアイ子さんの心境というものは、天皇陛下に対する疑問点、大日本帝国に対する疑問点というものが、今のお話ですとあり続けたわけですね。その反面、1980 年代や 1990 年代にリューバさんたちが聞き取りをすると、サハリン島のおばあさんたちは「今さら話して何になる。わしら泣きたいだけだ」とそういうふうな発言をされる方が多かった²⁶。最近の 80 年代 90 年代ですらそうですから、スターリン時代ですよね。肅清が恐ろしくて彼らがどんどんどんどん内向的になったというのは朝日新聞で読んでいます²⁷。確かに 20 年前位のウィルタの昔を振り返るみたいな特集記事で読んではいるんですが、アイ子さん自体はどうだったんですかね？ ソビエト時代のアイ子さんは？

弦巻 ゲンダーヌのところに来るまでの間、お父さんとお姉さん家族は 10 年位一緒に住んでいた。その間の貧しさというのは、あまり語られていないかもしれない。それは本当に大変だったんですよ。例えば、お父さんが煙草を飲みたいといつても煙草は手に入らないし。ちょっとした酒も手に入らないし。それで、彼女はいろんな仕事をするわけですし、ちょっと盗みではないですが、こんなこともしたと言うんですね。芋がちょっと高い所に積んであるとね。人が通った時に崩れたらしいんです。そして崖の下みたいなところに落ちていたから、これは拾って行っても盗みでないなと思ったそうです。それを拾って帰るとかね。とにかく貧しくてね、父さんは、今の言葉でいえば、わがままというか何もわからないからね。「あれ欲しいこれ欲しい」って言ったそうです。自分は子どもも育てなければならぬしね。まあ大変だったわけですよ。

これもあまり語られていないことなんだけど、いわゆる終戦の時に、「みんな引き揚げろ」って言われるわけでしょ。その時に、土人教育所の先生にね、「あんたちは残れ」と言われるわけですよ。

榎澤 川村先生ですよね？

弦巻 そう。残れと言われるわけですよ。これは彼女だけではないですよね。現地の先住民の人たち、少数民族の人たちに残れと。それからもちろん、軍属として使われてい

²⁶ 千葉茂樹・藤野知明「第6章 踏みにじられた北方民族の軌跡」原田勝弘等編『環太平洋 先住民族の挑戦』(明石書店・1999)、220-221頁

²⁷ 1995年3月14日付朝日新聞2面「男たちがみんな消えた ウィルタ：2（50年の物語・第31話）」では、ソ連時代、お年寄りたちが民族の歴史について孫間に聞かれても「何も知らない」「何も覚えていない」という言葉を繰り返したというエピソードが載っている。理由は、自分らの身を守るためにあったという。また、「日本のスパイ」と後ろ指を指されたともいう。しかしその結果、民族の過去を閉ざすことになり、ソ連の政策下で民族の言葉やトナカイ放牧など伝統的生業も衰退していったという。

たり、それから源太郎さんとか国境にいた人たち全部に「お前たちはこの民族だから残れ」というわけですよ。これはアイ子さんの言葉を借りれば、「心臓が口から出でね、頭がどっかに行ってしまうくらいぎょうてんした」って言うんですよね。「もうどうなるんだろう」とね。だってね、教えられたのは米英鬼畜でしょ。更にロシアが入ってきた。敵が入ってきてね、男はみんな銃を持っているんだけれども、子どもや女や年寄りはどうなるんだろう。それと「お前らは日本人ではなかった。もともとこここの民族なんだから、お前ら日本人ではない」と言わされたわけでしょ。これは裏切られたという單なるものではなかつたらしいですね。彼女の怒りと驚きとね。それが一つあるんですね²⁸。

それにもかかわらず、住民が引き揚げるのに、選別というか分別というか、その仕事をさせられた。これはアイ子さんだけではないと思うんだけれども、「住民の内、まず優先的に健康な者を汽車に乗せる。病人とか妊婦は置いてけ。年寄は次。それらを選り分けして、何人ずつの組にしろ」と言われるわけですよ。その仕事をさせられるんですね。そして、ポロナイスク（敷香）から、ユジノサハリンスク（豊原）まで運ぶわけです。運ぶ時の引率係になるわけですね。自分は帰れないけれど、彼女はその仕事をやらされるわけです。しかも、「汽車の中で子どもは泣いたら危ないから、泣いた奴は窓から放って捨てろ」とも言われるわけですよ。それから何度もね、「お腹に赤ん坊のいる奴はいないだろうな」とそういうことも言われたそうです。

アイ子さんはおばあちゃんたちに、「次にあなたがたを運びますから」と言ってね。そこに置いておいてもらって一旦戻ったら…それは何日間もかかることでしょ。中には見えなくなった人いるんですね。次に、いろんな人運んだときに、「私のおばあちゃんどうしたの」と言われてね。ものすごく責められたというんです。もうそれは何とも言えなかつたというんですね。そういうことがあったんですね²⁹。

榎澤 そういうひどいことを言われた後にそういう仕事をさせられているというのは、想像できない苦しみですね。

弦巻 そうですね。その辺は聞いたことがある？

川村 汽車のことは聞いてますね。

弦巻 それから、選別というか、人間を分けて運ばされたというのね。詳細に、何人ずつというのを聞いていないんですけどね。

もう一つは、そこで大変な事件が起きるんです。知り合いの人が妊婦であったことがわかるんですよ。それが長い列車の中で産んでしまうんですよ。あれは川村先生の？

川村 親戚とか言ってましたね。

弦巻 それで子どもが生まれたんです。その子どもは幸いなことに仮死状態のように泣か

²⁸ この部分に関わる内容について、前掲『証言：植民地体験 ポンソンファ（鳳仙花）』、174-175頁では、「…役所の土人係が来て「お前たちは、もともとソ連の人間だ。ここに残れ」と言ったのです。私は初めて「だまされていた」と思いました。私は日本人になるためにがんばり、日本軍の仕事を死に物狂いになって働いたのにと思うと、内臓が頭にのぼってしまうほど驚き、役人たちを本当に憎らしく思いました」と記されている。

²⁹ この部分について、前掲『証言：植民地体験 ポンソンファ（鳳仙花）』、175頁にも記載あり。

ずに生まれたんですね。それで彼女は慌てて辺りの紙を集めて包んで、そして布かな
んかで包んで、リュックサックのような袋にいれたんですね。いよいよユジノサハリ
ンスクに着いた時に、汽車だからガンガンッと急停止したわけですね。乗客がその衝
撃でグワッとなるでしょ。その時に、猫のような鳴き声がしたって言うんですね。そ
れで、「いや～見つかった。やられる～」とアイ子さんは思ったんですね。それで列車
から逃げるよう降りた。そしたら、目の前に警察官がいたというんですね。その警
察官が、何とオタスにいたときに知っていた警察官だったそうです。それで、その時
に必死になって、その警察官に、「実は子どもなの」と言ったら、「アイちゃん、わ
かった」って言ってくれてね。その警察官が袋とアイちゃんを連れて自分の家に行つ
てね。自分の奥さんに洗わせて、うまく処理してその子どもとお母さんを日本に帰して
くれたそうです。そういう体験も彼女にはあるんですね。

それでその親子が日本に着いてから、何年くらいかリンゴだとかなんか贈ってきて
くれたそうですね³⁰。

川村 そうですね。

弦巻 その親御さんはね、アイ子さんという名前を間違ってアヤ子さんと覚えていたらし
くてね。生まれた子どもにアヤ子ってつけたみたいですね。そういうことがあったそ
うです。

榎澤 それだけ感謝されていたということですね。

弦巻 まあ命の恩人だよね。

榎澤 神と言つていいかわかりませんが、神に値する人ですよね。その人がいなければ生
きてられない訳ですからね。

弦巻 そういうことがあったそうです。

榎澤 口述の『オタスの暮らしと私』に記載されていましたが、川村先生が引き揚げる時
に、「あなたは自分の考えでやっていけるね」って言ったのに対して、アイ子さんは「で
きるよ。そのかわり、自分はウィルタには戻らないし日本人にもならない」というふ
うな発言をされている部分もすごく僕は気になっていました³¹。この「ウィルタにも
戻らないし日本人にもならない」という言い方をしているところですね。これは勝手
な推測なんですけれども、ゲンダーヌさんがウィルタとして生きると決意する以前に
よく言っていた「オロッコは滅びゆく民族です」という考え方がありましたが、アイ子さんにもあ
ったのかなという印象を受けたんです。そして、一つここで重要な分岐点のお話を聞け
たこと、良かったです。そして、もう一つ、いわゆる日本人の列車での仕分けとでも
いいですか、それを行わされて、命がいくつもあっても足りないような仕事、それと
心に深く傷が残るような仕事をさせられたということ。こちらは初めて聞くお話です
ね。

弦巻 これは推測ですけどね。アイ子さんはこれほど差別される民族であるとね。ウィル

³⁰ ここの部分について、前掲『証言：植民地体験 ポンソンファ（鳳仙花）』、175頁にも
記載あり。

³¹ 北川アイ子（口述）「「オタス」の暮らしとわたし」北海道立北方民族博物館『第一回
特別展 樺太一九〇五—四五—日本領時代の少数民族 -』（1997）、15-18頁

タという民族に戻るというのは、すぐに決心できなかったと思うんですね。だけど日本人にも絶対なれない、こんなひどい日本人にはなれないと思ったと思うんですね。

榎澤 そうですよね。これだけの被害、被害ってもんじゃないですね。人権蹂躪されて、ある意味、ジェノサイドですよね。民族自体が抹殺されるような状況にまで追い込まれて。どこの国につきたいかとなっても……まあ、どこの国につくという考え方は、国民国家の考え方ですから。ウィルタの人たちの考え方からすると、どこの国に所属するという考え方自体が間違いだと思うんですけれども。

弦巻 それからね、これはちょっと前後はわからないところがあるんですけどね。駆り出された北方少数民族の若者たちのように国境線にいれば銃撃戦の末にやられたのはたくさんいますね。ゲンダーヌのように生き残ったが故にシベリアに送られるわけです。ソビエト軍が戦車でどんどん北からやってくるわけですね。その時、親たちが逃げて子どもたちが逃げられない時、その時の残酷な姿を彼女は見ているわけですよ。いろんな例があつたらしいけれども、一つはね、親が子どもは誰かが何とか生かしてくれるにちがいないって思ってね、木に縛って親だけが逃げた例があるのです。その後、ソ連の戦車に日本人の子どもをたくさん乗せて、ソ連軍の戦車がやってきた時に「この子どもたちの親はいるか」という風に言われたそうです。その時に引き取った親もいるんだけれども、その内の一人の少年が「絶対俺の親でない」って言ったそうです。

「僕の親であつたら僕を置いて行くはずがない。僕を置いて行ったのは親でない」って結局親のところに帰らなかつた。親が泣いて謝つても、絶対帰らず、ソビエト軍と一緒にまた北へ行った。それを目の当たりにした時に、母親もかわいそうだし、子どももかわいそうだし、自分もどうにもできない……いや、彼女は説得したらしいよ。

「説得したけれど、その少年が絶対言うことを聞いてくれなかつた」って言ってたね³²。

榎澤 そうですね。こういう話は聞いていないですね。

川村 「あの子どうしたかな」って、ここ（ジャッカ・ドフニ）で言っていたことがあるんですね。

榎澤 その置いてかれた子どもの心境を考えれば……自分がその立場だったら、言葉では言えないですね。その何というか、引き裂かれるような心境になって……

今度はソ連の話で、北方民族の方々を日本軍のスパイ容疑でシベリアに連れて行った人たちもいるわけですよね。実は調べていくとその後も、先住民狩りみたいのがあって、それもアイ子さんは見ているわけですね。

弦巻 ゲルゴールさんは結婚してね。まあ、結婚した人たちの中には、結婚しているということ、妻もいる子どももいるという風になれば、ソ連としても大目に見てくれるんではないかと考えたそうです。ゲルゴールさん自身は銃を持って戦った方ではないらしいんですね。結局、日本に協力したということでね。軍の仕事を少しでも手伝つたりね。要するに、残留少数民族の中の男を探して連れて行ったというところがあるみたいですね。ゲルゴールさんが何の容疑で引っ張られていったのか私はよくわからないんだよね。

³² ここの部分について、前掲『証言：植民地体験 ポンソンファ（鳳仙花）』、176頁にも記載あり。

彼女はね、もう帰って来れないんじゃないかと、どこに連れて行かれたかわからぬ、という風に思い込むわけですよね。そして後にゴン・アンツリさんと結婚するわけですよね。

榎澤 確かゲンダーヌさんたちも、案内で頭を打ち抜かれたワシューカさんを知っていたからゲルゴールさんが連れて行かれたとか、いろいろ考えたけれどもゲルゴールさんの容疑理由は結局わからないと述べていましたよね。やはりその後かなり先住民狩りがあった？

弦巻 そのところは僕もよくわからない。もう一つはね、捨てられた現地の民族や朝鮮民族にとって絶対に忘れられないのは、日本人が上敷香かどこかで、朝鮮人を教会かどこかに入れて惨殺するんですよね。そういう事件があるんですよね。これはちょっと調べた方がいい。そして、シスカは放火されるんですね。それで火事で逃げるというのもあるんですね。

いずれにしても、そういう混乱の中で様々なことがあったんじゃないですかね。

榎澤 そうすると、アイ子さんより前に、ゴルゴロさんとかアイ子さんの姉妹の方が網走に来られているわけですけれども、アイ子さんより先に来ている理由というものはありますか？

弦巻 一言で言うと、ソビエト政権下での貧しさとね、ゲンダーヌに頼った方がいいんではないかということだと思うんですよね。これはお姉さん夫婦、家族だけではなくて、他の民族の人たち、例えば、ギリヤーク（ニブフ）の人、他のウィルタの人たちも、北海道に何家族か来てますからね。そして、お姉さんは日本人になるから帰るというか、なるために帰るというか、それで網走に来た以上は日本人として生きると決めた。これが後に、姉妹ではあるけれども、ウィルタ復権の運動に対して絶対協力しないということに繋がります。前後しちゃうけれども、アイ子さんは「私は日本人にもならない」と思ったけれども、先ほど言ったような理由で、日本に渡って生活して本当のことを確かめたいと考えたわけです。しかしそれに対して、お姉さんたちは日本人になる、なるから日本に帰るんだし、網走に行った以上は日本人として生きるんだと考えたのです。

榎澤 そこに大きな違いがあるんですね。確かに、ゲンダーヌさんもお兄さんとの関係でも似たようなことがありましたよね。ゲンダーヌさんがお亡くなりになる直前に、お兄さんのヒラナカさんの考えが変わりますけれども、それ以前のヒラナカさんは、「そんなでつかい敵に立ち向かっていってどうするんだ」みたいな発言をされていたと思うのですが……そうすると、お姉さんたち、アイ子さんの妹さんもそうなんですかね？

弦巻 そうだと思いますね。

榎澤 どちらかというと、ヒラナカさんの考え方方に近い。

弦巻 そうです。

榎澤 ありがとうございます。色々なお話を聞けました。それでは次にいきたいと思います。

⑥『私の生いたち』3段落目－同族交流について

『ことし、去る6月28日～7月4日まで、サハリン・ポロナイスク市を訪問してきました。生まれ育ったオタスには行けませんでしたが、なつかしい友人に会い、おたがいに元気だったので、ほんとうに嬉しかったのですが、苦労した年寄りの方がたが亡くなっていたのは残念でした。』

榎澤　これは、ゲンダースさんの三つの夢の一つ。

弦巻　そうですね。道民の船で行ったんですね。

榎澤　道民の船？

弦巻　ソビエト政権下だけれども、ソビエトと日本との間で、年に一回かな、船を出すってことになって、北海道から何人かが応募して許されたんですよ。その中に、ゲンダースさんとアイ子さんが入って、それから田中了さんも付いて行ったんですね。

榎澤　この交流というのは何回位やられているんですか？

弦巻　よくわからないな。でね、向こうに着いてから、終始特務機関っていうようなものかな、ついてたっていうんだ。本来、ポロナイスクまでは行けなかつたんだけど、特別周ってもらったっていうんですね。だから本当はユジノサハリンスクぐらい今までだったんですよ。それから、自由な行動ではなかったけれども、周れたそうです。

榎澤　でも、ここで色々貴重な出会いとかがあって、リューバさんも目を見開かされるようになつた集まりですよね³³。

それでは次に行かせて頂きます。

⑦『私の生いたち』4段落目－日本語教育と差別

『私はオタスで生まれ「土人教育所」に入学しました。6年生までウィルタ・ギリヤーク・キーリン・サンダー・ヤクトなど少数民族の友だちと学びました。その時は、それが差別であることも知りませんでした³⁴。毎日、日本語で教えられ、日本人になるように教え

³³ 千葉茂樹・藤野知明「第6章 踏みにじられた北方民族の軌跡」原田勝弘等編『環太平洋 先住民族の挑戦』(明石書店・1999)、226-227頁によれば、(1981年7月、初めての交流においてゲンダース氏が)「これからは、ウィルタ、ニブヒなどの少数民族が力を合わせて一緒に幸せを築こう。自分たちの幸せは、自分たちの力で手に入れよう。」という挨拶をしたことに対し、その場に居合わせたキタジマ・リューバやキム・ユンシンは大きな衝撃を受けたという。これは、自分たちの同胞が初めて自分らの言葉で「自立」を呼びかけたからだという。

³⁴ こここの部分について、前掲『証言：植民地体験 ポンソンファ（鳳仙花）』、174頁に以下のようなエピソードがあげられている。「一四才の卒業近く、先生から「おまえたちのうち、上の学校に行きたいもの…」という話があつて、私はさっそく希望しました。ところが、しばらくして校長先生は、「上級学校にやりたいがダメになった」と言って悲しい顔をしました。理由は言いませんでした。私はこのときのことによく覚えてています。非常にくやしい思いをしました。」

られました。街では、どこでも「オロッコ」といって馬鹿にされました。お母さんを恨みました。それは今でも忘れられません。』

榎澤 この部分は、田中了先生の本に細かく書かれている部分、土人教育所の話、あるいは川村先生の教育の仕方とかが色々書かれていると思うんで、そこで調べればわかると思うんですけど³⁵、アイ子さん自体は最初生まれた時は日本語教育を受けていたことになるんですか？ それともウィルタ語？

弦巻 家族ではウィルタ語です。

榎澤 外では、日本語という形ですね。

弦巻・川村 そうですね。

榎澤 あと、ここの話がかなり印象に残ったんですけども、“お母さんを恨みました”という部分ですね。この点で何かお話されていたことってありますか？

川村 わかります？

弦巻 いやわからない。

川村 買い物に行ったらね。お母さんが日本語知らないんで、ウィルタ語でお話するんですね。やっぱり言葉によって、「あの人はウィルタだ」って指差されるわけです。

弦巻 「オロッコだ」って言われる。

榎澤 ゲンダーヌさんも嫌がっていたそうですね。「ゲンダー、ゲンダー」でお母さんに言われて離れて歩いていたというのと同じですね。

川村 同じだと思います。アイ子さんは日本語できるんで、買い物する時も日本語で言いたいんですけども、お母さん全然日本語知らないから、ウィルタ語で買い物するんで、やっぱり友達なり知っている人が……

榎澤 やっぱりそういうことがふまえられて、“お母さんを恨みました”という言葉になっているんですね。

川村 言われたりするのは小学生の時ですからね。

弦巻 北海道でもそうですけどね。日本人っていうのは、アイヌの人に対して「あっ、イヌ来た」とかさ、そういうこと言ってね。それと一緒にですよ。オロッコっていうのは、文字も知らないし原始的な民族でね、なまくらで役に立たない、そして程度は低いという偏見に満ちているわけでしょ。土人土人って言っているわけですからね。だから、そういう点で「オロッコだ」と言われることは、差別がもろに出てくる言葉と感じていたんじゃないかな。

榎澤 アイヌの人にオロッコと言われても何とも思わないけれども、日本人がオロッコと言うと、弦巻先生がおっしゃられたように、差別の意味が乗っかって来るから、「何だ馬鹿にするな」と思うそうですよね。

弦巻 そうかもしれない。例えば、ギリヤークの人がオロッコって言ったりするのはあまり差別感がないっていうかね。日本人に言われるのはとりわけ嫌だっていうかね。

³⁵ 田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』(現代史出版会・1978)、39-44 頁；田中了『サハリン北緯 50 度線一続・ゲンダーヌ』(草の根出版会・1993)、30-34 頁。

そういう思いはあったかもしれない。

川村 権太アイヌよりも下に見られている気がしたっていうんですね。

榎澤 差別においても、更に少数民族間において差別されるわけですね。

それと読んだ部分でもう一つ興味深いのは、“お母さんを恨みました。それは今でも忘れられません。”って書かれているんですね。

川村 この後はちょっとわからないですね。

榎澤 これを書かれたときの心境が表されていると思うんですね。これも勝手な推測ですが、お母さん自体は好きだけれども、あの時の差別から逃れたいがために、お母さんに対してしてしまった罪の意識とでもいうかそういうのがあるのではないかと。

弦巻 そうでしょうね。

榎澤 ここが涙が出てくるところというか。僕自身として感じたところですね。

それでは、次にいかせて頂きます。

⑧『私の生いたち』5段落目－取調時の黙秘について

『17のころから軍隊の仕事をうけおっているところで働らきました。毛皮の仕事、魚の加工などでした。』

榎澤 仕事の部分はここだけですね。それで、えっと何でしたっけ、青年学校でしたっけ？

弦巻 青年道場。

榎澤 あっ、青年道場ですね。そこで、ニブフの女性の方と二人働いていたんですよね。

その後の話ですが、ロシア兵が攻めてきた時にも、アイ子さんは何か聞かれても絶対しゃべらなかったそうですね。それはアイ子さんだけではなくて、絶対大事なことはしゃべらないというウィルタの人たちの性格の話になるのですか？

弦巻 そのところだけで言えば、アイ子さんが覚悟したっていうことです。例えば、ソ連兵がどうしたこうした日本兵がどうしたこうしたとかね、知っていることも絶対言いたくなかったと思うんですね。それからもう一つ、これは、アイ子さんとは違うんですけどね。ゲンダーヌとか他の人たちが話し合っているようだけど、裁判にかかった時に、黙秘に近いというか、絶対口を割らないわけですよね。そういうのは、ボオの教えっていうか、ボオが支えになるわけですね。そこはちょっとアイ子さんとは違うかもしれない。

榎澤 ゲンダーヌさんの仲間たちで、ウィルタになったから、ボオを理解してしまったから、うちの息子は死んでしまったんだという部分が田中先生の本にも書かれていました³⁶。アイ子さんの場合はボオの理解とは違うということですね。確か、誰かに「一切口を割らない方がいいよ」と言わされたというのはアイ子さん自身が語っていたんですよね。でも、かなり口の固い方ではあるんですよね？

弦巻 そうですね。

³⁶ 田中了『サハリン北緯50度線－続・ゲンダーヌ』(草の根出版会・1993)、19-24頁。

榎澤 今の話に繋がってしまう部分かもしれません、それでは次にいかせて頂きます。

⑨『私の生いたち』6段落目—ソビエト時代の生活について

『戦争が終るときソビエト軍が入り、日本の軍隊にいた少数民族の青年たちはシベリアに送られました。そしてほとんどはそこで死に数人だけが日本に帰りました。私たち女と年寄りと子どもだけが残されました。』

榎澤 こここの部分の前半部分は、やはり田中了先生の本でかなり書かれているところですね。それから“私たち女と年寄りと子どもだけが残されました。”の部分は、先ほど話された部分だと思うんですけれども、何か他にもありますかね？色々聞いた話とかで？ どういう生活をしていただとか。やはり貧しい生活だと差別を受けていただとか。

川村 働き手をとられちゃっているわけですよね。日々の糧というか食べるものが無くて皆母さんのところに来た。「母さんは人が良いものだから、私が働いてもらった給料で食べ物買って、来た人みんなに与えていた。こんなに苦労して働いているのに、母さんはみんな人にやっっちゃった」って、そういうことちょっと言っていました。それは前に言った、みんなで分け合って生活していくという生き方なんですよね。

弦巻 それはウィルタらしいんですよね。ウィルタというのはそういうものなんですよね。

榎澤 マスとかが獲れなくても誰かが三匹獲れば勝手に持っていくんですね。だから、資本主義社会とか所有の概念を持っている人間の考え方からすると、なに人の物勝手に持つていて盗人ではないか、あいつらだめなやつらだという風に繋がっていったわけですよね。

弦巻 何で読んだかは忘れたのですけど、ごく少量の食べ物ですよ、それを持ち帰ってみんなに分けているんですよ。どんな物も一緒に分けるというか。これは少ないから私が食べるには仕方ないというのではなくて、少なくとも更にそれを分けるんです。それが習慣なんです。

榎澤 だから、貧しくても乞食はいなかったという書き方をされてましたね³⁷。

弦巻 そうそう。それはね、共有の概念というのか、あるいは、平等に分けるというのは非常に根強くありますね。

榎澤 南アフリカとかアフリカの南部にも似たような考えがあって。僕はそちらの方を先に知っていました。“ubuntu”、日本語で人間性というのですけど、向こうの言葉で共有の考え方を示すのがあって、もしかすると何かつながりがあるのかなと勝手に推測していました³⁸。話が飛んでしまって申し訳ありません。

³⁷ 田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）、44-49頁。

³⁸ 英語だと“humanity”であるが、これは個人主義的な意味合いを持ち、どちらかというと共同体主義的な意味合いを持つ“ubuntu”と異なる。

ここは本当に重要な話ですよね。ウィルタの生き方というか、僕はここがこれから一番考えなければいけない部分かと思っていました。所有しているから何してもいいんだという考え方、これが今破綻をきたして世界中の大不況に繋がっていったと思うんですね。

弦巻 そうそう。

榎澤 ここもこれから検討したいと思っているんですが、それでは次にいきたいと思います。

⑩『私の生いたち』7・8段落目－「鬼」という言葉

『23歳のとき、キーリンの青年ゲルゴールさんと結婚しました。6ヶ月後、戦犯としてとらわれてシベリアに送られました。』

榎澤 こここの部分は先ほど少しお話になられたところですよね。お聞きしたいのは、この次の部分です。

『私は戦争とはこんなに罪のない人を不幸にするおそろしいものかとつくづく思いました。戦争に負けて日本の教育はウソだったと心から思いました。心が鬼になりました。日本人が信用できなくなりました。』

榎澤 こここの部分が最初に先生がおっしゃって下さった部分に繋がるのかと思うのですけれども、引き揚げという言い方が正しいのかはわかりませんが、これがアイ子さんが網走に行くきっかけになった理由になったのかなと思っていたのです。特に印象深かったのは、後ろからの二文目。“心が鬼になりました。”という言葉。鬼という言葉、これも勝手な推測ですが、ウィルタの言葉にないのではないかと思ったのです。そもそも、恨むとか喧嘩をするとか戦争をするという言葉はなかったはずですよね。ゲンダースさんも講演会や勉強会で、ウィルタ語を日本語に通訳してくれる田中先生に日本語の戦争という言葉に訳さないでくれと言っていたくらいですね³⁹。この言葉 자체をアイ子さんに言わせたということがショックだった、衝撃を受けた部分なんです。ちょっと話がずれてしまうかもしれません、鬼になるって、ウィルタの方々はそういう性格ではないですよね？

弦巻 そうですね。伝説的な言葉では、カリザミだったかな、鬼がいるんですね。

榎澤 鬼がいるんですか？

弦巻 いるんですよ。これは全く別の話になってしまふけど、子どもたちが囲炉裏の周り

JY Mokgoro, “Ubuntu and The Law In South Africa” <
<http://www.jol.info/index.php/pelj/article/viewfile/43567/27090>.>

³⁹ 田中了／D・ゲンダース『ゲンダースーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）、78-79頁。

で親の言うことを聞かなかったり喧嘩したりすると、テントの一番上の方からカリザミの手がスッと降りてきて、子どもたちを連れて行っちゃうというんですね。「お前ら連れてかれていいいのか」、「手が降りてたらどうするんだ」と親が言うんです。そして、カリザミは真っ赤に燃えた木とか斧とか熱い鉄のものを握らせるとチチッと逃げるというんですね。

榎澤 そういう伝承があるんですね。

弦巻 あるんですね。僕はゲンちゃん（ゲンダーヌ）に「鬼に角があるのか。角が無かつたら鬼で無いよな」って言ったりなんかしてね。「角は無くたって鬼は鬼だ」って彼は言うわけですよ。でも、アイ子さんが言っている心の鬼っていうのはその鬼ではないんだよね。そういうことではなくて、本当に怒りがね、心が焼けるように怒りに狂わないと、自分が怒りに狂った覚悟をしないと生きていけないという意味だと思うんですね。

榎澤 だから、こういう結果を受けて、本来の鬼の意味に別の意味が付け加わってしまったわけですね。確かに夢に関してもそうですよね。ゲンダーヌさんのミニトリチビ。ウィルタ語の夢は元々は寝て見る夢だけだったのが、学校教育を受けて、将来とか未来を表す意味が付け加わったんですよね⁴⁰。

弦巻 そうですね。

榎澤 こちらの方（鬼）は厳しい意味が付け加えられてしまって、僕自身やはり心痛かった部分ですね。

それでは次に行かせて頂きます。

⑪『私の生いたち』9段落目—オタスの川への身投げ

『私はポロナイスクの工場で働らきましたが、その生活の苦しさや絶望のあまり、いちどはオタスの川をみつめて、ついに身を投げました。しかし死にきれませんでしたし、兄や親たちの苦しさを思ってたちなおることができました。』

榎澤 こここの部分が正に20年間のサハリンでの生活を表しているところだと思うのです。生活の苦しさとかっていうのは、給料を持っていてもお母さんがウィルタの考えで物を買って皆に分け与えてしまうという部分とか、あるいは、給料自体も安いわけですよね？

弦巻 安い。

榎澤 その安い中で生活も大変であったというのは弦巻先生も先ほどおっしゃられた部分だと思うのですが、この後のオタスの川に身を投げたというお話は何か聞かれてますか？

弦巻 本人は本当に頭がおかしくなったって言ってましたよ。頭がおかしくなって「もう

⁴⁰ 田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）、286頁。

いい！」って言って飛び込んだら、橋から水面までの高さがそんなに無かった上に川が浅かったんだって。それでその瞬間にバシャッてなって目が覚めた形でスッと立つたら腰より水が下だったって言うんだよね。そういうことは言ってました。だからこれは事実なんだよ。事実なんだけど、うつ病になって悩んで悩んで悩んで遂に飛び込んだってのとちょっと違うよね。いわゆる希死を念慮するのとかそういうのではないんだね。そういううつ病的な状態ではなかったんだけど……

榎澤 例えは、いくつも悩みが重なると、頭がパニック状態になってしまいますよね。

弦巻 そうそうそう。そうなんですよね。

榎澤 その結果、こんな世の中いいやという風になってしまふというのは、僕自身も経験があることです。まあこのことと一緒にしていいのかわかりませんけど。ロシア政権側からも色々なことをされ、言葉に表されないことが色々重なって、その結果パニック状態になってしまった。それで川に飛び込んでみたら、本当は死ぬ気だったけれども、結果として水面までの深さが腰より浅く足がつく状態であって、また生きるということになったわけですね。

弦巻 その時に「なんということをした」というかね、思い直したらしいんだね。僕にはそう言っていたな。そういうこと何か話聞いていた？

川村 聞いてないです。

弦巻 よく言っていたよね。笑ってね。

川村 細かいこと聞いていないですけれども、「川に身を投げたらここまでだった～」って笑ってはいましたけど。

榎澤 後でお伺いしようと思っていたのですが、アイ子さんは全体を通じてこういう辛い思い出もケラケラ笑いながら話をされるんですか？

弦巻 そういう面もあるけれども、忘れられないこだわっている面もありますよ。

榎澤 こだわって？ やはりかなり内面傷つけられて？

弦巻 そうですね。だから極端なこと言うと、これ一番最後の頃、かなり重くなってきてからになるんだけれども、自分が病床に臥してね。「私って騙されて生きてきた」ってそういうこと言ってましたよ。「騙されて生きてきた」ってね。中味は言わずにですがそれは例えば……日本人になれって言われたりさ、そして神様と言われたのが神ではなくてね、色々あるわけでしょ。そしてこっちに来てからも軍人恩給もらえるってもらえないでしょ。いろんなふうにね。極端に言うと、僕らにも騙された思いはあるかもしれないよね。更に例えば、資料館にもっとお客様入るんじやないかと思っていたかもしれないしね。あと病院に入れば、家族とかもっと色んな人たちに親切にされて看護士さんに親切にされると思ったかもしれないしね。何がってことは言えないけれどね。とにかく彼女は「私は騙されて生きてきた」って言ってましたね。振り返ってみると、辛さというものをあけらかんと忘れるというタイプではなかったですよね。もちろん、「資料館たのみます」、「よろしくたのみます」とも言っていましたが。

川村 時々、「日本人嫌いだ」とも言ってましたしね。

榎澤 確か『私の生いたち』の後の方にも“シシャとはまだうちとけられません”という書き方をされていましたね。

弦巻 お父さんがね、「日本という国もシシャもボオが作ったんだ。だから仲良くしなけれ

ばいけない」と言っていて、それが自分の教えとして入っている。だけど、打ち解けないものはあるんです。

アイヌとか、他の民族の方がここに色々来ることがあるでしょ。例えば、ネイティブ・アメリカンの人たちとかね。イラクの亡命している人たちが来たりね。そういうことがあったんです。あるいは、中国のウイグル族の学生さんが来たりとかね。その時に、我々以上に連帯感を感じる。「アイヌの人の集会とか少数民族の人たちの集まりがある、ぜひ来ませんか」と言われると「絶対行きたい」と言うんです。

榎澤 確か、「アイヌの方の集会に参加してすごくうれしかった」と言っていたんですね。

川村 長旅にもかかわらず、すぐ踊りだしましたもんね。白老に行った時にね。

榎澤 白老だと網走からかなり距離ありますね。

弦巻 そういう意味では、身を投げ飛び込んだけども、こんなに浅かったと笑う面もあるけれども……だけどなんていうか、自分の生涯を振り返ると辛いものたくさんありますよね。例えば、これも後で出てきますけど、ゴンさんという夫がいなくなりますよね。恨んでないと言っていますけど、それはわからないですね。

また、お子さん達の結婚についても辛い苦しい思いをしていますね。

榎澤 お子さんたちの？

弦巻 ええ。結婚したい本人同士は話し合ってるんですよ。ウィルタの女性と朝鮮人のゴンさんとの間に生まれた子どもであるということ。相手は日本人だけれども全部知っているわけですよ。ここ（『私の生いたち』）に書いてませんけど彼女は、例えば二番目のお子さんが結婚するときも、結婚相手の家の玄関に入るとき崖から飛び降りるような気持ちだったと言っているんだよね。絶対血はごまかせないって。いずれわかるんだからね。私と朝鮮のゴンとの間に生まれた子どもだとしたら向こうは、それでも良いですと言うか言わないかわからないから。息子は結婚したいと言うからね。それは田中了さんとも話したらしいんだよね。田中さんも言うべきだと言ったそうです。絶対息子を信じてると。わかってもらえるからって。だけど自分はそうは思うけども、そこの家の前に行ったらね。ガタガタ震えて。そういうなんていうかな、すっごい気の強いね腹の据わったところもあればね。同時にね、これは複雑だね。日本人を恨んでいないというのも嘘だし、だけど同時に彼らウィルタはウィルタでどんなに少なくたって民族なんだからっていうふうにも考えているし、アイデンティティとか誇りとかがあると同時に、「ウィルタはバカさ～騙されてばっかりで。酒ばっかり飲んでちゃんと仕事しないから馬鹿にされてばっかりで」ってね、まあ卑下するというかねそういうところもありましたし。いくつかの言葉で括れるような人ではないですね。

榎澤 そうですね。ケラケラ笑うというのはそういう性格もあるんでしょう。しかしこれは僕の今までの経験なのでそれにあてはまるかどうかはわかりませんが、笑う人が実はナイーブで、色々考えて周りに気を遣った上で笑っていることもありますよね。本心から笑っている場合もありますが、色々心の中で考えた上で笑っているという人を見かけます。だから、ケラケラ笑うという風に書いてあったので、簡単に、そういう方だったのかと質問させて頂きましたが、これだけの経験をしていて、まあ本心か

ら笑う時もあるでしょうけども、色々なことを踏まえた上で笑うという風に感じておりました。人間、本当に悲しいと涙が出るどころか笑い飛ばすしかないというところまでいきますよね。ですから、そういう笑いも入っているのかなと思ってはいたんです。

弦巻 そうですね。前後しますけど、彼女は通称“やま”って言っていますけど、林に行くのが好きなんですよ。山菜を探ったりキノコを探ったりするのがすごく好きなんですよ。あれはただならぬ好きなんですよ。それは一番癒される場所だったんじゃないかな。

榎澤 確か、先生の著作で、“山こそが病院だった（弦巻）”って書いてありましたよね？⁴¹

弦巻 そうそう。

榎澤 本当に癒しの場だったんですね。

弦巻 例えば、量的にあんなに必要ない位の量を採るわけですよ。結局、娘のところに送ったり息子のところに送ったりする分もあるし、人に分ける分もあるし。だけど、自分の食べる量はたかがしれているわけですよ。それで決して捨てる事はないですよ。気前がいいんですよ。お姉さんとか行けない人に配るわけですよ。分けてやるのも楽しいのかもしれないけれども、山の中が自分にとって自然というかね。

川村 採ることがおもしろいっていうか楽しいっていうか。

弦巻 やっぱり無心になれるっていうかね。もうちょっとオーバーな言い方をすればね。このうるさい世相から離れるというかね。

川村 ほんと好きでしたよね。まだ雪、全部消えない内くらいから歩いているような感じで。フキなんかまだこれくらいの採ってきてたかな。

弦巻 だから、雪が降るぎりぎりまで採りに行ってね。でも足が悪いんですよ。足が悪いんだけれども、林の中や笹やぶだとか色んなところを行ってね。

榎澤 昨年ここを訪問させて頂いた時に、先生のお話の中に、先生が車で麓まで連れて行くというお話がありました。その時、道無き道の前で、「あっ、去年はこっち行った」とか全部覚えていて、山菜を探りに行くというお話をされてましたよね。はあ、すごいなって思ったんですよ。

弦巻 やっぱりね、記憶力は大したものですよ。こういう林道の奥まで行くわけですよ。「ここに捨ててくれ」って言うわけですよ（笑）

榎澤・川村 （笑）

弦巻 だから置いてくるわけですよ。ずっと奥から林や市の道路や道道に出てくるまで時間かかるわけですよ。たいていお姉さんと一緒にすけどね。お姉さんと一緒に採ってくるわけですよ。採ってきたものを、例えば市道と林道の境目の辺りに拡げてね。選別するわけですよ。食べれるものとか食べれないものとかをね。形のいいものとか良くないものとかね。これは弦巻にやる分とかね。

⁴¹ 正確には「今、アイ子さんの望郷の念はつのるばかりである。時には病院のお世話にもなる。しかし、山がいちばんの病院である。自然に抱かれるときが最高の幸せでもある。……」と書かれている。弦巻宏史『ジャッカ・ドフニリブレット1 自然の民 ウィルタ』（2002）

これ、今だから言うけどね。四時頃から五時頃迎えに行くわけですよ。弁当持つて行つてますし、そこまでの間に戻つてくるということになっている。大抵は僕の方が後から行くんですけどね。彼女たちはひなたぼっこしてるわけですよ。

榎澤 そうなんですか（笑）

弦巻 それで分けたものをもらって、彼女らを家に届けて、僕は職場復帰するわけですよ。だから、彼らを林に連れて来る時はその間、職場離脱するわけですね（笑）。その後もその後は超・超過勤務でしたよ。

川村 先生がどうしても手を離せない時は、私がジャッカ・ドフニの入口に張り紙を出して連れて行きました。ちょっと外出中って書いて。

榎澤 アイ子さんがお亡くなりになられた時に、『アルドウ』に川村さんが書かれていたところなんですけれども、“お天気の良い日は山菜や、キノコ採りへ。雨の日や寒い時は資料館へ、でも年ごとに体がつらくなるのか、資料館へ来ることが多くなりました。”って書かれてましたよね⁴²。

川村 はい。

弦巻 土曜日だとか日曜日が原則なんだけど、必ずしも天気ってそういう風にうまくやってこないからね。場合によっては、うちの女房に頼んでね。妻は「あの人たち迷わないんだろうか。」って言うから、「大丈夫だよ。ただ置いてくればいいんだよ」って言っておりました。道の記憶力はいいですね。

それと自然との一体感みたいなのがあってね。一番びっくりするのが、蛇なんか出てきてね。そんな話したっけ前に？

榎澤 蛇のお話、少しされました。でも重要なお話なんでお願いします。

弦巻 蛇でも何でもいいんだけどね。蛇、向こうから来るでしょ。僕は棒切れかなんかいか探すよね。それでグルグルって卷いて捨てようかなって思うんだけど、あの二人の姉妹はね、「おまえの来るところでない」って言うわけですよ。「おまえの来るところでない」って。来るところでないって言ったて来るさねえ。向こうはスゥーっと近づいて来るんだ。そしたらね、頭の方か体を撫でるようにして、スススって向きを変えるわけ。で、横の方に外して追いやるわけですよ。90度位曲げてね。「そうだ。おまえの行くところはそっちだ」って言うんです。それって、僕はできないね。僕は、見て面白いから見てるけどね。先生もやってごらんと言われたらしたらできないね。少年時代の僕は、蛇を捕まえたけど……だけど、今はできないな。

榎澤 できないですね。確かに子どもの頃の方が自然に近いからもしかするとアイ子さんやお姉さんたちと近い感覚になってるのかもしれないですが、年重ねるとゴキブリにしても蛇にしても。

弦巻 そうそうそう（笑）。ゴキブリなんか、これは殺されなくちゃいけない奴だと思うもんね。いやあ、あれはちょっとおかしいよね。おかしいっていうかユーモラスですね。

川村 民族性なのかしらね。

弦巻 朝早く行ったにもかかわらず、鹿のウンチがあつたりすると、「ああ、わしらより早

⁴² 「ウィルタ協会会報アルドウ 35号」（2008）、4頁。

く来てうまいもの食べて行ったかな」って言うんですよ。遅く来て失敗したとか、彼らにやられたというそういう感覚ではない。彼らだって食べに来るの当たり前さという感覚なんだよね。何だかそういうところありますよね。全然訳のわからんことを言ったりすることがありますよ。鳥って集団でパアーっと飛んで行くことあるでしょ。ある林の中の木がパアーっとなった時に、「先生、向こうの方に何かたくさんあるって言っているよ」って言ってましたよ。鳥は言っていないと思うんだよね。しかも、自分たちもそこ行くわけではないんけれど。

榎澤 あっ、そうなんですか。

弦巻 行くわけじゃないんだけどね。「言ってるよ」って言うんだよ。

榎澤 本当に他の生き物たちとも調和しているですね。

弦巻 そうなんだろうね。だから、必要な分だけは採るけれど……それはね、ゲンダーヌさんにもありました。私の授業に彼を呼んで歴史の一証人としてしゃべってもらうことがあったんですよ。それで後で生徒の感想文の中に「ゲンダーヌさんはキツネの言葉もわかるのですか」って書いてあるんですよね。何だろうて思って、よくよく思い出したらそうなんだな。っていうのは、僕も一回経験あるんだけれども、彼はここ（ジャッカ・ドフニの近辺）に住んでいたんですよ。ここずっと団地だったんです。長屋のような市営住宅だったんです。住宅とここ（ジャッカ・ドフニ）は非常に近いから。近いところに建てたからね。で、ここ土手は今ほど高くなかったんですよ。ずっと川のところにね、渚じゃないけどあれみたいのがあった。そこをずっと入っていくとシジミも採れたんですよ。だから、シジミは密漁していたんです（笑）。アイ子さんもゲンダーヌも、この地域の人みんな結構やってたよ。

川村 資料館で鍋と味噌を置いて、シジミ汁作ったことがありますね。

弦巻 それで、川ガレイが獲れるんだね。川ガレイが獲れるんだけど、何枚位獲ってきたのか記憶は定かじやないんだけれども、ある時、ゲンダーヌさんが2、3枚獲って止めてきたんですね。「どうしたの」って言ったら、「キツネ出てきてよ」って言うんですね。この辺キツネいますからね。

川村 結構います。

弦巻 しおりちゅう出てくるから。「キツネ出てきてよ、俺の分も残しとけって言ったからよ。俺止めてきた」って言つたんですよ。生徒の前でも、「僕はできるだけ川の物をたくさん獲るつもりはない」って言って、「キツネが出てきて俺の分も残してけと言うから僕は必ず残すことにしてます」だとかということしゃべったんだよね。生徒はずつと真面目に聞いていたんだけどね。感想文の中に「ゲンダーヌさんはキツネの言葉がわかるのですか」って書いてあってね。そういう風なところがあるんだよね。自然と一体感みたいなところがね。

榎澤 でも大事なことですよね。この生き方というか。

弦巻 そうですよね。あそこに天都山あるでしょ。あの天都山の展望台の所に、こちらからアスファルトの道路作るって時にアイ子さんが僕に言ってましたね。「市役所行ってこい」って。「あそこのところ、ミツバだのタラの芽だのフキとかワラビたくさん出ていた。なんであんなに道路作らなくちゃいけないんだ。一本あればみんな登れるでしょ」って言うんだ。向こうの方から来る道がすでにあるでしょ。「そんなに山は削らな

くてもいい」って言ってるんですよ。「痛ましい。シシャは無駄なことして」って……

榎澤 場合によっては、山の声とかも聞こえるという？

弦巻 それに似たようなことはありますよ。妹さんがとりわけそうだったね。

榎澤 アイ子さん？

弦巻 アツコさん。

榎澤 三女の方？

弦巻 ええ。ライダーの人はメガネかけて、あっ、ゴーグルだね。雨降っても大丈夫な服装でしょ。雨に打たれてここに来る訳だ。彼らはこの資料館の中見て終わったら身支度して出かけるでしょ。それに対して「止めなさい」って言う訳さ。妹さんと二人でね。話かみあわないんですね。彼は「僕はゴーグル着けて大丈夫だ。今までもそうやって来たから大丈夫だ」って言うんですよ。それで、「どうして止めれって言うの？」と彼が聞くと、「あんた、あそこの木見てごらん。木のこっち側にたくさん高い草が生えてるでしょ。あそこから神様が止めなさいって言っている」って。これ言われた大学生は何がなんだかわからないわけ。彼は結局行くんだけどね。そういうようなところあるんだよね。

川村 でも、むりやり宿めた人もいるみたいですね。アイ子さんが自分の家に連れて行ったそうです。

弦巻 「今日はね、この天気は神様が止めれって言ってる」って。神が非常に近いところにいるとか、自然というものに畏怖の念とかね。そういうの持たなきやならないというそういう生き立ちや思想性だと思うんですよ。世界観だと思うんですね。

だけど、ついでに言っておくと、兄さんの月命日だとか何とか命日っていうの、まず忘れないでやるんだよね。だから、仏様のこともちやんとやるんだよね。僕なんか、月命日も憶えてないんだけどね。親父の命日も忘れるくらいなんだ。彼女は、お寺さん来てもらってしっかりやるわけだ。だけど、それと矛盾無く、頭の中にボオがいるんですよね。ババッチュリっていうんですね。ババッチュリをやらなくてはいけないと思っているわけですよ。これはね、僕が両方とも感心するところですね。

榎澤 この感覚、神様が止めなさいと言っている感覚は実は僕はわかって……僕は夢で見るんですね。次の日、どこどこ行くの止めなさいって出てくるのですが、行くと結構問題が起きます。うちの母親も特に強くて。だから、全く一緒ににはならないと思うんですけれども、感覚が何となく似ていると思いました。

弦巻 それはね、彼女は一年の終わりに、初霜が降りるとか初雪が降るとかね、ことし行った所、例えば、アサリを獲ったところ、シジミを獲ったところ、フキを採ったところ、キノコを採ったところに、一年間どうもありがとうございましたとね。まあ感謝と来年もよろしくっていうババッチュリをしなくてはならないわけ。それで僕の車をあてにしているわけだよ。しかし初雪の降った日に、あるいは霜のすごく降りた日に、ぼくがちょうどうまく休めるとは限らないわけだよ⁴³。

榎澤 そうですよね。

⁴³ ババッチュリのエピソードは以下の文献にも登場する。司馬遼太郎『街道をゆく 38 オホツク街道』、146・147 頁。

弦巻 一日二日経って「アイちゃん行くかい」って聞いたら、「もう行ってきたよ！」って言われてね。「どうやって行ってきたの」って聞いたら、「タクシーで行ってきたよ！」って言ってね。あと、近所の方に頼んだりしてね。とにかく全部一回りしてこないと、気すまないんだね。ババッチュリやろうと思った時にやらないと、夜、神様が夢の中に出てきて「何か忘れなかったか」と言って、その後二日三日は頭痛いっていうんです。

僕もね、「神様ってのはどういう顔してるんだ」って聞くんだよね。アイちゃんが「顔なんかない」って言ってきたから、「それならどういうふうにして出てくるのさ」って聞くと、「しつこいなあ先生」ってなってね。神様どういうふうにでてくるのかっていうと、手がヌーっとでてくるんだそうです。僕だったからしつこかったのかもしれないけど。からかうつもりはないんだけど、どういうイメージなのか気になってね。

それとババッチュリについては、他にも同じようなことは実はあったんですよね。例えば、石北峠を通る時、今まで通ってきた川は全部オホーツク海に流れるわけだ。こつから後の川は全部石狩川から海へ行く。そしたら峠でババッチュリをやるんだね。ブッシュの中に入ってね。木のところに、お菓子とか、本当はタバコとお酒を添えるんだけどね。僕はタバコもお酒もやらないから持ち合わせがなかつたりするわけだけれどね。あなたも行ったっけ？

川村 私は行ってないです。

弦巻 あーそうだな。僕と二人で行った時だ。旭川に入ったら川が多いんだよね。橋があって、「あーこれが石狩川の本流かな」って言ったら、「ここでやる」って言い出します。でも、河川敷に降りる方法そんなにないからね。「できない」って言ったら、「橋の真ん中で停めてくれ」って言うんだよね。橋の真ん中って車停めないじゃないですか。

榎澤 停めないです。

弦巻 「後ろから来るからだめだ」って言ってもね。「いや、何とかして停めてくれ」って言うわけさ。「停められない」って言ったら、「それなら窓開けてくれ」って言うんだわ。だから窓を開けて徐行したんです。そしたら、お菓子をバアッと川にほうるわけですよ。そして、口元で小さな声でというのは失礼な言い方だけね。お参りしているんですよ。

それに類したこと他にもあってね。まあ話が全然飛びますけど、同じようなことで言うとね。明治学院大学のキャンパスの入る所に、大きな木があったんだね。急いでいたから、ババッチュリをやらなかつたって言うんだね。それ、後でも言われたな。

川村 はい。

弦巻 「あれで調子悪かった」って。

榎澤 東京の白銀、渋谷の？

弦巻 そうです。

榎澤 あそこ、木すごいですね。

弦巻 でも、僕の方は忘れるわけでしょ。ここでやった方がいいんじゃないかというのを忘れる。ババッチュリで、時々ね、えらい目にあったことがありますよ。サハリンから一時帰国でキム・ナツコさんが来た時。稚内への帰りの時だったかな？ 僕が送って

行ってね。「どこかの海でババッチュリをしなければならない」って言うんだね。どこかの海岸でね。ところが、あそこら辺はなかなか浜辺に下りれるようになっていないんですよね。アスファルトが高くなっていてね。当たり前だよね。ずっと人の住んでいないところだから、海岸よりずっと高くしているわけでしょ。いつまで経っても下りるようないい所ないわけさ。で、ついに見つけてね。海の中に入ってね、ババッチュリやりましたけれどね。まあ、やれば気すんだのかなって思ったら、今度は「あっ、ハマボウフウがあるわ」ってね。ハマボウフウ、要するに山菜ですね。浜に生えてるんです。それを採ってきてね。

そうね、ババッチュリっていうのはことある毎にね、やるんだね。

川村 そうですね。初めて行ったところで山菜採るにしてもやりますね。

弦巻 よくね、色んな団体の人たちが来ますけれども、ここ（ジャッカ・ドフニ）でお話が尽きない。私も、アイ子さんの戦争体験とかウィルタ民族だけじゃなくて、他のお話も理解してほしいから、添乗員の人に僕の車を運転してもらって、僕とアイ子さんはバスに乗って、美幌峠とかまでずっと行くんですよね。行くことにするんですよ。そして、さあここでいよいよお別れだっていうときに、肝心の彼女がいないんだよね。どうしたんだろうって思ったら、藪の中に入ってね、これからみんながいい旅をするようになって神様に祈っているわけですよ。「どうしたの」って言ったら、「ババッチュリやってきた」って言うんですね。

榎澤 ほんとに大事なことなんんですけど、実際に運転手さんとか付いていく方は大変ですね。大変ってもんじやないと思うんですけど。

弦巻 ちょっと戸惑うんですね。

榎澤 感謝の気持ちを込めるっていうのはよくわかるんですね。僕もそこの道に神がいらっしゃると思っているんで、「今日もよろしくお願ひ致します」みたいな形で心の中ではつぶやいたりすることもあります。でもそこでお供え物をあげて、毎回場所場所毎に、例えば、橋の真ん中とか、接岸できないそれを探すのが大変な海岸とか、そこまでだと本当に付き添われる方は大変だったなって。

弦巻 大変ってことでもないけどね。でも、やっぱり彼女の心が安心できるっていうかね、それはやっぱり大事だと思うし、それが間違いとか良いとかいう問題でもないし。これは認め合わなければならないですしね。理解するとかできると言うことではないですね。僕が思うのは、理解するとかってことではないんですね。だけど、そう信じているっていうことをやっぱり認めてあげて、やっぱりそれを尊重してあげないと。できることならば、お手伝いしてあげればいいことなんです。

榎澤 確か、石狩川の本流の話は学生たちが大変興味を持って聞いていたところで、本当に印象的なお話ですね。ババッチュリのお話だけでも、一冊書けそうな感じですね。

アイ子さん自体のお人柄も表れているし。

弦巻 そうですね。

榎澤 話がずれてしまったら申し訳ないですけれども、山菜採りに行っても記憶力がすばらしいというお話が出でていたと思います。場所場所を大事する。そうですね、生きていく上での自然との向き合い方にしても、まぁ生きていくために記憶力も優れたものになっているのかもしれませんけど。それに対して、当時の日本人たちが彼らに対

して使った言葉、『権太要覧』とかにも書かれていますけれども、“無知蒙昧”という言葉、これはやはり問題ある文章だと思うんですね。田中了先生の本で時代区分がなされて比較されていました⁴⁴。戦前の資料で“無知蒙昧”とか“憐れなる人”みたいなことが書かれていて、次の権太の記録では、“無知蒙昧で怠惰な性格”って書いてあったということ。徐々にひどい言葉が増えていくて、実は、戦後、北海道の教育委員会が編纂する資料では、“狂暴な性格”まで入っていたわけですよね。僕はこれ、恐ろしさを感じたんですね。戦前の政策の方がひどかったはずですし、先住民政策はオタスの杜に強制移住させているわけですよね。そこで利用しがいもあったから、観光地として利用しているわけですよね。まあ、“狂暴な性格”をしてしまうと、観光客が来ないというのもあるかもしれません、実は戦後の人たちが更に尾ひれをつけて“狂暴な性格”という書き方をしているのか、どう捉えたらいいのか。いろんな考え方はあると思うんですけども。よくありがちな話に尾ひれがついて、何の検証も無しに…⁴⁵

弦巻 そうですね。例えば、お酒を飲む人はよく変わるっていうじゃないですか。彼らの数人が例えばお酒を飲んで人が変わったというのを見てね、言ったかもしれないし。それに尾ひれはひれがついてね。よくありますよね、貞操観念がないとか。結婚観が色々違うわけでしょ。そういうことで、色々、偏見と予断だよね。それも言い過ぎ無神経なね。例えば、前にここにつけるのを貞操帶著って言うなんて無神経ですよね。私が言わせればね⁴⁶。

榎澤 どこの博物館でしたっけ？

弦巻 そこは……。それは何かいいようがあると思うね。

榎澤 実際、言葉の訳し方も“集落”とか“部落”という言葉がないのに、そう訳されたりとか。自分自身の視点からでしか言っていないですね。

弦巻 そうそうそう。物差しがね。日本人の物差しで何でも計るところがあるでしょ。

榎澤 僕自身も研究者として本当に気をつけなければいけないと思います。本当に考えさせられた部分なんです。本当にお会いしたかったです。

弦巻 それは本当に残念ですね。体調も良くなかったんだけども。ゆっくり聞いて口伝というか、次から次へとしゃべってもらってね。わざわざしゃべってもらわんでも何か言っていることをね、メモ書きでもしつければよかったですってつくづく反省させられる

⁴⁴ 田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・1978）、51-57頁。

⁴⁵ これは、私（榎澤）の勘違いで、例えば、1936年に刊行されたものを復刻した権太序編『権太府施政三十年史（下）』（原書房・1974）、1686頁ではアイヌやニクブンよりも劣るとされ、更に以下のように記されている。「……一般に無知蒙昧で狂暴性を帶び、而も怠惰で極度に煙草や酒を好み、隣保愛等の人情味は全くなく、同族間の不和も常に絶えなかつたが、昭和七年教育所設置以来、此の風習の矯正に努め善導の結果、現在では餘程面目を革めた觀がある。」

⁴⁶ ダルドゥーのこと。ウィルタの座り方は正座ではなく片膝立てるか胡坐をかく。そのため、スカートみたいな“ホッセー”を身にまとい向かい合って話をする場合、下着が見えてしまう。そこでダルドゥー（30cm弱四方の前かくし）を着けて下着を隠したという。

んですけどね。例えば、葬送の方法や死後のことや、……特に墓の中で眠り続けているので数年たつたらお墓参りで邪魔をしないようにするとか、祈祷についてとか、… …。更に、女性や母としての暮らしや想いなども……。

(一旦休憩)

⑫『私の生いたち』10段落目－日本の戦争や軍国主義化について

榎澤 それでは読みます。

『いまなお、日本政府は私たち少数民族で戦争の犠牲になった人々には何をしてくれているでしょうか。子どもを失しなった母親たちはどんな悲しいおもいで泣いて泣いて死んだことでしょう。』

榎澤 アイ子さんの人生全体を通じる使命だったのか、目的だったのか、そういう部分につながる話だと思うのですが、亡くなる間際まで関わってきた戦後補償の問題。そして、これは『私の生いたち』の後の方でも出てくるのですが、“日本がまた軍国主義化している”ことを常に気にかけております。こちらへんに何か細かいお話とかは聞いたことがありますか？ アイ子さんが新聞記事で日本の平和憲法のことを述べられた部分がありました。「(日本政府に対して) 何が平和よ。うそつき。ジャッカ、憲法守るため、平和。平和の願い込めて反対する。何が世界の平和よ。戦争の後始末きちんとつけなさい」と言っていたのを田中了さんがほっかい新報で引用していました⁴⁷。新聞記事と言いましたが、ほっかい新報という新聞ですかね？

弦巻 うん。

榎澤 このように書かれていて、政治についてもかなりの意見を持たれていたようですが……

弦巻 彼女は、ソビエト政権下にて、メーデーとか色んなのに参加しているんですよね。

榎澤 あっ、そうなんですか？

弦巻 どうもそちららしいですね。なんて言ったらいいいんだろう。元々お祭りが好きなんですね。踊りとかそういうのも好きなんですけどね。平和運動とか政治とかそういうのに割りと抵抗がないんですね。ソビエトの共産党とか共産主義に反対とかそういうのも特に言わなかつたですよね。網走に来ても、メーデーがある時、こちらが「参加しないか？」って言ったら、参加していたんじゃないかな？

川村 アイ子さんと行った覚えはないですね。

弦巻 覚えはない？

川村 覚えないです。

⁴⁷ 正確な記事は、「なにがヘイワよ、ウソつき！ ジャッカ（宝もの）ケンポまもるためヘイワ・メエフラッマリ（平和のねがいこめて）、ハンタイ・リプウ（反対する）。ナニガセカイのヘイワよ、センソのあとしまつ、きちんとつけなさい」である。田中了「ケンポウはジャッカ（宝もの－ウィルタ語）－改憲手続法案衆院強行採決の日に想う」ほっかい新報 1700号 8面（2007）

弦巻 だけど、そういった集会に出ることはそんなに抵抗はないですね。だから、平和とか戦争体験を語るとかそういうことをお願いした時には出ることはありましたね。そして、日本には平和憲法があって、憲法9条があることは彼女も知っていて、学んでいたので、こんな軍事基地があつたりして本当に平和ではないじゃないかという思いはあったんですね。

川村 広島とか長崎にも行きましたよね。

弦巻 そう。これ（非売品の『私の生いたち』）の一番最後に書かれているんだよね。

川村 1985年と書かれていますね。

弦巻 “アイ子さんは 1985 年、原水爆禁止世界大会に参加しました。そして、被爆者と共に行進しました。長崎で深められた平和への熱い思い、ひたむきな思いを胸に頑張っておられます。”と書いてあります。これも、ウチの妻と行ったのかな？

川村 そうですね。

弦巻 僕の妻と行ったんだね。とにかく戦争は理屈無しにダメだって言うんだよね。どっちが正しいとか正しくないとかあれがどうだとかこうだとかではなくて、戦争はダメ。例えば、旅行の時に、旅行団の中に子どもがいるでしょ。一息話が終わって、皆感想を述べたり、それからアイ子さんがお話ししたいことをもう一回話すとき、「ぼうやたち、絶対戦争に行ったらダメなんだよ。ぼうやたち絶対兵隊さんになつたらダメだよ」て言つたんです。「自衛隊だか何隊だか知らないけれどね、私は絶対ダメだと思う」って、それは強く言つていましたね。

榎澤 本当に重い言葉ですね。その一言自体の深みが、本当に体験した人の心も踏まえた上での重い言葉ですね。その一言自体の深みが。

このお話は後にも出てくるお話しなので、それでは次に行かせて頂きます。

⑬『私の生いたち』11・12段落目－弦巻先生や川村さんとの出会いについて

『1952（昭和27）年朝鮮人の青年ゴン・アンツリさんと結婚しました。ゴンさんは15才のとき日本人に目かくしされたまま拉致され、樺太に強制連行され、炭鉱で強制労働させられました。戦後、解放（実は捨てられ）故郷に帰れず淋しさをこらえて網走工場で働いていました。』

榎澤 では続いて。

『やがて長女が生まれ、長男が生まれ、二女が生まれ、二男が生まれました。三男が生まれた直後兄ゲンダースが網走に居ることを報らせてくれ、一家で引き揚げることになりました。』

こここの部分は働いている時に出会った方と結婚しているわけですが、出会いは仕事場ですよね。

弦巻 だと思うんですけどね。

榎澤 それで、お子さんが5人生まれてその後、引き揚げることになったわけですね。子どもたちは賛成したのですか？ 先ほどのお話ですと、旦那さんとの関係で引き揚げることにしたんではないかというお話でしたが、子どもたちのお話というのは？

弦巻 あまり聞いたことないけれど、後ほど出てくるように、「サハリンに帰りたい」って言っているわけですね。日本語もわからないしね。長女はだいぶ大きくなっていたんですね。みんな結婚してなかったからね。子どもの了解を得たとか得ていないとか話し合ったとか合っていないとか聞いていないです。

榎澤 聞いていないですか。長女長男が丁度中学位、思春期の頃ですよ。

川村 長男が15, 6の頃来たって聞いてますけどね。

弦巻 中学は出てたんですよ。終わってたんですよ。学年で言うとね。長女はもちろん終わってた。次女が網走の高校に入ったんだな。次男はここの中学校に入ったんだね。三男は小学生で近くの小学校に入ったんだね。そして、中学校に入ってきて僕のクラスに入ってきた。だから、僕は担任だったの。アイ子さんは僕の担任生徒の父母なんですね。担任と教え子の家族との関係なんですよ。そういうのもあって、変な言い方ですけど、ずっとご縁が続いているのですね。

榎澤 そこがきっかけになるんですか？

弦巻 いや、僕のきっかけはその前のずっと前にあるんですね。私は、北見時代に、民衆史講座っていうのをやっていたんですよ。1975年に、田中了先生が「オロッコの人権と文化」というテーマで、民衆史講座の歴史の一証人として北川源太郎さん（ゲンダーヌ）を紹介し解説してくれたんですよ。証言が終わった後に、「どうせ私たちは消えていく民族です。消されていく民族です」って言ってね。これは私も非常に印象に残っていますけれども、胸を打ったんですね。「軍人恩給ももらえない。このままでいいんです」と。「そっとしておいてくれ」という言葉は使わなかったけれど、本人がいいって言うんだからいいって言うわけにはいかなくなるよね。その講座に出ていた女子高校生や色々な人たちが、「話だけ聞いていいの。聞くだけでいいのかい」って話になつてね。田中了先生も、もちろんそれでいいと思っていなかつたわけでね。

それから細かい時間の流れは抜きにして、転勤になるわけですよ。私は希望していくなかつたのに、網走市になつたんです。その時私は大規模校にいたんですよ。出だしは小規模校だったんで、網走近辺でもかまわなかつたのですが、中規模校に行きたいなと思っていたんですよ。ところが、枠がなくてね。ここの中学校に來たわけですよ。そしたら、田中了先生とも再会できたわけです。それでお手伝いすることになったわけで、その時にはもうここジャッカ・ドフニの工事が始まつていて、そしてその年にできたんですよね。そのできる直前、一ヶ月位前に、おじいちゃんの北川ゴルゴロさんが亡くなつたんですよ。そういう関係が色々あって、僕が教え子の親でもあるアイ子さんと一緒に運動していくことになつたのです。

だから、北見の時が一つのきっかけ。それと、こっちに転勤してきたということが関わることになったもう一つのきっかけ。

榎澤 川村さんのきっかけというのは？

川村 きっかけはですね、ここが建設されている時も何か風変りな建物だなと思って覗き

に来たことがあるんです。その後、開館するちょっと前かな。中見せてくれたんですよね。すごい刺繡が飾ってあって。ご覧になりましたよね？

榎澤 はい、すごいですね。

川村 わあ私もこんなのやってみたいなって思って。でも、子どもがまだ小さいんで針は持てないし、置いてもいけないし連れててもいけないし。下の子、幼稚園に行くまで我慢して、幼稚園に行き出した時に、公民館講座がありました。アイ子さんの刺繡の講座を受けられるということになって、初めてアイ子さんに会えることになってね。私もこの辺に住んでいたんで、どこかでは会ってはいるんですけど、この人が北川アイ子さんで、ウィルタであるということは全然知りませんでした。で、刺繡を習って初めてアイ子さんの存在というか、はっきりとわかったのはその時なんですね。近くにいるんで、公民館に行くよりもここに来た方が近いですし、直に教えて頂けるなって思って。きっかけは、まず刺繡を教えてもらったことです⁴⁸。

榎澤 そうなんですか。もしお話をされてしまったら申し訳ないのですが、“フレップ会”ですか？

川村 それです。

弦巻 その公民館講座の受講生たちが作ったんですよ。きっかけはね。今は独立したフレップ会になっていて、公民館講座に近いことは別にまたやっていることはやっているんですよ。その公民観講座の講師にフレップ会の方が行っているわけです。年に一度あるんですよ。六回講座で。その中の一回がね、ウィルタ民族っていうのがもともとどういうものでね、どういう歴史を歩んだのかということを知るためにここに見学に来るんです。その時、僕がおしゃべりする。そういうことなんですよ⁴⁹。

私もここに来てから、二十年間どこの学校にも異動しなかったんですよ。一つは僕のわがままであります。校長にも教頭にもあまりなりたくなかったんですよ。それは色々事情があるんですけどね。一言で言うと、本当に民主的な学校づくりをする条件というのは必ずしもないと。僕の力量からするとそんな思いもありました。

榎澤・川村 いやいや。

弦巻 もう一つは、僕自身の体のこととか子どもたちのこととか、色々考えて転勤のいい時期はなかった。それから後は、この民族に関わる人がいなくなっていく、次から次へと転勤して行く。それがあります。

榎澤 弦巻先生がずっと支えて下さったことは、田中了先生の記録にも残っています。この『アルドウ』も弦巻先生がかなり書かれていますし。

弦巻 僕はあまりやってきたという記憶はないんだよね。

榎澤 なんですか？

川村 楽しかったのかもね。

弦巻 要するに、人が来たらジャッカ・ドフニの鍵を開けて、見てもらっておしゃべりして帰る。火事にならないように見に来るって具合なもんですよ。あとは、アイ子さん

⁴⁸ 「ウィルタ協会会報アルドウ 35号」(2008)、4頁にも同様のことがふれられている。

⁴⁹ この講演記録は、榎澤幸広・弦巻宏史「ウィルタとは何か？－弦巻宏史先生の講演記録から彼らの憲法観を考えるために－」名古屋学院大学論集(社会科学篇)48卷3号(2012)、79-118頁に掲載。

の運転手になっていると（笑）。時々おこぼれも頂戴して、おすそわけも頂いて、そのくらいです。

ゲンダースさん、早く亡くなっちゃったけどね。その話の中でメモもきちっと取らずにね。残念なんだけれども、民族っていうのはね。本当に認め合わなければならないんだなってね。逆に言えば、僕らの物差しで人を見ちゃいけないなってそれを学んだというわけです。最も大事だと思うのは、ひとりひとり命一つですよね。一度の人生ですよね。こんなに踏みにじられて、健気に生きてるという。いつも真っ直ぐ純粋で無垢な人間ではなくなりますよ。アイ子さんの心も時には歪んでみたりね。それから、自虐的になってみたり、他人を信頼できなくなったり。そりやあ色々ありますよ。だけど、それこそが歴史が作り上げた歪みですよ。この社会が作り上げたものですね。で、この一人の命、一人の人生、一度ですよね。それがこんなに踏みにじられていいのかって思うんですよね。ただ、自分に重ね合わせると、自分はのんと生きているなとそういう思いですけど……

榎澤 そんなことは……

弦巻 そういうことが累々と重なってね、正に歴史だったわけでしょ。だけど、誰にも知られずにね、日本人でもですよ、多かれ少なかれみんな口にも言えない人生、加害者であったり被害者であったりするわけですよね。そういう思いがあったから続けてきたってわけで、「じゃあ、もっとやるべきことやれば良かったんじゃないの」って言われたら一言もないんです。忙しいとかぐうたらとか勝手に理由つけていますが……。

榎澤 これは日本人も含めてですが、一人ひとりの戦争被害を受けた人に対して、国側の主張としてよく言うのが、例えば、東京大空襲の裁判にしても戦争関係の裁判でも、裁判官が言うのが、「あの当時は仕方がなかったんだ」という全員受忍論ですよね。耐え忍んでくださいと。8月15日の天皇の宣言じゃないんですけど。そういうことを今も平気で言ってしまっていますよね。ウィルタの人たちに対して、厚生省の役人たちも皆そうなわけですよね。まあ、公文書自体の扱いもずさんな国ですからね。アメリカもいいかげんなところありますが、公文書をしっかり残していますから、核密約とかもわかるわけですけれども。記憶の記録を残そうとしないというこの国のあり方が、本当にどうしたらいいんだろうって、僕自身ずっと考えているところです。アイ子さん一人の人生だけをとってみてもこれだけで本当に大変な作業ですよね。だから、僕は一つ一つ掘り起こしていくべきです。完全な形ではないけれども、何らかの形で残していくべきだと思って……何か本当に辛いですね、話していく。いいことばかりではないので。

弦巻・川村 そうですね。

榎澤 それではもう少しだけ進めさせて頂きます。これから読む部分は日本に引き揚げた後のこと�이示されているわけで、とりあえず読ませて頂きます。

⑭『私の生いたち』13段落目－日本に引き揚げた後の生活について

『長女長男は中学に、二女二男は小学校に入りました。そのころ刑事たちに子どもたちの手紙を調べられたり時計の中まで調べられたりしました。いつまでもウィルタを馬鹿にしていると思いました。子どもたちはサハリンに帰りたいといっては泣き、勉強にもついてゆけなくなりました。「日本に連れてきたのがわるい」と私をせめました。』

榎澤 やはり一番気になるのは、刑事たちのことですかね。これについて何かお伺いしたことありますか？

弦巻 これはね、アイ子さんが言ったことは確かだけど、その当時僕は一緒にいないんですよね。だから、わからないんですよね。田中了さんはわかるかもしれない。

ただね、全然別なんですけど、北見の話でね。強制連行で連れて来られて帰れなくなった中国人、何年か前に亡くなったんですけど、そのチャンさんは日本国籍を持たなかつたんですよ。で、中華人民共和国ができて以来、刑事が常に付きまとっていたらしいですよ。要するにね、北朝鮮だと、ソビエトだと中国に関わる出自を持っている人たち、それは帰国者であろうが何であろうと、それを絶えず探っていたことは事実ですよね。

榎澤 そうすると、そういう繋がりがあるんではないかと、アイ子さんとか息子さんたちや娘さんたちも思われていた可能性が高いですよね。

弦巻 ここんところ丁度網走にいなかつたんでよくはわからないです。

榎澤 67年に引き揚げてきた後の話ですから、安保闘争があって学生運動があって、ちょうど沖縄返還運動とかのあたりですよね。その時、やはり東京に出てきている沖縄の人たちにも付いてきたというのは聞いたことがありますね。一緒になるかどうかはわかりませんが。時代背景を考える必要がありますね。

で、その後の部分が、子どもたちがアイ子さんを責めるという部分が続くので、ちょっと読ませてもらいます。

⑯『私の生いたち』14段落目—子どもたちについて

『夫はやがて東京に働きにでました。子どもたちの学校では、友だちどうし差別のようなものはありませんでしたが生活のまことにやがて二男が悪い友だちとグレてしましました。憎らしくて、どうにもならなくて、苦しみました。とうとう刃物をもって振りまわしたとき、命がけで棒でたたいてしまいました。息子は川で死ぬといつていきました。川で親子で泣きました。それから息子ははじめになりました。』

榎澤 この部分も色々あったんだろうなと思います。ちょっと話すれてしまうかもしれません、意外だったのは、学校では友達同士差別がなかったところですね。違う資料では、“親からあの子とはつきあうな”とかそういうことはあったというのを読んでいます。それでも、子ども同士の差別というものはなかったんですかね？

弦巻 僕が聞いている範囲では、いや僕が見ている範囲でも、それはやっぱりないんです

ね。差別らしいものはないんですね。ただね、これは明らかに差別であるんだけれども、例えば、ゲンダーヌさんが結婚しようと思っても破談になったこととか就職で差別があったこととかね⁵⁰。それから、親戚の人たちとかお姉さんの家族とか色んな人たちが「あんたたちがウィルタだとかオロッコだとか名乗ったりするから、あそこ親戚だからあの人たちもそうだよってわかつてしまう……」とかね。現実にはどのようであったかわからないけれども、そういう被害者意識を持っていたことは事実です。だけど、地域の人が「あんたがたオロッコでしょ」とかあんまりしなかったと思うね。ここで差別があったっていうのは聞いていないよね？

川村 そうですね。

榎澤 かえってウィルタ宣言をした後の方が色々出てきたということですね。

弦巻 そうそう。

榎澤 そうすると、アイ子さんに関する違う資料で書かれていた“あの子とはつきあうな”とか“あの子はウィルタだから”とか、そういう話は宣言をした後の話になるんですかね。

弦巻 そうかもしれないし。もうちょっと上の子にあたるんですけども、従兄弟たちがいたんですよ。そういう子たちが差別されたんだとか言うことをアイ子さんに言ったかもしれないよね。

榎澤 案外、年が上の方が色々なことを知って大人になってくるから、いじめの構図とかも複雑になりますよね。

弦巻 本当に差別がゼロであったかどうかは私も確かめようがなかった。ただ、私が受け持っていた三男の頃には、友達同士で「あいつはオロッコだから」とかそういう話はほとんどなかったなあ。

榎澤 次男がぐれてしまったとはっきり書かれていて、大変だったろうと思います。何かこの部分で聞いていることってありますか？

川村 ここはわからないです。

弦巻 極端に言うとね、大人たちが子どもを見る時にはそういう目ってあったかもしれないね。「あの人たちはオロッコだよ」とか「あの人たちは樺太アイヌだよ」、「ギリヤークだよ」って。でもそのことによって、子どもたちが差別をするっていうのはなかったと思うな。そして、おとながこの人たちを特別扱いする、偏見に満ちた扱いをするっていうのも聞いていないな。ただ、自分たちが差別されるんじゃないかと思い込んでいるところはあるよ。

榎澤 それだけ過去に色々あれば、思いますよね。あっ、お時間大丈夫ですか？

川村 そろそろですね。

弦巻 彼女の方がお付き合いは長いんですよ。

⁵⁰ 1980年4月、ゲンダーヌは日本人女性（北川淳子）と結婚。1984年ゲンダーヌ死後、彼の遺志を継いで小学校教育に尽力する点についてふれている淳子さんの論文「夫・ゲンダーヌの遺志について」北海道高等学校教職員組合少数民族専門委員会編『続・生徒とともに考える日本の少数民族－教育実践上の手引き』（北海道高等学校教職員組合・1985）、404-405頁がある。

川村 長いといつても深い話は知らないです。

弦巻 この部屋でね、何気なく喋っているのを聞いている話は僕とは違うものを聞いているかもしれない。僕はさっき言ったようにキノコ採りの運転手になるだけですから(笑)。だから、彼女居た方がいいんです。

川村 気分いい時は昔話とかサハリンに居た時のことも話してくれましたけどね。

榎澤 このやりとりは今回だけではなくて何回か網走に訪問させて頂くので、その時にお話を聞かせて頂くということは可能ですか?

川村 はい。元氣でいれば大丈夫ですね。

榎澤 すみませんが、よろしくお願ひ致します。僕は、記録を残すことが戦後補償の話にも繋がっていくのかなと思っております。あまりにもお役人たちはウィルタの情報を持っていない。まっ、持ってても排除しているのかもしれないですが、僕の知る限り国家公務員の人たちの中にはけっこうこういうお話を知らない人も多いです。下からの運動ではないですけど伝えていくことが大事だと思いますし、記録があれば次に繋がることもあると思うので、すみませんがご協力願えればと思います。

川村 網走市民でも知らない方たくさんいますもんね。

弦巻 難しい点ありますよね。「これ（ジャッカ・ドフニ）は観光施設ではないと。そういうふうにしたくない」という思いがゲンダースさんやアイ子さんにはある。同時に、われわれは「多くの人に知ってもらって、観光目的であろうが何であろうが多くの人に知ってもらいたい」というのがあってね。

川村 運営していく上ではね。

榎澤 そうですよね。

川村 難しいですね。でも、お客様が来れば来たでアイ子さんすごい喜んでね。イルガを切ってあげたりね。

弦巻 まあそういう点では気前がいいというかね。

榎澤 コーラか何かもみんなにあげたりとか。

弦巻 そうそうそうそう。何でもごちそうしてしまったりね。

川村 ゲンダースさんですね。

弦巻 それから、紙をこういうふうに切ったら、すぐに「あげるよ」って言ってあげちゃうんです。例えば、1枚200円とかで売ればいいのに。僕らも“これ1枚200円です”と言えばいいんだけれども。女子学生の人たちが来たりすると、「なに、あげるかい。ん、もう一枚切る。あげる」って、ずっとこんな調子なんだよね。なんていうのかな、全然、ここの経営でもうけようとか、私もここでこれだけしてあげないとここの経営が成り立たないとか思わないんだな。僕らもまあ思わせないんだけどさ。でも、やりくり大変だっていうのは気がついてはいたんだね。でもだからどうするというのはないんだよ。

榎澤 やっぱり色んな人に知ってもらいたいと思ったら観光でも何でもきっかけがないと話は進まないですよね。

弦巻 そうそう。

榎澤 そのギャップといいますか、難しいですよね。

弦巻 これも余談になりますけど、学者さんが嫌いなんだね。学者さんは細かいことよく

聞くでしょ。何回も何回も聞くでしょ。そんなに厳密に聞かれるの嫌なんだよね。それから、写真に写ったりするのなんかも嫌なんだよね。マスコミが嫌なんだ。

榎澤 亡くなられる前入院している時にマスコミの方と会うのを拒否していたのもそういう理由ですか？

弦巻・川村 そうです。

弦巻 それもあるし、お姉さんやら親戚の人たちが「あんたがウィルタって名乗るから私たちまでそういう目で見られるんだ」ってそういう親戚の方々の声があつてね。結局それを気にして、彼女は「マスメディアにはお断りしてくれ」ってのが多かったんですよ。それである程度、「これこれこういう人だよ」って言って了解を得て会った人も上手にやらないと黙ってますよね。上手な人はあまり質問しないで僕の話を聞いて終わりにする。司馬遼太郎さんなんかそうですよ。『街道をゆく』の中でこれ（『私の生いたち』）を引用して書いているでしょ⁵¹。

榎澤 『オホーツク紀行』でしたっけ？

弦巻 街道ですね。その中に、“アイ子さんに会うためには弦巻という男に会わなくてはいけない”って書いてあるんですよね。要するに、そういうふうになつてているんですよ⁵²。

川村 直には会えませんってことで。

弦巻 それからずいぶん昔だけど、学者先生か研究者だか誰だかわからないけれど「これを借りてくよ」と言って返さない例があつたんだ。

榎澤 正に、アイ子さんにとって、この資料館が自分が亡くなった後にもウィルタの文化・伝統を残してくれるという考えがあるわけですよね。まあ、返さないこと自体問題ですけれども、ここの博物館の名前通り、宝物ですからね。ちょっとひどいですね、その研究者。

弦巻 それはね、この資料館できる前の話だけね。そういう隠れた持つていったものがあるんですね。

榎澤 でも、借りているわけですよね。それなのに返さないって。

弦巻 そうそう。そういう人がいたようです。そういうこともあるし、根掘り葉掘り聞くし。特に嫌なのは言語学者だって。発音なんてどうでもいいわけでしょ。発音記号があるわけじゃないんだから。どうでもいいのに、“ウィルタ”なのか“ウイルタ”なのかね。

川村 お姉さん言ってましたね。

弦巻 しつこいからやだって。

川村 「もう来るな」って言ったって。

榎澤 アイ子さん生きてらっしゃったら、僕も「うるさい。来るな」って言われていたかもしれないんですけど。

弦巻 それはね、間に僕が入るとか彼女（川村氏）が入つてうまくとりもってね。聞き出しだね。一編に何時間もやらないでね。そういうことができたんだけどね。

榎澤 学者の中にはどうしても急いで書こうとする人もいます。来るのもお金がかかって

⁵¹ 司馬遼太郎『街道をゆく 38 オホーツク街道』（朝日新聞出版・2009）、153-167 頁。

⁵² 司馬遼太郎『街道をゆく 38 オホーツク街道』（朝日新聞出版・2009）、145-146 頁。

大変というのもあるかもしれません。

川村 時間的にもね。

榎澤 僕も、お二人を長い時間拘束してしまって申し訳ないんですけども。

川村 いえいえ。

榎澤 僕は何度も来るつもりですので、来た時1日1時間でもご都合つけばお話を聞かせ
願えればと思います。

(川村氏、ここで帰宅)

⑯『私の生いたち』15段落目—オロチョンの火祭り、そしてモヨロの夜祭りについて

榎澤 それではもう少しお願い致します。

『父ははじめ、網走の観光「オロチョンの火祭り」のシャーマンをやらされていましたが、それはほんとうは気のすすまぬものでした。ウィルタの祭りには全くないもので神の教えにそむくものだったからです。でも生活のためでした。父は家に帰ってから神におわびをしていました。ウィルタってみじめだなって思いました。』

このオロチョンの火祭りの部分は、田中先生の著書に細かく書かれているところ
ですよね⁵³。

弦巻 そうですね。

榎澤 ただ気になるのは現在も続いていることですね。

弦巻 そうです。

榎澤 今日たまたま泊まった所に、網走の行事カレンダーが貼られていて、そこに“モヨ
ロの夜祭り”というのも示されていたんですけど、あれは最近ですか？⁵⁴

弦巻 最近です。

榎澤 やはり“オロチョンの火祭り”が観光として人気があったから、そういう風にやる
ようになったのですか？

弦巻 “オロチョンの火祭り”ってのはかなりでっちあげて作っちゃったでしょ。“オロチ
ョンの火祭り”の“オロチョン”というのは、オロッコ族だという風にね。そして、
ゴルゴロさんや色んな人たちを使つたでしょ。それはあまりにもひどかったなって反
省があるわけですよ。それから、網走独自のものでね、何か作るとすれば、北方民族
のものを持ってきて作つて、オロチョンとか何とかではなくて、北方民族はこんな風
な服装でとかシャケの扱いはこうだよとか、そういう観光目的ですけれども、オロチ
ョンの火祭りではないものを作ろうとしたわけです。それで“オロチョンの火祭り”

⁵³ 田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』（現代史出版会・
1978）、219-239頁。

⁵⁴ 2010年のモヨロの夜祭りについては、網走市観光協会ホームページ<
http://www.abakanko.jp/event/moyoro_yomatsuri/>

をやる人はやるし、だぶる人もいるんだけれども、やっぱりオロチョンという名前自身もまざいなという意見もでてきたわけです。だからといって、“北方民族の祭り”という名前も固いでしょう。モヨロとかオホーツク文化人とか言うでしょ。当時の人はこうではなかったかと思ってもらうというかね。そういう意味合いでつけたようです。私もそのところの詳細はちょっとわからないんだけれどもね。

榎澤 そうすると、市当局の中にも、申し訳なかったと思っている人も結構いるということですね？

弦巻 そうそう、今になつたらね。しかしながら、網走しさを出すならば北方民族だし。典型的な例をあげると、ホテルやポスターとか、それからペンダントとかにね、北方民族の紋様をアレンジして使ったり作っているっていうのがあるんですね。それは、「イルガという紋様であるからには、もう少しウィルタらしい民族らしいものにしてくれ」って言って、更に「ジャッカ・ドフニのものを参考にして作りました」というのを入れてくれ」と申し入れたこともあります。

だけど、モヨロの祭りの中身自体は私たちは一切関係していないのです。

榎澤 最近のことはわからなかつたんですけど、僕自身のイメージではどうしても市側とか行政側というのは頑ななイメージがあつたものでこういう質問の仕方になりました。例えば、正しい例かわかりませんけど、北方民族博物館、あそこ自体も何のために作ったのかと思っているのです。去年、見に行つたんですけれども、展覧してあるものも、このものや網走にも関係ないし、昨日インターネットを見ていたら僕と同じ印象を持たれた方もいました。その方も実際、弦巻先生に質問をされたらしいんですね。「何で作ったんですかね？」みたいな感じで質問すると、先生は「行政とはそういうものだ。学芸員とは親しくしていつも声をかけている。」みたいな感じで言葉を濁されていたという風なことが書かれていました⁵⁵。でして、それらをふまえた結果、ウィルタ協会やここで頑張っている人たちと網走市の対応に温度差があるような感じがしました。

弦巻 簡単に言うとね、北方民族博物館は、網走とか旭川とか三箇所候補があつたんですね。それを網走に持つてくるようにするため、ジャッカ・ドフニがある、そして北方少数民族の人がいる。しかもそこに私たちはウィルタだと名乗る人たちがいるというのを、行政側がこちらに誘致する時の材料にしているんですよ。けれども、できあがったらそれはここに何か特典を与えるというものでもないんですよ。しかし、学芸員の方々とは親しく、アイ子さんも色んな資料を作つてきました。

榎澤 確か学芸員の方、笹倉いるみさん。この間も映像を使って、東京で数日前やられたそうですね⁵⁶。

弦巻 そうそう。だから、そういう協力関係はあるんだけど、行政側は誘致するのにいい条件の一つにしたのではないかと思うのです。

⁵⁵ mojabieda Blog 「北川アイ子さんとジャッカ・ドフニ」 2008年3月25日記事<<http://mojabieda.jugem.jp/?eid=459>>

⁵⁶ 北川アイ子さんと親交のあり、ウィルタ文化について数多くの記録を残している北方民族博物館の学芸員。2010年10月2日、昭和のくらし博物館土曜お茶の間会で「ウィルタの切り紙日本の切り紙そして、暮らし」というタイトルのワークショップが開催された。

榎澤 そういう流れなんですか。僕、全然間違った解釈をしていました。戦後補償とかの問題で国側に訴えている。そうすると、国側とすれば「面倒くさいな、あいつら」と思いがちだと思うんですよね。だから、この資料館の存在がそのシンボルになるから、嫌な話ですけれども、なくすために、打ち消すために、ああいう博物館を作ったのかなというイメージがあったんです。それは違うんですね。かえって利用しようとしました。

弦巻 そうそう。

榎澤 オープンした時も二十年前とかで、91年2月10日なんで、正に建国記念の日あたりにあわせていたんで勝手に色々穿った見方をしてしまいました。なるほど、ありがとうございます。

それでは、次にいかせて頂きます。

⑦『私の生いたち』16~19段落目—イルガについて

『夫は祖国に帰りたいといって、とうとう網走には帰らず、行方はわからなくなりました。今も音信不通です。でも私は彼がどんなに故郷に帰りたかったかと思うと夫をせめる気持にはなれません。』

榎澤 こここの頃というのは先生はもう交流は？

弦巻 まだ。

榎澤 ない頃？

弦巻 ええ。

榎澤 こここの資料館ができたのは80年前後ですよね？

弦巻 78年です。それより前ですから。私が来た時にはこのことは終わっていた。

榎澤 ここはかなりプライベートな話ですよね。

それでは次にいかせて頂きます。

『田中先生や多くの先生方の熱意でウィルタの文化と人権を守る運動が拡がり、またゲンダーヌの軍人恩給のたたかいや、ジャッカドフニ建設のたたかいがすすめられました。私は「自分の民族の文化が残る」「わたしが死んでも残るんだ」ほんとうにうれしくありがとうございます。』

こここの部分は次にも繋がるので読んでしまいます。

『この数年間、ジャッカドフニの展示作品を作ったり、イルガ（紋様）の指導をしてきました。熱心に見学したり、学んでくれる人がいます。うれしいことです。しかしあまだほんとうはシシャ（日本人）とは打ちとけないで悩んでいます。』

次も続きますね。

『また日本人にもかんたんにウィルタのことを原始的な人間だとか偏ったような見方をするひとがいるようです（資料館でもぶしつけな質問にであります）。』

いくつかあるのですが、資料館ができたことでアイ子さんが活動することができたわけです。そこでアイ子さんなりにイルガでも工夫されてたり、何か新しいものもどんどん取り入れていったそうですね。想像力がかなり豊かな方ですね。言葉もどんどん新しい言葉を覚えて使うし。あるいは、イルガも紙で、折り紙でやるっていうのもアイ子さんが工夫されたのですか？

弦巻 そこはね、ちょっと正確ではないんだけれども、アイ子さんはお姉さんから学んだんだそうです。お姉さんはもう亡くなりましたけどね。この人は頑なに日本人になると言ってね。アイ子さんとキノコ採りに行く時は一緒なんだよ。それでここに時々現れるんだよ。姉妹だから仲いいんだけど。だけれども、娘たちや周りの人たちは、アイ子と一緒にやるなって……。もっと別な言い方すると、田中了先生とか運動に協力するなということです。お姉さんも「日本人になるということだからここに来たし、日本人として生きるんだから、そこはアイ子と違う」と言っていました。

基本的には、自分が工夫したというよりも、お姉さんが土人教育所とか、集落というかお土産を作るところでね、お姉さんが先に覚えたと思うんですね。それで、お姉さんはもっと上手な人に教わったんだよね。同時に学んでてもっと上手な人がいたって言った方がもっと正確かもしれない。それはニブフの人だったり。で、同じ紋様になりますけれども。

去年、北大がサハリンから三人の女性を呼んだんですよね。それで色々な語りを聞いたんですよ。それを録音してデータベースにしたんですね。その時に言っていましたけどね。北方民族博物館で実演してもらったんですけど、紋様が北の人たちと南の人たちと違うんですよ。基本的には、唐草紋様の発展です。だから、アイ子さんがハートの紋様かなり使うんだけれども、それはハートとして作っているのか、唐草紋様の展開でそうなっていったのか。

私が調べてずっと辿っていった結果、モンゴルにハートの形をした紋様があるんですよ。それが流れに流れて、黒竜江からアムール川に通じて、それがウィルタのイメージの中に一つあるんですね。もう一つは唐草紋様の流れもあるんですよ。それから更には、アムール川の流域の渦巻、田中さんはこのような考えなんですね。僕自身はよくわからないがアムール川の逆巻く渦もあると思う。その流れがずっときているわけだけれども、1905年から国境が作られるでしょ。そして、1925年に土人の杜ができるわけです。いわゆる居留地ができるわけです。生きんがために、校長先生や校長先生の奥さんが「お土産品作った方がいいよ」っていうアドバイスをしたのではないか。その中で今の切り方を発展させたと思うんですね。そういうことでね、連続模様やああいう丸いお盆のような、こういう紋様っていうのはオタス独自のものになるんですね。だから、北方にはあまりああいうテーブルクロスのようなものはないんです

ね。ただ流れが、北方民族でありウィルタでありニブフであるということは確かなんです。確かに、ごく最近、っていっても、10年、15年前の話なんだけど、作られた衣装とか、もうちょっと前でも2、30年前のものでも、ニブフの人の衣装とウィルタの人の衣装は若干違うんですよね。で、アイ子さんが典型的ですけど、そういう風に流れて流れてきて連續紋様を作るにしても、丸いものを作るにしても、ハートを主にしてそれに色々唐草を絡ませていくというやり方は、アイ子さんや釧路の人など、南部オタスの出身者が多いです。

榎澤 興味深いですね。

弦巻 たぶん、日本人の切り紙の作り方そういうものも入っていると思うんですよね。調べてみると、黒龍江省の黒竜江、あるいはアムール川流域の少数民族の中にはね、中国の剪紙という切り紙の技術が伝わっているんです。その伝わっている人たちの切り紙の技術の中には唐草の紋様もあったりね。ハートのような紋様もったりね。それから全く違う絵のような紋様もったり。だけど、剪紙の技術がなければ、それが伝わらなければ、到底できないようなそういう作風があるんですよ。

ちょっと余談になりますけどね。例えば、皮をなめすといえば、動物の皮と思うでしょう。

榎澤 ええ。

弦巻 これはサハリンから来た人たちがお土産を持ってきたものですけど、これはアメマスの皮をなめしたものです。これちょっとご覧になって下さい。

榎澤 いいですか？

弦巻 これ、いかにも北の人のですけど、ウィルタらしいでしょ。

榎澤 ええ。

弦巻 これもウィルタのものですけど、トナカイの型を小さなハサミで切って作るわけですよ。周囲はクロテンの毛ですよ。この黒い方は背の方で、白い方は腹の方ですよ。

榎澤 ああ、そういえばそうですね。

弦巻 これがね、アメマスの腹の部分で、これが背中の部分ですよ。これ、ニードルアートって言うんですけど。針でこういう色をつけるんですよ。これは、元々は魚の皮だなんて思えないけど、ようく見たら鱗でしょ。

榎澤 言われてみれば、魚の模様はこうだったなと思い出しました。すごいですね。

弦巻 こういう技術が彼女たちにあって、それが色々な形で継承されていたんです。結局、今は南の方のポロナイスク、伝統的な技術の人が残らなくなっていますね。逆に、北部の方のノグリキだとかオハだとかああいうところにね、伝統的な毛皮の作り方だとかなめし方、ああいう刺繡の仕方だとか、あのようにアートを作る。それから白樺皮細工だとか色々あるでしょ。そういうものをやれる人は20人いないそうですよ。20人位しかいない。言葉もね。踊りを教えるのもね。7、80代ですよ。その人たちが今、幼稚園とか小学校の放課後に講座を持って、民族の子どもたちに教えてると言うのです。

榎澤 今、民族併せても…

弦巻 300人くらい。

榎澤 300人くらいですか。その内だと、数%ですよね。もったいないですね。

弦巻 ええ。でもすごい技術ですよね。

榎澤 すごい技術ですよね。

弦巻 刺繡にしてもね。魚の皮をなめして作る技術だとか。

榎澤 シャケとか秋刀魚とか食べても皮なんて箸でズスといっちやつてすぐ壊しちゃうのに。

弦巻 あれを薄い紙のように作るんですね。

榎澤 それで物持ちもいいんですよね。

弦巻 だからね、民族の伝統的技術としてイルガを指導してきましたって言っているのは、元々を尋ねるとお姉さんであったりニブフの人であったりするわけですね。アイ子さんはここに来て非常に技術を発展させたんですね。

榎澤 そういうことなんですね。

弦巻 だけど、彼女の優れていることの一つは、民族的な紋様のイメージが頭の中にあるということですね。それでないと、ちょっとやそっとでね、あの紋様は切れないですよ。それはやっぱり頭にあるということですね。ハートの絡ませ方やね、同じ太さでうまく切るとかね。やっぱり母から子へ子から孫へ伝えてきた伝統的な技術の一つですね。

榎澤 そうですよね。下絵も何も描かないでチョキチョキ切っちゃって、一つとして同じものはない。けれど、開くと、おお！となるようなものですよね。

弦巻 しかも、「これはねーちゃんのだ」、「これ何とかさんのだ」、「これ私のだ」、「これ誰々さんの」ってみんな違うんですよ。だから、同じ様なものを正在しているようで作り手は違う。わかっているわけですよ。あれ見たらわかるわけですよ。ようく観察すると、個人個人違いがあるんですよ。

榎澤 そこをしっかりと長い目で見ていかないとだめなんですね。

弦巻 そうそう。

榎澤 昨年のお話で興味深かったのが、財布とかで皮を縫った時に、薄い生地でも裏面に糸を出さないという技術です。神業という言葉がいいのかわからないんですけども。

弦巻 サハリンから来た人たちがこう言っていました。親に7、8歳の頃から教えてもらうんだって。その時、「痛い」って言ったら、それは裏に針が出ているのがすぐばれるんですって。絶対、親は痛いって言わないんだって。痛くないんだからね。だけど、初めてだと針が指に刺さるから、「痛い」と言うと、「それすぐ抜いてね、も一回入れて直しなさい」って言われるって。7、8歳位からやり始めるらしい。

榎澤 かなりの年数を経て手に入る文化なんですね。

弦巻 そうそうそう。ダブルチェーンステッチっていうらしいんですけどね。チェーンステッチみたいな線の、その間を埋めていくんですね。この埋めるのもよく見ると一定の法則があってね。あれ何て言うんだろうね、もちろん私にはできない。

榎澤 ああいう複雑な紋様をね。

弦巻 人類の遺産ですよね。人類の知恵ですよね。そういうものが残されていく必要がありますよね。

例えば、話が飛びますけど、奈良時代の正倉院をもう一回復元しようじゃないかと学者先生や日本の工芸家たちが復元するわけでしょ。それと同じように、ウィルタに

も何百年も続いてきたあの技術があるわけだよ。あれから見たらそう難しいことじゃないよね。だけど同時に、黙ってりや消えていくわけだから……サハリンに対する少数民族のそういう技術を残してくれとサハリン当局にもロシア共和国にも要請したわけだけど……それを潰した大きな役割を果たしたのが日本なんだよね。そういう点で、日本は、そういう民族的な独自の文化を残すことに支援する責任がありますよね。

榎澤 例えば、財団法人のアイヌ機構（アイヌ文化振興・研究推進機構）ありますよね。あそこで何らかの協力体制とか、あるいは北海道アイヌ協会とか、何か連携とかないんですかね？

弦巻 今まで全然考えなかったわけじゃないんですけど、結局やらなかつた事と、何よりも本人たちがいないってことなんですよ。だから、一つは網走にあるフレップ会だとか、あるいは、実はウィルタ刺繡をやろうという人が札幌にもいるんですよ。サークル作ってるんですよ。そういう方向で残すというのは一つあると思ってます。

もう一つは、サハリンそのものに支援するということです。

榎澤 そうですよね。まだ残っているわけですからね。リューバさんとかはそれをできないのですか？

弦巻 できないね。

榎澤 できないですか、支援は。

弦巻 むしろ、サハリンのポロナイスクの博物館の人たちがそれをやる気になったり、ユジノサハリンスクの歴史博物館の人たちがやるようになれば……あるいは、アローンだったかな？ そういう団体があるんですよ。民族的な伝統を残すというね。そういう自立的な団体があるんですよ。イルガだけじゃなくて踊りや歌やそういうものを残そうっていう自立的な団体があるんですね。それを支援するっていうのは考えられます⁵⁷。

榎澤 踊りもそうですよね。アイ子さんは踊りが大好きだったって。

弦巻 すぐ踊りたがったですね。

榎澤 色んなところに行っては踊って。オタスの時代も仕事サボって水汲みサボって踊ったこともあるとか。

弦巻 そうですね。

⁵⁷ 日本政府に対する戦後補償について、1994年11月、日本政府に戦後補償を求める遺族会がポロナイスク市で結成されている。遺族会は、日本政府に対して、①謝罪、②合同慰靈碑の建立、③遺族たちの墓参と肉親との再会、④遺族弔慰金の支給、⑤民族の自立助成を要求。前掲『証言：植民地体験 ポンソンファ（鳳仙花）』、177頁。1995年に二人の代表（ニブフのキム・ウンシン（当時60歳）とウィルタのキタジマ・リューバ（当時49歳））が戦後補償を求める要求を携え日本政府を訪問している。詳細は、1995年3月6日付朝日新聞2面「サハリン先住民族遺族代表、きょう来日 徒軍・抑留で政府に謝罪要求」；1995年3月13日付朝日新聞2面「北から2人がやって来た ウィルタ：1（50年の物語・第31話）」；1995年3月28日付朝日新聞「ウィルタとニブヒ サハリンの先住民族」（みんなのQ&A）；千葉茂樹・藤野知明「第6章 踏みにじられた北方民族の軌跡」原田勝弘等編『環太平洋 先住民族の挑戦』（明石書店・1999）、203-240頁。

榎澤 アイ子さんの踊りの記憶と言うのは、笹倉さんが記録で撮っているんですか？⁵⁸
弦巻 撮っているかもしれないね。

榎澤 ビデオとかがあるとか？ インターネットで“北川アイ子”というキーワードで調べ関係するものもみんな見たんですけど、バスガイドだった方が、二風谷の萱野さんやアイ子さんのカセットテープがあって、それを研修で聞いたということをブログみたいなところに書いていたんですね⁵⁹。

弦巻 それはあるかもしれないですね。北海道ガイド研修会だとかそういうのがあってここを訪ねてきましたから。ガイドたちの研修です。

榎澤 そういうカセットテープはこの資料館で残されていないのですか？

弦巻 ゼロでないかもしれないけれど、僕は探したことはない。

榎澤 あっ、そうなんですか。結構貴重な資料かなと。

弦巻 ここで一旦切れますか。

榎澤 そうですね。

弦巻 それとももうちょっとですかね？

榎澤 今の部分の中にある偏見とかあるいは打ち解けないで悩んでいる部分って結構重要な話かと思います。ここも聞くと結構長くなってしまうかもしれないのです。先生にご無理をお願いしてしまうことになってしまいますが…

弦巻 明日、十時頃に現れます。

榎澤 それでは、十時頃お願い致します。

(2) 2日目：2010年10月10日（日）10-13時

①『私の生いたち』販売品と非売品の違いについて

弦巻 例えば、アイちゃんは“神”という言葉を使ってないんじゃないかな？“カミサマ”って言っていたと思うな。

榎澤 神ではなくカミサマ。
(弦巻先生がプリントした『私の生いたち』(非売品)を見て) ところで昨日のお話
ですと、僕はてっきり箇条書きのものがそのまままとまっていると思ったんですけど。

弦巻 確かにそうなんですけど。一つ一つの文章見ますと、だいぶ変わっているんですよ。
変わっているというのか変えてるのか。それから最後の部分は抜けてるんですね。

榎澤 そうですね。昨日頂いたものと販売されている『私の生い立ち』を比較すると、何
段落か違いますね。

弦巻 私は小冊子を出してからも記録を続けたんですね。伊藤公平さんという方が小冊子

⁵⁸ 「ウィルタ協会会報アルドウ35号」(2008)、4頁には、アイ子さんにお別れのことばを述べる笹倉いる美氏がアイ子さんの踊り好きを示す文面が載っている。「踊りの好きなアイ子さんは、若い頃に着たという服を、少し窮屈そうにまとって、年季の入った舞を見てくれる。その時ばかりは手の動きも、足の運びも軽やかで、腰飾りも小気味よい音をたてる。「水汲みをさぼってまで踊っていたよ」と、いたずらっ子のような顔で話す。……」

⁵⁹ 主婦バスガイド花子でございます！のBlog「暴風雪警報につき」(2009年12月21日付記事) <<http://ivory.ap.teacup.com/matchin7/2016.html>>

を作ったんです。彼は、オホーツク史民衆史講座の会員で、北見にいる時に色々やつた人なんですよ。だから、僕のまとめたのを彼がそういうふうにしたんですね。それで、ここを担当した犬塚さんが増刷したんですよ。

榎澤 確か、テッサ=モーリスさんのを書かれていた方ですよね⁶⁰。みすず書房の。

弦巻 ああ、そうそうそう。あれに色々関わって。それでは、昨日の続きをりますか。

②『私の生い立ち』17~19段落ーぶしつけな質問について

榎澤 昨日は3段落読んで、その中の一つだけ質問して終わってしまいましたので、もう一度読ませて頂きます。

『田中先生や多くの先生方の熱意でウィルタの文化と人権を守る運動が拡がり、またゲンダースの軍人恩給のたたかいや、ジャッカドフニ建設のたたかいがすすめられました。私は「自分の民族の文化が残る」「わたしが死んでも残るんだ」ほんとうにうれしくありがとうございます。

この数年間、ジャッカドフニの展示作品を作ったり、イルガ（紋様）の指導をしてきました。熱心に見学したり、学んでくれる人がいます。しかしこまだほんとうはシシャ（ウイルタ語で日本人の意）とは打ちとけないで悩んでいます。

また日本人にもかんたんにウィルタのことを原始的な人間だとか偏ったような見方をするひとがいるようです（資料館でもぶしつけな質問にであります）。』

昨日ここまで読んで、弦巻先生にイルガの歴史というかルーツみたいなものを教えて頂いたわけです。例えば、サハリンでも北と南で違うとか。そういうことを教えて頂いた所で話が終わっていました。

あと2つ気になる部分があります。特に気になるのが、3つ目の段落です。“原始的な人間”という言い方は嫌な言い方ですがよくありがちな話だと思います。この後の、“ぶしつけな質問にであります”と書かれていますが、お二人が具体的にこういうことを見かけたことがあるのでしたら教えて頂けると助かります。例えば、北海道の教員の方々が作られたアイヌ民族やウィルタ民族に関する小中学校教育の本でも、“アイヌ民族っていうのは、何、北海道を返せと言っているんだ。北海道の土地名は全部日本語で書いてあるから元々日本人のものだろ”という趣旨の手紙が掲載されました。ああいう手紙みたいな事例があると、実際、「ああ、こういうこと平気で言う人いるんだ」と理解できると思うんですね⁶¹。ですので、お二人がアイ子さんから伺ったことでもいいですし、あるいは、アイ子さんがお亡くなりになられた後でも前でもお二人が実際にそういう質問にあっているかもしれない、もしそういう事例がありましたらできる限り紹介して頂けるとありがたいのです。

川村 そうですね。アイ子さん、「わたしたちは旧土人だ」って、そういう風に言われたこ

⁶⁰ 犬塚康博『ジャッカ・ドフニリブレット1 「あのみすず書房が...」という様式』(2003)

⁶¹ この手紙については、前掲注6で紹介。

とあるんです。「そう言わされたから、北海道の人たちは新土人だべって言ってやった」ってそんなことも言ってましたね。

榎澤 アイ子さんの機転ですね。でも、辛い機転ですね。

川村 そうですね。あとは、アイ子さん、丁度いなかつたんですけど、見学者の中で「ウイルタってどんな顔してるの」って聞かれました。それも一般の見学者って言ったらおかしいですけれども、そうではなくて東京の国立博物館の関係者か何かで三人位でやってきた人たちの中の一人なんですよ。

榎澤 そういう専門的にやられている方が……

川村 も、知らないというか。知らなければもう少し言葉の使いようがあるのになと思いながら……

榎澤 普通、何にしても初対面の時というのは、友達と会うみたいではなくてなれなれしくはできないものですよね。やはり、僕がお二人にお会いした時に、「よう！」とか「どもども」とか言ったら失礼なことでありますし。普通、緊張しながら会うのが当然だと思うので、言葉もしやべれる数というのは少なくなりますよね。

川村 そうですよね。その言葉聞いて私も「普通の人です！」って言っちゃたんですよ。アイ子さんはウイルタだけれども、ここで生活していたら普通のおばさんって感じなんですよね。そのことは私にはショックでした。

榎澤 「普通の人です」って言葉を出すこと自体辛いですね。

弦巻 いくつか思い出しますね。一つは、電話でね、「俺、昔権太で土人使ってたことあるよ」っていうそういう言葉を聞きましたね。何か、来てほしくない感じがしたね。

榎澤 何のためにその人はかけてきたんですか？

弦巻 彼らの上官ですよ。後々、「彼らにすまないことした」と言った方です。田中さんは前から電話してたみたいだけれども。ここに来るにあたって、私に「行くから」という電話をしてきた時にそのような言葉を使ったんですよね。僕は確かに「そういう言葉を使う人とはあまり会いたくないんです」って言った。言ったんですけど、彼はお詫びしたいという思いやら会いたいという思いやらあってね。アイ子さんはこの方に「お前なんか会いたくない。顔なんか見たくない」って露わに言ってましたね。本人の前でね。彼が「すまんことした」みたいなことは言うけれど、上辺だけに聞こえたんじゃないですかね。

誰かという記憶はないけれど、同じように「土人っていうのはすごい技術があるんだな」っていう人はいましたね。私は“土人”という言葉にはすごい抵抗がありましてね。これは全然話が違うんですけれど今、ある音楽の楽譜を見ててね。合唱曲ですね。その合唱曲の中にも野生的なアフリカの人々を想って書かれているものがありますね。そこに発音記号があるでしょ。フォルテだとアンダンテだと。そこに土人の叫び声とかコメントをつけてある。それは何十年も前の作品で曲自体は素晴らしいと思うんですよね。だけど、当時の人々が何のためらいもなく使っていた言葉というのはたくさんありますよね。例えば、アイヌに対して、“旧土人”ですからね。それからもっと古く言えば、ヨーロッパの作詞家や作曲家たちが、アフリカや中国の色んな民族を、蔑みではないですけれど好奇心というか、そういう目で書いた曲想ですね。それからリズムか何かを取り入れる時、すばらしいという一面を表現しているんです

けれども、同時に、“原始的な”というかそういう感じよね。いい言葉で言えば“素朴な”ということになるんだろうけどね。

榎澤 “素朴”という言い方使いますね。

弦巻 だけど僕、時々思いますね。現在の人が聞いたらどう思うんだろうなって。日本の流行歌だってたくさんあるじゃないですか。中国のメロディだとか雰囲気を出すための流行歌っていうのはありましたよね。軍歌なんか極端にたくさんありましたね。「私のラバさん、酋長の娘♪」ってね⁶²。

榎澤 ドリフターズがコメディタッチで変えてましたけど⁶³。

弦巻 伊東久男の“イヨマンテの夜”とかね⁶⁴。“イヨマンテ”って、アイヌの人が聞いたりどう思うかなって思いますね。だけど、それはまだ許せるんだけどね。それはね、当時の人の概念で社会通念がそのまま出ているわけだけれども。現代、ここに来て見る人、そして僕に会いたいと言いながら、「土人のこと知ってるよ」って言う人はいささか抵抗がありますね。

榎澤 そうですよね。謝りたいと一致しないでもんね。「土人使ったことあるよ」という言い方は、謝るのも、とりあえず言っただけという感じに聞こえてしまいますよね。

弦巻 確かに、彼は大分変わったんですけどね。

その他にぶしつけな質問っていうのは、アイ子さんに直接言ったのはないかもしれません。ないかもしれませんというのは、僕と同時に聞いたものはありませんという意味です。僕と会話した時に出てくることはあります。「土人でもすごい技術あるんだな」って言われたとかね。それからここ覗いて、「どっちの女人ですか」って言われたりね。お二人（川村氏とアイ子氏）一緒にいると聞いてくるんですよ。やっぱり好奇の目で見るというかね。彼女（川村氏）がウィルタのおばちゃんというか子どもでないかと見られることはあったんですよ。

川村 「アイ子さんの娘さんですか」と言われたこともあります。

弦巻 それはまあぶしつけの内に入らないけどね。

榎澤 確か、田中先生の本にも、どこかの新聞社の方が電話をかけてきて、「わかってるんです」といきなり言い始めてきて「先生のご苦労はよくわかります。ウィルタであることを隠して」という体験が書かれていました⁶⁵。何かそういう風に勝手に自分の思い込みで物を話す人が多いのかなと思います。思うことは自由だと思うのですが、思っても口に出すまでのというか、思ったことを飲み込めるというのが重要だと思うんですよね。「娘さんですか？」って聞くのって、そうだったらじやあ何なんだという問題も出てきますし。

川村 何か、質問の仕方とかニュアンスでわかるんですよね。「残念だな」ってばそっと言う時ありますよ。

榎澤 お気持ちお察しします。

⁶² 新橋喜代三唄・石田一松作詞・作曲『酋長の娘』(JASRAC : 059-5226-3)

⁶³ ザ・ドリフターズ唄・石田一松作詞・作曲『ドリフのラバさん』(JASRAC : 059-5226-3)

⁶⁴ 伊東久男唄・菊田一夫作詞・古関裕而作曲『イヨマンテの夜』(JASRAC : 007-0249-8)

⁶⁵ 田中了『サハリン北緯50度線一続・ゲンダーヌ』(草の根出版会・1993)、181-182頁。

弦巻 僕は逆に「日本人と全く同じですよ。日本人以上に日本人の顔してますよ」って言います。「お相撲さんの顔見てもわかるでしょ。モンゴル出身のお相撲さんが日本人と全く変わらないでしょ」って。「だから、サハリンにいる人たちも全く変わりません」と言います。

これは、この資料館ではないんですけど、“貞操帯”という風にあれを訳してというか、紹介してるんですよね。ここにつけるのね。僕は「いかがなもんかね」ってある方にお話したら、「それはそれでいいんじゃないですか」って言う（注46参照）。

榎澤 言ってるんですか？

弦巻 うん。それはある博物館の学芸員の方ですけどね。それはそう考える方がおかしいって言うんですよ。僕が貞操帯だというのは不適切だという風にそれをわざわざ考えるからおかしいんであって、いいんじゃないのって言う。

榎澤 昨年、その話を先生から聞いてここで実物を見させて頂きましたよね。それらが学生たちの頭にすごく残っていたみたいでした。

弦巻 私は不適切だと思うし、持っている意味がね……全くそういう役割を果たさないわけではないんですけど……それはね、日本の場所請制度やクナシリメナシの乱だとシヤクシャインの乱とかあいうのがある過程でね、日本の当時の船乗りたちとかがアイヌの女性を手籠めにした、そういう時にあれが抵抗の意味を持っていたということはあると思うんですね。だけど、だからといって今、新しい展示物を作る時、その当時使っていた言葉をそのまま表現するのはどうかと思う。私は抵抗がある。

榎澤 僕自身の見解なんで正しいかどうかわからないですけれども、書き方とすれば、元々の意味とか、手籠めにされたからそういう意味合いも含まれたかもしれないとか、そういうところを書くことが重要だと思うのです。

弦巻 そうですね。やっぱり、“前隠し”とか、そういう風に言うことの方が適切だと思うんですよね。

榎澤 そうですよね。“貞操帯”と“前隠し”では全然意味違いますもんね。

弦巻 他にぶしつけな質問というのは、パッとあれやこれや思い出さないですね。結局、質問ではないですけれども、私に対する言葉というか、会話の中で相手の人が言うものですね。それから、「日本人も木の道具や毛皮や色んなもの使ったんだよな。古い時代は皆同じだ」ってそういうのはありましたね。“古い”ってのは原始時代まで遡っていないんだよね。その人の頭の中には、日本には伝統的な技術の木の文化があったとかそういうことですよね。だけど、ごく最近までこの民族がそういう生き方していたという意味では、やっぱり古い民族だっていう意識があるんですよね⁶⁶。

榎澤 それは単一的な文明史観ですよね。要するに、それはうちらが保護してやらなければいけないという考え方には繋がって、アイヌに対しても、旧土人保護法っていう名称を使用しますよね。

弦巻 だから、持っている精神性の豊かさ、それからその道具の持っている優れた技術性

⁶⁶ 本人が意図していたかどうかはわからないが、文面から見る限り、司馬遼太郎の前掲書『街道をゆく』にも似たような文面が見受けられる。例えば149頁。「が、日本もシベリアも沿海州も樺太も、自然に対しては似たような宗教的気分を共有してきた。アイヌさんは、私どもがうしなったものを、なおも持っているのである。」

や合理性に対して、日本よりも古い時代のそれをまだ使っている、文明から見れば遅れている、そういう意識で見てますね。

榎澤 色々なものにふれたからかもしれません、僕らの方が、いや僕らの方がという言い方はおかしいですね。僕自身の方が遅れてるのかなって思うことがあります。遅れてるか進んでるかでいえばですが……。何でかというと、文字を持っていることによって、これを書き留めるわけですね。ノートに自分の能力を預けたり、パソコンに記憶させるわけですよ。だから、自分の能力を、違う人違う物に分け与えてしまっていて、自分が楽してしまっているわけですよ。本来持っている能力を削いでいる。だけど、ウィルタの人とかアイヌの人とかは正に自分の能力を大切に自分の体の中や脳の中に保存している。これは一番優れた発達した人間のあり方なのかなと思うわけです。まあ、発達とかそういう枠組みで括ればの話ですけど。

弦巻 そういう点ではね、話が飛ぶようすけれども、アイヌのある青年が言ってました。

「アイヌだとかウィルタだとかこういう人ってのは、家も作ったり物も作ったり道具も作ったり何でもやる。一人でね。だから今の俺たちよりももっと優れてたよな」って。「俺たちのじいさんばあさんの方が俺たちよりも何でもできた。大工の仕事やら漁師の仕事やら機織りから毛皮の加工、何でもやったわけでしょ。だからスゴイもんだったんだよな」って。「俺たちは車運転してさ、色々なことやってるけどさ、あまり発達してないだろうな。知恵とか技術見ても。植物見てもこれは何の役に立つとか何の薬になるとか、全部頭にあるわけでしょ。学びながら生きてるでしょ。そういう点では、すごいな」って。

例えば、アイ子さんはキノコ採りに行きますよね。これは毒キノコだとか、これは食べてもうまくないとかね。あるいは、キノコって生えてるところとか何かで同じ種類でも形とか色が違ったりするんですよね。それをよく見分けるんですね。適切な表現かどうかわからないんですけど、目玉が地面を直接這ってるんじゃないかなって思うくらいにね。「あっ、ここら辺にある」って言ったらあるんだよね。草の状態とか木の状態とか色々あるでしょ。それから埋もれ木みたいなのがあるでしょ。そういう時に、こういう状態だったら、何とかっていうキノコが生えそうだなって長い経験を通じてわかっているんだと思うんですね。「そこ探してみ。あると思うよ」って言うとあるんだよね。僕がなかなかわからないと彼女がスススッと行って採るんだよ。つくづく思ったんだ。この人の目玉が直接地面を這っているんじゃないかなって。幼い時から鍛えられて、まあ網走に来てからも鍛えられたんでしょうね。

榎澤 やっぱり教育方法もあるんですかね。アイ子さん自身もあると思うんですけど、ウィルタの教育方法。まあ、教育という言い方がいいのかわからないですけれども、生きるために色々学んでいく。そしてそれが実践できないといけない。実践できるまで必要なわけですね、生きるために。それが、南樺太時代を通じて、あるいは、サハリン時代、そしてここでの経験で磨かれていったということでいいんですかね？

弦巻 そうだと思いますよ。やっぱり彼女の少女時代というかね、それから少女時代から結婚して家族を支えてきた。お父さんお母さんだよな。生きんがために、それこそ魚獲りから山菜採りと何から何までやったわけでしょ。その苦労がこっちへ来て、物質的には物を買うことができたかもしれないけど、自然の中に生きている時に本当に癒

されるというのと今までの経験が生きてきたと思うんですね。彼女は小児麻痺か何かなったんでしょう？

川村 ちょっとね。

弦巻 体が不自由だったんですよ。

川村 それでも山に行ったら速かったです。お姉さんも速かったです。

弦巻 実に、雑草の中をササササと行くんだよね。やっぱりなれていたんだよな。

あと、ぶしつけな質問っていうのは、彼女はああ言われたとかこう言われたとは僕には言わなかつたからね。ちょっと目にちが経つてたから言わなかつたかもしれないけどね。例えば、言われたのが、1ヶ月とか10日前だったかもしれないから、言わなかつたのかもしれない。

榎澤 先ほどのお話じゃないですけれど、好奇の目で見ている人って印象でもわかりますよね。だから、その山に行っている人、弦巻先生のお言葉じゃないですけれども、地面に目が這っているんじゃないかなってくらいの観察眼がある方から見ると、この人は好奇の目で見ているなどと上から目線だなって、パッと峻別できるんじゃないかなって今思つたんです。

弦巻 そういうところありますよ。

川村 好き嫌いははっきりしてましたね。

榎澤 そうですよね。さっきの元上官の方の話でも、「会いたくない」と言ったわけですよね。南権太時代の軍人さんとか、警察の方のお話が出たんでそちらの話も質問させて頂きたいのですが、ゲンダースさんがご存命の時に何人か謝りに来てますよね。その方たちというのは、どうだったんですか？

弦巻 僕は接していないんですよ。

榎澤 そうですよね。時期的に70年代。

弦巻 僕は接触していないんでちょっとわからないですね。

榎澤 そこでもう一つ気になっていたのは、厚生省の判決が下されて……結局、南権太に住んでいた北方少数民族は戸籍がない、国籍がない、だから、大日本帝国の法が適用されない、結果として、軍人恩給が出ない。こういうふうな判決が下されているわけですけれども。要するに、当時の軍律軍令を無視して、南権太の特務機関の人たちが召集しちゃったわけですよね。その人たちに対する法的責任とか何か、ウィルタ協会の方で何かやられたことがあるのですか？

弦巻 それはないんじゃないかな。特務機関とか憲兵とか警察とか、それから民間人であっても工場主とかね、そういう人たちで土人として扱ってね、現代で言えば、不法な扱いをしたと訴訟を起こしたり抗議をしたりっていうことはしてないです。

榎澤 実際行うということは労力いることなんですね。

弦巻 そういうこともありますし、当面の課題でないこともありますね。

榎澤 何よりも軍人恩給、それと国側にこのことを認めてもらいたいというのが、ウィルタ協会、その前の守る会の趣旨もあるわけですよね。

弦巻 そうですね。オロッコの人権と文化を守る会ですね。

榎澤 僕はそちらの方を問うと何かに繋がってくるのかなという印象を受けたんで、どうなのかなと質問させて頂いたのですが……

話は戻させて頂いて、ぶしつけな質問というのは、好奇な目とか土人という言葉遣い、あるいは土人という用語にまつわることを言わわれているということですね。

弦巻 そうですね。やっぱり古い時代のまま生きているっていうのですね。

榎澤 何か科学信奉主義というか、文明こそが正しいという昔ながらの考え方を持たれている方も少なからずいますね。

弦巻 現代社会の様々な家庭用具や衣服とか家とかを物差しにして考える。物差しにして片一方を比較すると古い時代というわけです。まあ、日本人も 2、300 年か 3、400 年前に遡れば似たようなもんだという意識がある。それが今も続いているのかみたいですね。

榎澤 何かもうちょい幅広くモノを見てもらいたいというか。

弦巻 またそういう状況に置いておいたわけでしょ。置かれていたというかね。日本の政策の中でそういう風にしていたわけでしょ。本当の意味で文化を守るというのではなくて、本当の意味で彼らの生活状況や本来の生業を捨てさせたり、生活様式は若干変わったかもしれないけれども、彼らに文明の利器や色々なものを与えて近代的な生活や合理的な生活にさせたわけではないでしょ。

榎澤 昨日もお話を聞かせて頂いているのですが、“みなさんたち熱心に来てくれるんですが”と書いてあって、“まだまだシシャとは打ち解けないで悩んでいます”と書かれています。この点、何か思い当たるところとかあればお聞かせ願えたらと思います。昨日のお話だと、南権太時代、そしてここでの経験とか、ここでのシシャとの関係での経験もふまえても、そう簡単に人間というのは嫌なこと、まあ嫌なことのレベルではないですね。人権侵害のレベルをされてしまうとその人を許せるかっていうと難しいですよね。

これはオーストラリアの例もそうですし南京大虐殺の例でもそうなんですかね。虐殺されて日本に謝ってくれという被害者の発言に対して、「過去に日本の国では賠償責任も何も全部解決すみなんだよ」と言われて、親を殺され、子どもたちを殺され、兄弟を殺された人たちがルールで決められたからと言われて簡単に納得いくかと思うんですね。それと同じように、これだけ翻弄されてしまって、やはり打ち解けないというのは、それと同じ意味に捉えることができると思うんですけど。もし僕自身の考えが間違っていたらお教え願いたいのですが。

川村 先生、テレビ局の事件といったらおかしいですけど、わかりますか？ あるテレビが取材に来たんだけど、アイ子さんが怒って途中で撮影止めて帰っちゃったことです。

弦巻 あっ知らない。だいぶ前？

川村 だいぶ前。ナツコさんが来ることになって、中央公園でオロチョンの火祭りを見ましたよね。あの時なんです。

弦巻 ああそう。

川村 で、その後に撮影行ったみたいなんですね。その時急にアイ子さんが怒り出した。後で聞いたたら、ナツコさんが「この人たち、うち（サハリン）に来た時に泊まっていたり食事も出したんだけども何にも置いてかなかった」って、ボッと口に出したんでアイ子さんが怒り出したということなんですよ。「お前たち帰れえ」みたいに言って。

弦巻 つまり、礼を失したことなんですよ。カメラの人とかジャーナリストの人とかが取材するんだけれど、礼を尽くさないでばんばんばんばんやっていく。ナツコさん、彼女は姪に当たるのかな？

川村 何に当たるんでしょうね？ 従姉妹とかとは言ってますけどね。

弦巻 要するに、ウィルタの人なんですね。サハリンのその人の家に行って取材しても何も置いてかなかつたから……要するに、お礼もしていかなかつたから怒ったということなんですね。

川村 取材費でもない食事代でもない。本当に貧しい生活の中でもてなしてくれるんですよね。

榎澤 それは一言ですけど、ないですよね。

弦巻 そういう人たちだったということをナツ子さんがアイ子さんに話したんだよね。アイ子さんが「よし」ということになったんですね。「お前ら帰れ」って。

相手の人が好奇の目かどうかは別として、悪意はなくとも、アイ子さんから見て相手が礼を失していると思つたり配慮が足りないと思えば、「もうしゃべりたくない」となるわけです。

川村 そのテレビ局の人聞いたら、「もう何がなんだかわからない。アイ子さんが急に怒り出したんで撮影中止して帰ります」って言っていました。ナツコさんの家に来てどうのこうのっていうのは言ってなかつたと思います。カアッときちゃって怒ったんだと思います。

弦巻 それはありますよ。これとは全く話が別だけど、この資料館、お客様も来ないし、色々大変だし、例えば、この方（川村氏）にね、いくらボランティアでもそれなりのものをちゃんと払えないんだし……あるいは、資料館どんどん傷んでいくしね。「燃やしちゃえ、いらねえ」って言ってました。

川村 「火いつけて燃やすか」って言ってましたよね。

弦巻 そういうことがありますよ。まあ似たようなことはずいぶんありましたね。

榎澤 もしかすると、マスコミが嫌いというのは先程のテレビ局の経験もあるんですね？

川村 いや、その前からですね。

榎澤 その前からですか。

川村 テレビの件は 1996 年。

榎澤 そんなに新しいのですか。

川村 96、7 年位だと思うんですよ。95 年にサハリンに行ったんですよね。そして、次の年、観光協会でナツコさんが呼ばれて来たと思うんですけど。

弦巻 昨日もお話をしましたよね。学者さんやテレビの色んな人が嫌いなのは、じいちゃんの時代からですよ。例えば、おじいちゃんにね、学者先生が言葉を色々聞くわけですよ。発音を何回も言わせる。母音にしろ子音にしろ、聞く人にとっては初めてだから厳密さを求めるのかもしれないけど、聞かれる方にしたら厳密さはどうでもいいんだよね。“シー”なのか“ウシー”なのか“アー”なのか“ウアー”なのかね、どうでもいいことなんだよな。でも何度も何度も言わせられてね。仮に、報酬頂いたって使い道があるわけでもないよね。どれだけ報酬があったか知らないけど、おじいちゃんや

おばあちゃんにとって別に必要ないんだよな。タバコがあればいいんだよな。

「これは珍しいものなんで研究させて下さい」と言って、持つていって返さないとかもあったし。それから、好奇の目で見るということに近いけれど、取材をしていいネタにしたいとか。ある意味では、この人たちの歴史を紹介するとか意義を感じたりすることは大事だけれども……

私も一度断ったことがありますよ。「どういう趣旨でどういう風にどんな場面を撮りたいんだ」って言いました。

そのきっかけは何かゲンダーヌさんに聞いたことらしいんだよね。「あなた一人か二人しかいないのか」って。そしたら、彼はうつかりというか他意はないんだけれども「二人や三人じゃないよ。何人もいるよ」って言ったんだよね。それで結局、網走の住人の中に「オロッコ族」は相当いて、それも「わーい」と自分たちから、誇らしげに喋るという話になっていたようなのです。それを取材するというのは、テレビのバラエティでもないけどね。ちょっとどうかなって思ってね。「ちょっとじっくり話をさせて頂いてから取材をして頂きたい。今晚もう一回話し合いたい。」って言って宿に後で行ったら、その人たちがいないんですよね。「なんか、もうよろしいです」って言ってましたよ」って宿の人がね。どこのテレビだか雑誌だか忘れたけど、そういうことありましたね。

榎澤 一応連絡はすべきですよね。人の時間を割いているわけですから。止めたなら止めたという連絡はしないといけないでしょうし。

弦巻 やっぱり、ゲンダーヌさんとかアイ子さんに直接取材したいわけでしょ。だけど結果としてまずいことが起きる場合があるわけですよ。予期しないことを書かれたりね。クローズアップされた写真で出されることは彼女は嫌なわけですよ。それで、僕は注文をつけるか内容について色々話をするわけですよ。それを嫌がる記者もいるわけですよね。

川村 先生ではなくて、直接フレップ会に、新聞記者か何かの方が行ったんです。「フレップ会のみんなが『一回二回来たってアイ子さんには会えないよ。だから、本当にアイ子さんに会いたければ十年位通いなさい』って言ったって聞いたことあるんです。

弦巻 NHKのテレビにも出たことがあるんですよ⁶⁷。NHKの木村さんというディレクターですよ。その人とはアイ子さん、「木村さんが大きくなったら一回だけ取材に応じる」って彼が若い少年の時、約束したんですよ。そして、お姉さんと森に行ってキノコを探りに行ったことがあります。二人の生活。あれ（放送）は北海道だけかな？

川村 たぶんそうだと思います。

弦巻 放送されたんですよ。10分か15分位の番組だよね。

⁶⁷ NHK クロニクルのホームページ<

<http://nhk.jp/chronicle/?B10001200999308050130128>>で過去の番組を確認したところ、1993年8月5日放映の『くらしのジャーナル』内において「姉と妹 2人のウィルタ」というタイトルで放映されたと思われる。リポーターは木村和人と記されている。番組内容紹介では、「終戦までサハリンに住んでいた北方先住民族ウィルタの人々が戦後北海道に移り住んだ。日本人であるが差別はある。したがってテレビにでたウィルタの人はなかった。その2人の姉妹がたどった人生をドキュメンタリーふうに追う。」と記されている。

川村 フレップ会の刺繡習いに来ていた人の息子さんで、6年生位の時に遊びに来たとかって言っていたんですよね。「僕は大きくなったらテレビの仕事をするんだ」って言っていたそうです。その時、口約束みたいに「そうなったら、おばさん、テレビに出てね」みたいになつたらしいんですよ。で、成長してテレビ局に入って。「どうだ」って来たから、「約束だから出なくちゃ」ってなって。そういう話は聞いていました。

弦巻 僕に言うには、「あのボウやとは約束したから」って言うんですね。ボウやって最初意味がわからなかつたんですよね。要するに、何年か経つてるんでしうね。確かに、彼 NHK のディレクターになって約束だから一回だけ出るんですね。お姉さんも珍しく出たんですよ。その取材の中で二人が違うということを言ってました。「私はウィルタでありたい」とアイ子さんが言う。「ウィルタとして生きてきた」とも。それで、お姉さんは「だって私は日本人になるっていうことだから來たし、來た以上は日本人なんだから」って言う。それを一つの番組の中で、それぞれにインタビューしたんです。
それはね、NHK でお探しになるとあると思います。

榎澤 かなり貴重な資料ですね。

弦巻 データ上は正しくない資料もあつたんですよね。現在過去にウィルタ民族は何人、何々民族は何人と数字にはちょっとまでよと思ったところはあるけれど、それ以外はアイ子さんとお姉ちゃんの様子が非常によく撮れてましたね。

榎澤 そういう対比をさせるというのはなかなか他でも見当たらないですね。

弦巻 そうですね。お姉さんがテレビに登場するっていうことも最初で最後でなかつたかな。

川村 それが見てないんですね。あとアイ子さんが言つていたんですけど、お姉さんはここに滅多に来なかつたんですって。資料館には。先生、ここで会つことがあります？

弦巻 あるよ。

川村 私が来る前に？

弦巻 いや、来てからもあるよ。

川村 「あなた来るようになつたら、姉さん来るんだね」って、アイ子さんに言われたことがあります。

弦巻 恐らく、あなたが来る前は来なかつたかもしれない。だけど、そこの裏の方に小さな畑作っていたんですよ。で、何か植えてたんだ。それを見に来つたんだよ。それで、ここに寄つてね、この中に入つて寄つて帰るんだ。

川村 たまに刺繡持ってきて一緒にしたり。何回か来るようになつてから、アイ子さんが「姉さん、今まで来なかつたのに、あなたここに居るようになつてから来るようになつたんだよ」って言ってくれたことあるんです。

弦巻 お姉さんは僕にはいいんですよ。僕やこの人にはいいんですよ。マスコミは絶対嫌なんですね。

アイ子さんが悩んでいたことの中には家族のこと親戚のこと、民族としての運動のこと、マスコミに対応することなど多々ありました。

榎澤 家族とか民族のことってお話が出たんで、それにちょっと繋げさせて頂きたいと思います。これも後の部分に繋がつてしまうのですが、慰靈碑、キリシエを建てる時のお話です。ゲンダースさんのお話だと特にアイ子さんがすぐ建てると言つたそうです

ね。 ウィルタ協会とすれば、2、3年後位を目処に考えていたのに、アイ子さんがサハリンの同胞に「来年建てるから」と言ってしまったと田中先生の本に書いてありました。ゲンダーヌさんもキリシエが建った時の集まりの時（1982年5月3日）に、「妹のアイ子はキリシエを建てることに命をかけて、みなさんに訴えました。足がわるいのに、一軒一軒をまわり、ひとり、ひとりに真実を訴えて、募金集めをしました。妹のアイ子は戦争で死んでいった若者に、キリシエを建てることを心に誓って、日本に引き揚げてきました……」ということを言われていました⁶⁸。今生きている家族たちとか同族だけではなくて、亡くなった方たちに対する思いというのも、僕自身は彼らから見た場合シシャになりますけど、亡くなった人たちに対する手向けだとか感覚が違うのかなと思いました。亡くなった人たちもいつも隣にいるというイメージなのかなと思ったのですが。お伺いしたいのは、アイ子さんの家族とか同族の人たちに対する思いというのも何かわかりましたらお聞かせ願えたらなと思います。それと、更に限定すると、勝手な推測ですが、死者との共存というイメージはあるのでしょうか？

弦巻 アイ子さんにとったら、自分のお姉さんとか妹とか姉妹愛というのは非常に強いですよ。この同じ土地に住んでいるからというのもあるけど。ほとんど毎日のように接している。家族はもちろん家は別だけれど。これは本当は生きてれば、姉になるのかい？ 双子の姉妹の？

川村 どうなんでしょうね？

弦巻 姉になるのかい？

川村 姉さんになるかもしれないですね。

弦巻 双子の姉妹がいたんですよ。それがね、生後数ヶ月で亡くなるんですよ。それをウイルタ式のお守りとして木偶を作つてそれを毎日お参りしているんです。それがここにある。

榎澤 そうなんですか？

弦巻 これ、ただの箱にただの布切れを被せたようになっているけど、中はね、木偶なんですよ。

榎澤 セワですか？

弦巻 セワ。

川村 ここ始まる時にね、ずっとお祈りしてご飯食べさせてあげるんですよね。私はそれできないんで、ここ来る時はお水とお茶をあげてますけど。

弦巻 それをずっと続けている。

川村 始まったら、必ずお菓子とご飯とを持ってきてやってました。

弦巻 これはね、一時、郷土博物館でこれを持つていったことがあるんですね。これができる前に預けてあったんですよ。お父さんの代だよね。その時に博物館で預かったわけですよ。それを戻せと申し入れて戻してもらったんですよ。これ（ジャッカ・ドフニ）ができた時に最初には多分無かったんだよね。「やっぱり気になる。大事にされてない」って。簡単に言えば、どっかの片隅に置かれるだけだった。やっぱりお参りしないとだめなんだってことで、戻ってきて、そこにあるんですね。だから、写真だけ

⁶⁸ 田中了『サハリン北緯50度線一続・ゲンダーヌ』（草の根出版会・1993）、86-87頁。

飾つとくっていうのもあるかもしれないけれど……だけど妻や夫やおじいちゃんお母さんお父さんに、毎日お参りする人いますよね。だから、そういう風に考えれば特別珍しいことではないんだけど、しかし、小さい時に亡くなっているわけでしょ。極端に言うと、日本人はある意味淡白でね。毎日やらなくなるかもしれないよね。特に僕みたいないい加減な人間は、父の命日も忘れてみたいなところあるんですよ。それから見るとね、実にきっちとやるんですよね。そして、これを下ろして松の木を燻して、そして柳を、イリラウ（木幣）をもう一度巻いてお参りをするということを一度やったことがあるんですよ。ウィルタ語辞典で調べないと正確な言い方はわかりませんが……。

川村 アイ子さん元気な時は、ここ始まる時毎年やってました。

榎澤 『アイ子さんと私』という司書の方が書かれたところには、“ブッキチュリ”と書かれていますがこれですか？⁶⁹ 何かエゾマツとイソツツジを燃やした煙でセワなどをくゆらすことと書いてあります。

弦巻 そうそうそう。それを毎年やっていた。入院しても気になって退院してきてやったんだよね。一時外泊というかね。やったことがあるんですよ。

川村 そうですね。入院しても、「お茶あげてるか？ 水あげてるか？」ってね。

弦巻 で、お兄さんもう亡くなっただしょ。妹さんも亡くなっている。それは仏教に帰依している。お葬式をやった。だから、命日が来ると、月命日だとか何かきっちとやるんです。お金が無くとも、お坊さんにはお布施を。

榎澤 あんまり宗教とかは関係ないんですか？

弦巻 形だけ見ると、ホトケさんのことしっかりやるわけでしょ。南無阿弥陀仏だとか南無妙法蓮華経をしっかり信じているかのように思うけど、自分の本当の世界観はちゃんとシャーマニズムであるわけですよね。矛盾無く生活の中に両方あるわけですよ。だから、そういう点では、信仰に対して誠実であるっていうかね。

榎澤 そうですよね。確か昨日のお話でも、先生が車で連れて行った時に、神の社みたいのがあるとそれを大事にすると……

弦巻 だから、なかなか進まないんだよね（笑）

榎澤 そうだとすると、兄弟姉妹とか家族をすごい大事にされて、亡くなってもすごい大事にすることですね。

弦巻 非常にそういう思いは強いですね。

榎澤 ゲンダースさんが亡くなられた時に、葬儀で涙も見せず強い意志を見せていたと新聞で書いてあったのですが、やはり兄の意思を引き継ぐという兄妹愛としての、無論自分自身もウィルタとして色々残していくたいという思いもあったでしょうけど、そういう兄妹愛というのもあった。だから、資料館の館長にもなった。こういうふうにも捉えることができるんですかね？

弦巻 だと思います。

⁶⁹ 「アイ子さんとわたし 1. ブッキチュリ」<
http://www.kustos.ac/lepos/page4/nadasa/nadasa_01.htm>

③『私の生いたち』20~21段落－他の少数民族に対する意識について

榎澤 それでは次にいかせて頂きます。二段落、内容が繋がると思いますので、続けて読みます。

『子どもたちは「ウィルタは（叔父ゲンダースがにせの赤紙でだまされたように）アイヌよりもエンチュー（樺太アイヌ）よりも下にあつかわれてきたんだ、だから母さんはウィルタを名のっても自分は今後名のらないことにする」（息子のA君）といっています。

エンチューやアイヌはやはり私とおなじような立場におかれた仲間だと思うとその苦しさがわかるような気がするのです。私はエンチューやアイヌやニブヒ（ギリヤーク）は私たちの「ナーニエ」（同胞）だと思います。』

これは先ほどのNHKのテレビの話も繋がるのかなと思うのですが。アイ子さんは、南樺太時代では、アイヌ、エンチュー、ウィルタなどなど、その中でランキングがつけられていて、難しい言葉で言うと“差別構造”がシシャと少数民族の関係でもあったのに対して、更に少数民族間でもあったわけですよね。そういうのは頭の片隅にはあるかもしれないですけれど、やはり同じ立場にあったという意識が強かったんですかね？

弦巻 サハリンでも樺太アイヌというのはあまり多くないんですよね。だから、樺太アイヌよりも下に扱われたって言うのは現実に彼女が日々そうだったわけではなくて、例えば、学校制度、土人教育所の中に、樺太アイヌはいないわけですよ。樺太アイヌは、昔でいう尋常小学校に統合されていくわけでしょう。そして、北海道に渡ってくると、ウタリ協会というのがあって、アイヌはアイヌで日本の先住民族としている。日本の国と日本人には差別されているけれども、アイヌ自身の団結力っていうのはあるわけですよ。そして、マリモ祭りがあるとか、どっかでカムイノミをやってるとかあるわけですよ。ところが、自分は土人学校のままだった。それが差別と思わなかつたけれど、戦争終わるまで教育所だった。そういうことでしょう。そういうことと、召集令状出されたらアイヌは軍人恩給もらえるんだよね。日本人として扱われているから。だけど、兄やらヒラナカさんは召集令状に対する償いやら何やらしてもらえない。アイヌは偽でない召集令状で行って軍人恩給をもらえる。だけど、自分たちは偽者扱いだった。それで軍人恩給ももらってない。だから、シシャはアイヌを差別する。けれども、アイヌが自分たちを差別するんではなくて、日本人が私たちをアイヌ以下に扱っている。この思いは強かったです。

榎澤 そうすると、シシャに対するってところがポイントですね。

弦巻 そうそう。で、子どもたちが名のらないということを僕に言ったわけではないですね。母さんたちには言ったんではないかと思います。

たぶん、長男次男どちらもそういうことを言ってると思うんですね。それから、長女次女もね、ウィルタだっていうのは向こうの夫には言ったかもしれないけど、お母さんの運動、おじちゃん（ゲンダース）の運動を支援するっていうことはしない。だから、

娘息子たちはこの資料館には顔出すことはあっても、まず運動は支援しないんですよ。それはね、彼らがこういう言葉で言ったこともないし何でもないけれど、名のっていいことないんですね、何にもね。何にもいいことないでしょ。これも極端で誤解されるけど、アイヌ協会に入ると、そのメンバーになることによって学校の奨学金があつてみたりね。あるいは、色んな伝統工芸や色んなものに携われば、支援も得られるというそういうものでもないわけでしょ。しかしウィルタと名のっていいことは何もないわけですよ。で、差別だけは続く。

榎澤 そうですね。後は国に立てついたとか、言われますよね。

弦巻 だから、そういうことでまあ長男も次男も賢いからね。生きるってことにはやっぱり賢くならざるを得ないわけだよね。

榎澤 かなりの分析をした上での言い切りなんですね。

弦巻 まあ、そういうか、本能的に、母さんやゲンダーヌの苦労、そして親戚の人が運動を嫌がっていることに対して敏感に感じ取っているっていうかね。だから、こういう言葉がアイ子さんに出たんだと思うんですね。

ところで、「赤紙でだまされたように」とあるんですけど、ゲンダーヌさんたちに配られたのは、赤紙ではなくて青い紙だったって話があるんですよ。

榎澤 青い紙ですか？

弦巻 と、アイ子さんが言っていたというんだよね。私もちよつと不注意でね。

榎澤 そういえば手紙とか書いてあった記憶がありますね。青だったかは覚えていないのですが……

川村 青って言っていたんですよね。

弦巻 昨日もちよつとお話しましたけど、実は、網走にニブフの人いたんですね。そういうこともあるし、それから、エンチューで一番仲良しで頼っていた副館長で金谷栄二郎さんの奥さんで金谷フサさん。それから、ヒラナカさんの奥さんもエンチューだよね？

川村 そう聞いているんですよね。

弦巻 だから、樺太アイヌに対しては本当に仲間だという意識があったんですよ。それから、そのニブフの方も、てっちゃんてっちゃんって言っていたんだけど、お母さんの代から太鼓を叩いて踊るっていうのを覚えているんですね。それでここでちよつと踊ったことあるんですよ。ここができるからまもなく東京の方に出稼ぎに行って帰っこなかつたんですけどね。その人も仲間だという気持ちは、ゲンダーヌにもあつたし皆にもあつたんですね。そういうことで、ここに書いてあることは、アイヌなんかでも阿寒に行こうとか白老に行こうとか帶広に行こうとか、少数民族の人との連帯感はわれわれ以上に強かつたしよくわかりましたね。表情は非常に明るいしね。

榎澤 網走に来た初日に、網走の図書館、エコセンターの所に行って、郷土資料コーナーがあったのでそこでずっと調べていたんです。戦前の時代の本も置いてあったので見ると、書き方がランク付けをするんですね。オロッコと書かずにそこにもオロチョンと書いてありましたが、簡単に言うと、アイヌはうちらより劣っていると書いてあつて。だけれども、オロチョンはもっとひどいという書き方をしているのは、あくまで

もシシャ、日本人の見方でそのランク付けを勝手にしている⁷⁰。かなり問題視しなければならない見方が示されていて、逆の意味で勉強になったんですけれども、今の話を聞いてより勉強になりました。樺太アイヌとかウィルタとかは関係ない。ヒラナカさんも樺太アイヌの方と結婚されておりまますし、その人たちとの関係が今、お二人のお話を聞いてすごい勉強になりました。

それでは次に行かせて頂きます。

④『私の生いたち』22段落－平和について

『いま日本の世の中は、私は「汚ない」と思います。非行や犯罪も多いし、政治家も悪いことをしているし、戦争の準備もしているようにみえてならないのです。「軍国」ということばは嫌いです。そんな国にはぜったいなってほしくないし、息子たちのことを考えると、もう私たちだけでたくさんだと思います。そのためにもがんばっていきたいのです。』

榎澤　これは昨日もお話を伺った部分ですが、やはり一貫して、平和というものをお亡くなりになられるまで意識された部分ですよね。

弦巻　そうですよね。

榎澤　実際、田中了先生が書かれた弔辞の文章でも、“あなたが残してくれた二つの『ジャッカ』平和・文化の二つを私たちがひきつぎます。”と書かれていましたよね⁷¹。弦巻先生がアイ子さんの葬儀の時に読まれたんですよね？

川村　そうですね。代読で。

榎澤　ですから、アイ子さんの平和の考えが今のウィルタ協会にも繋がっているのかなって思いました。僕はかなり重要なことと思ったのですが……

川村　そうですね。いつだったか、ここにお客さんが来て、どうしてもアイ子さんに会いたいっていうことがあったんですね。でその時はどういうわけかここに来てなくて家

⁷⁰ 例えば、井原辰五郎編『實用樺太案内』（小島大盛堂・1909）、91-96頁。

⁷¹ 「ウィルタ協会会報アルドウ35号」（2008）、2頁。二つの『ジャッカ』を示す部分をそのまま以下に引用する。

「……アイ子さん、あなたが居ない網走は寂しい。あなたの温かい、やさしいまなざしが消えた網走は本当に淋しい。

いつも兄さんの傍にいて、源太郎さんを励まし、樺太の同族ハツ子さんたちを励まし、刺しゅうを贈り、ニクブンのマサコさんたちを元気づけていたアイ子さん、樺太の同族はあなたのことを忘れてはいない。あなたの作品はポロナイスクの博物館がジャッカ（宝もの）として大切にしています。

網走では兄さんの作品と一緒に大事に保存しています。資料館ジャッカ・ドフニは小さいけれど、北方少数民族文化を継承する資料館として世界に誇れる宝です。

アイ子さん、あなたの呼びかけで創った天都山・眺湖台に建った『静眠の碑』は少数民族戦没者の声を世界に訴える記念碑です。網走の静眠の碑は樺太のサチで『戦没者慰靈碑』としてリューバたち遺族会が守り、ポロナイスク市民が平和のシンボル・ジャッカとして大切に北川アイ子の遺志として、これからも引きつがれていくことでしょう。」

に居たんですよね。で、この人なら感じとして多分大丈夫だろうなと思って連れて行ったんですよね。自宅にね。それでアイ子さんに「お客さん、会いたいって言っているんだけど」って言ったら、「会いたくない！」って怒り出したんですよね。会いたくないって一回言ったら何回言てもだめなんだよね。それで「今日はあきらめて下さい」ってことで帰って来たんですよね。後で聞いたら、丁度8月15日の終戦記念日で首相がどっかにお参りしたってお話なんですね。

榎澤 靖国神社に？

川村 かどうかわからないんですけどね。「それを見てたら、頭がおかしくなったていうか、カッときて誰にも会いたい気持ちにならなかつた」って後で言っていました。お客様には何の罪もないんですけど。やっぱりそんなところも平和を望んでいたんだなって感じますね。

榎澤 これはアイ子さんだけではなくて戦争体験者の本を読んだ時にも、参拝についての話を聞くと頭がおかしくなるというか傷が甦ってくるというか、そういうのが書いてありますね。直に体験されてる方ですからね。

川村 そうですね。次の日も、その状態が続いていたそうですね。

弦巻 慰霊碑（キリシエ）のところですね、8月15日に、亡くなったゲンダースの仲間やサハリンで犠牲になった同胞たち戦争犠牲者に対して慰霊の気持ちでセレモニーをやったんですね。何回かやったんですね。それには必ず出てくるんですよ。それをやらなくなつてから、長崎に行ってきたたりね。それから広島の原爆だとテレビやラジオで戦争体験のことを放送するわけでしょ。8月15日っていうのは特別な思いがあるわけですよね。それからの何日間かってのは、サハリンのあの混乱の時代を本当に思い出したくない時代ですよね。しかし、それも絶対頭の中に巡ってくるわけですよ。そういう思いが彼女にあったことは事実なんですね。だから、靖国神社だと、あんまり丁寧な言葉で詳しく言うわけではないけれど、軍国主義的なとか、あるいは、日本が軍備を増強しなければならないとか、外国から守んなきやいけないとか、5、6年前、いや7、8年前かな、とにかくそういう日本の反動的な動きに対して怒ってましたね。政治家に「バカ」って罵るほどでないけど。「いつまであんなことやってるんだ」って言つてましたね。

榎澤 実際、オタスの杜にも靖国神社を模したような…

弦巻 そうそう神社ありましたよ。

榎澤 オタス神社。

弦巻 お参りさせられてたんですよね。

榎澤 想像だにできないですね。直に体験されてる方の、それぞれの戦争に関わる日を毎年迎えるというのは。

弦巻 痛い傷を塩でこすられるというか、そういう気持ちですよね。

榎澤 本当にこれでもかこれでもかですもんね。

弦巻 彼女は、軍国主義だと色々な言葉は知ってるんだけど、内容を詳しく説明できるってことではないんだよね。それから、反動的という言葉を使ってるし、日米安保条約とか再軍備とか自衛隊の増強だとか、沖縄の基地だとかそういうことはわかるけど、自分で具体的にそれを説明するということはないし論ずることはない。だけれども、

条件反射のよう、テレビ見るとカッとなるんですよね。

榎澤 本当に体験しているわけですからね、軍備の問題というものを。言葉すら聞くの嫌ですね、そういう目にあってしまうと……考えさせられますね。

市販品の『私の生いたち』はここで終わりですので、ここからは、『私の生いたち』(非売品)を使用することにします。じゃあ次に行かせて頂きます。

⑤『私の生いたち』(非売品) 23段落－3つの夢について

『1984年（昭和59年）7月8日、兄ゲンダースが突然亡くなりました。今まで、ウィルタの権利や文化のためにたたかってきた兄です。兄は非常につらい思いをしながらも、三つの夢をひとつひとつ実現してきました。いっしょにやってきた兄を失ったことは本当に大きな悲しみです。』

榎澤 この三つの夢というのはゲンダースさんの夢だけど、アイ子さんの夢でもあったわけですよね？

弦巻 そうなったんでしょうね。

榎澤 ここでなった？

弦巻 うん。アイ子さんとゲンダースが話し合った上で、この三つの夢っていうのを発表したわけではないんですね。そうではないんですけど、一つ一つ自分の思い出もあると思ったんじやないですかね。

⑥『私の生いたち』(非売品) 24・25段落－仲間たちの死やキリシエについて

榎澤 続いての部分を読みます。

『キリシエ（慰靈碑）を作ったとき、私は自分の住む大曲団地を一軒一軒お訪ねし、お願ひしました。みなさんが協力してくれました。みんな話をすればわかってくれます。

また悲しいことですが、1986年1月には、兄平吉（D・ヒラナカ）が、12月には共に資料館をやってきたエンチューの金谷フサさんが亡くなりました。その後も、私たちの運動を支えてくれた方がたが亡くなっています。』

最後まで読んでしまいます。

『でも今は、悲しんでばかりはいられません。私一人でも、がんばっていきます。みんなの協力でやりぬいていきたいと決意しています。よろしくお願いいいたします。』

こここのところは、二つあるんですけど、一つは仲間たちの死ですよね。それを乗り越えていかなければならない部分が、“私一人でも頑張っていきます”と示されていて

かなり印象深かったんですよね。で、もう一つは何度かお話させて頂いたのですが、アイ子さんがかなりキリシエを望んでいたという部分も示されています。まずキリシエのお話で覚えていることがありましたらお願ひ致します。

弦巻 あの、ここずっと市営住宅の団地だったんですよ。

(弦巻先生の喉の調子が良くないため一旦休憩)

榎澤 お聞きしたかった部分、一つはキリシエに対するアイ子さんの思い。もう一つは、自分一人でも亡くなった人たちの意思を引き継いでという表現が正しいのかどうかはわかりませんが、自分一人でも頑張っていくと言っている部分。この二つの部分が重要な部分だと思うんですけども、キリシエに対する思いについて、先生方で何か思い出というか印象に残っていることがありますか？

弦巻 いくつかあるんですけどね。一つは、確かに厳密に厳密に一軒一軒だったかはわかりませんけど。ここ 500 軒位あったの？

川村 はい。びっちりここ建ってたんで。

弦巻 500 軒だったか 300 軒だったかわからないんですけど、とにかくほとんどの家庭を訪ね歩いたんですよ。で、こういう趣旨でこういうの建てるからと伝えたそうです。どういう説明の仕方したんだかわからないんですけど、自分のことも言ったんだと思うんですよ。場合によってはね。でも一軒断られたんですよ。募金を断った家があるんですよ。簡単に言うと、「趣旨には賛成だけどそれは国がやるべきことだ。だから国にやらせないで、自分たちばかりやってもしょうがない」というようなことを言われたんだって。だからって、その人がやってくれるわけでもないでしょ。「自分たちだけでもせめてやりたいという気持ちがわかつてもらえなかつた。悲しかつた」ってそういうのは一つ聞いています。

それから、サハリンから石を持ってきたのね。

榎澤 石ですか？

弦巻 うん。ポロナイスクから石を何個か持ってきたんだよね。それをキリシエの土台に入れたんですよ。それはゲンダーヌが運んだんじゃないかと思うんですよ。

川村 これでどうかね。行った時に。82 年にできるから、81 年に。

弦巻 81 年に行った時に持ってきてるんです。

榎澤 二人、サハリンに行った時ですね。

弦巻 だから、その時にキリシエを作ろうという気持ちがあったんだと思うんですよ。計画に上っていた。だから、「向こうに行ったらすぐ作るんだ」って言つたってことに通じると思うんですね。まあ、石を持っていこうと提案したのが、ゲンダーヌなのかアイ子さんなのか田中さんなのかそれはわからないけど、この中に石があるんだって。それと、あそこにただお参りするんではなくて、踊つたこともあるよね？

川村 はい。そうですね。

弦巻 そういう思いが強いですよね。ただできたから、お参りすればいいセレモニーをすればいいってだけではないっていう思いがあったというのは事実ですよね。

榎澤 天都山に山菜採りに行かれる時にも、必ず立ち寄られていたんですよね？

弦巻 そうですね。そういうことが多かったみたいですね。ここ見学した人たちが、ここ

だけでなくあそこに行って勉強したいという時には、一緒に付いて行くんですね。体がうんと弱くなつてからはそうしなかつたけどね。

榎澤 あっちもセットで考えないといけないですよね。

弦巻 そうそうそう。彼女の思いというのは、民族の文化財というかそれだけじゃない。

それと戦争と亡くなつた人たちと慰靈碑との関係での三つが一つになつてゐたんだと思うんですね。だから、見学したいという人がいたら、若い内は一緒に行つたみたいですね。

榎澤 そうすると、資料館だけでなく、キリシエの案内にも付いて行くということは、僕のもう一つの質問「一人でも頑張っていく」という思いが行動として表れてゐる部分もあるわけですよね。

弦巻 そうですね。この「一人でも頑張る」というのは、一人しかいなくなつたわけですよ。でも、誰に頼ることもできない。この資料館の中身を作るという点でね。それを頼れなくなつた。だから、自分で可能な限りの物を作つて残したいという気持ちはあったと思うんですね。だけど同時にね、彼女はある意味でまがい物みたいなのができあがるのは嫌だったんですね。例えば、温泉に行つたことあるんですよね。温泉の売店にスリッパがあつたんですよ。スリッパの模様にウィルタ紋様が使われてゐたんですね、アイヌ紋様として。ものすごく怒つましたね⁷²。今もそうですけど、あっちこっちでウィルタ紋様って利用されているんですよね。網走のポスターだとか。網走地方のオホーツクの大地だとかオホーツクの世界というようなね。プロパガンダではないけど、いわゆるキャンペーンのポスターなものとか小冊子みたいなやつにね。あんまりまがい物になるのは嫌だったんですよ。

榎澤 実際、2000年に、テッサ・モーリス＝スズキさんの本『辺境から眺める』の表紙が問題になつたと思うんですけど⁷³。みすず書房さん…

弦巻 これが、最近の網走のキャンペーンの小冊子。これ（ウィルタ紋様）を使っていいかどうかって聞かれてね。ジャッカ・ドフニの部分を私が訂正して書いたんですよ。アイ子さんが亡くなつてからの話ですからね。「北方民族博物館でお借りしてしっかり写しなさい」って言つたんですよ。そうじやなきや、オホーツク文化のものなのかなウイルタのものなのかな、わけわからないよね。どこにでも「そんなにやらないでほしい」って言つたんだよね。

ここにジャッカ・ドフニの説明があるんですよね。「ここに僕の顔を」って言われたけど、「僕は（資料館に）いないから。あなた（川村氏）の顔を」って言つたんだけど、あなた断つたの？

川村 わからない。来ませんでしたよ、取材には。やっぱり先生出ないとだめだったんですよ。

弦巻 時間的に間に合わなかつたかもしれない。

⁷² この点について、上記のエピソードと似たエピソードが、司馬遼太郎・前掲書、156頁に掲載されている。「……彼女（北川アイ子）は資料館のすみに腰をおろして、ウィルタ文様を切りぬいてくれている。……（司馬が）「アイヌの文様と似ていますね」というと、彼女は、いくぶんちがう、といった表情をうかべたが、すぐ肯定して、うなづいた。」

⁷³ テッサ・モーリス＝スズキ『辺境から眺める』（みすず書房・2003）

川村 観光協会の方が何冊か持ってきたんですよね。「資料館にも欲しいからちょうどいい」とて言ったら、いっぱいくれたんですよ。

榎澤 『網走歴史道』ですか⁷⁴。こういうのがあるんですね。

弦巻 そういう時に色々利用されるんだけれども、あんまりこういうのはね。例えば、これはアイ子さん亡くなつてからの話ですけど、相談されて断つたんだけどね。モヨロ鍋というお料理を……⁷⁵

榎澤 確か、道の駅にありました。

弦巻 ご当地グルメを作ったその宣伝にイルガを使いたいと言つてきた。「それはだめですよ」って言った。「モヨロ鍋の紋様にウィルタのはだめですよ」って言つたんです。

榎澤 混ざっちゃいますよね。全然違うものに。

川村 「オホーツク人とウィルタって同じですか?」って言うお客さん、結構いますね。

弦巻 だから、「オホーツク文化人の末裔ですか?」って言う人もいる。それからこれはある意味では文句のつけようもないんだけど、オホーツク大陸って言つてね、この辺り一帯を色々宣伝にしてんですね。このごろ網走支庁って言わないんだよな。オホーツク総合振興局って言つたんだよね。

榎澤 昨日、楽器屋さんに寄つたら、その方も「オホーツク何とか局に変わって何だかな」って言つてましたね⁷⁶。

弦巻 そこのね、網走キャンペーンのあちこちにイルガを使ってるんですよ。同時に、オホーツク文化を代表する女神や牙の細工を使ってるんですよ。何だかごちゃまぜになつてるんですよ。あんまりまがい物にはなりたくないって気持ちはあったんですよ。だけど、元に戻りますけど、純粋なというか、自分の館の中に残したいという気持ちはあったんですよね。

榎澤 さっき途中になつてしまつたんですけど、テッサさんの件の時つていうのは、アイ子さん生きてらっしゃつたわけですけども、あれはちょっと違う話になるんですかね?

弦巻 あれにクレームつけたのは、犬塚さんなんですよ⁷⁷。

榎澤 著作権の問題を色々語られて。

弦巻 そうそうそう。

榎澤 僕、当時『みすず』の冊子も読んでいたんで、テッサさんが自分の不勉強さを謝つた論文も書かれていて……⁷⁸

⁷⁴ (株)スタッフ編(網走市教育委員会・北見市教育委員会監修)『網走歴史道』(網走市観光協会)、5頁。

⁷⁵ あばしりご当地グルメ開発委員会(事務局・網走市観光協会)発行の「謎のオホーツク人網走モヨロ鍋」というパンフレットを見る限りでは、鍋にウィルタ紋様が使用されているかどうかは不明であるが、“オホーツク人の謎に迫る歴史散歩をお楽しみください”と書いてあり、網走市内の四つの施設(網走市立郷土博物館、モヨロ貝塚館、北海道立北方民族博物館、そして資料館ジャッカ・ドフニ)が掲載されている。

⁷⁶ 網走支庁が2010年4月1日から北海道オホーツク総合振興局に代わつてゐる。北海道オホーツク総合振興局のホームページ<<http://www.okhotsk.pref.hokkaido.lg.jp/>>

⁷⁷ 犬塚康博『ジャッカ・ドフニリブレット1 「あのみすず書房が...」という様式』(2003)

⁷⁸ みすず書房による謝罪文は当時、ホームページに掲載されていたが現在はない。また、

弦巻 僕も責任があるんだけど、あれほど極端に問題にする意図は始め僕はなかったんですよ。だけど、犬塚さんはその点であちこちインターネットで調べて悪用するというか利用する人たちにクレームをつけたりしてましたよね。それは必ずしも、アイ子さんという個人の本意ではない。本来、こういう民族のものを扱うには、いいかげんじやなくてね、律するべきではないかという指摘は正しいと思うんです。

それと別ですよね。ここでは“一人でも頑張っていきたい”というのは、当時、誰もいなくなつた。そしたら資料館を潰すかっていいたらそんなわけにはいかない、そういう思いですよね。だけど、この時から10年ぐらいの間に、いや15年ぐらいの間にかな、何度かやめちゃおうって時ありましたよね。彼女自身がそう言う。

榎澤 さっきの「燃やしちゃおうか」っていうのもそうですよね？

弦巻 そうそうそう。それはね、そういう風に言った日はそういう風にしたら大変なんですよね。聞き流すというのとは違うけど、変な言い方ですけど、「気持ちはわかった」ということにしてね、僕も帰っちゃうというかね。

榎澤 結構、その10年の間は、アイ子さんの気持ちの揺れとか、それに経営の問題もありますよね。

弦巻 経営の問題もあるし、彼女自身は例えば持病として狭心症を持ってたり、しおりゅう具合悪くなったりして入退院を繰り返していたわけでもあるんですよね。

榎澤 それでは体調の問題が一番あるんですね。

弦巻 そうそうそう。それでもね、例えば、トドマツの枝を切ってきて、そこのアウンダウ（テントで冬の家）の中に枝から取った小枝をずうっと敷き詰めて床を作るんですよ。そういう時は一生懸命やりましたよ。丁寧にやりましたよ。北方民族博物館の笠倉さんに依頼されて色々な製作をしたりね。それからここに来た人に対して、資料館のものを作るだけではなくて、教えて欲しいと大学生の人が来たりしたら、非常に親切に教えていましたよ。

それから先ほど言ったように、イルガをスースースーって切って気前よく渡してたよね。

榎澤 そういう作ることとかがあると、山が病院と一緒に、それが自分の本来の姿なんだっていうのがあったんですかね？

弦巻 そうですね。だから、ここがオープンしたら必ずしも彼女がいたんではなくて、オープンしてこちらに任せておいて、自分は山に行っているっていうのがしおりゅうあったですね。夕方だけちょっと顔出してとかね。

体が具合悪くなってからはね、特に歩けなくなつてからは、彼女は「車で来い」って言って。それで車に乗ってここに来るんですよ。そして一日いて。

川村 一日中います。

弦巻 それで車に乗って帰る。彼女（川村さん）にしてみたら、ウォーキングで来たいのにウォーキングの時間が無くなってしまう（笑）。そういうこともあったんですよね。

この件についてのテッサ氏による論文「知的所有権と先住民の権利」みすず2002年4月、2・11頁がある。関連論文として、青柳由香「伝統的知識をめぐる問題の状況」企業と法創造1巻2号（2004）、101・109頁。

ここに来るっていうのはまた気持ちが休まるかもしれないね。ここに来ると機嫌は良かったですよ。

川村 そうですね。

弦巻 だから、彼女（川村）とアイ子さんが二人で居る時は非常に機嫌がいいんですよ。僕と一緒に山ん中入っちゃうとご機嫌がいいんですよ。

⑦『私の生いたち』（非売品）の※の部分—故郷への想いについて

榎澤 あとこの※の部分、弦巻先生が1993年の5月に書かれている部分です。

- * アイ子さんは、1985年原水爆禁止世界大会（長崎）に参加しました。そして、被爆者と共に行進しました。長崎で深められた平和へのあつい想い、ひたむきな願いを胸にがんばっておられます。
- * いま、アイ子さんは数年のご苦労のため、時には入院されることがあります。サハリンの事情がかわり、生活や文化や運動の様子も報道されるようになりました。望郷の念はつのるばかりです。何よりも平和と民族の交流を切望し、なつかしい人びとの再会を祈る毎日です。

一つ目の※の部分。アイ子さんが原水禁の大会に参加していたというのは、何度も説明して頂きました。二つ目の*で、2～3行目に「望郷の念は募るばかりです」と書いてあるんですが、そりやあそうだろうなと思います。ここで私自身勝手な推測をしたのですが、サハリンの方に戻りたいっていうのはあったんですかね？

弦巻 戻りたいっていうか、向こうに生活を移したいっていう気持ちは無かったと思います。そうじゃないけど、行ってみたいっていうのはありましたね。これは強烈にあつたですよ。「行く」って言ったら、えらい舞い上がって喜んでいたですよ。

川村 95年でしたね、行ったの。

弦巻 だから、向こうに行ったり来たり、向こうの人も来たり行ったりっていうのはもつとできないかなっていう思いはありましたよ。だから、従姉妹のキム・ナツコさんが来るって言ったらすごく喜んでたんですよね。

榎澤 その交流が一番したかったことですよね。

弦巻 そうですよね。

川村 一時帰国で向こうから来ますけど、こっちからはなかなか行けないですよね。政府なり道なりのね。それがもっとちゃんとして自由にではないけど、同じ感じで行き来できたらいいねって言ってましたよ。

弦巻 お母さん、向こうで亡くなっているんですよね。アンナさん。聞いたことないけどお墓があるのかな？ あるいは、友達や知っている人ももちろんいるわけでしょ。昔で言うと、おばさんとかね。同級生とか色々な人が生きてるんでそういう人に会いたいって思いはありましたね。

榎澤 そうですよね。今おっしゃられましたけど、こちらから行くのがかなり大変でした

から。そこを繋げていいのかわからないんですけど、要するに、戦後補償の問題も解決しないで、国交回復の問題にも日本政府が取り掛からない。そういう思いも繋がつていったと言えるんですかね？

川村 でしょうね。

榎澤 ですから、日本政府に対する不満もあるでしょうけども、一個一個解決していくたい、そういう風な話になつていったのかな、全部として繋がつていったのかなとこちらとしては勝手に推測してしまったんですけれども。

弦巻 そうですね。アイ子さんは病院に行ってからはね、とにかく意識がキチッとあってしゃべれる時には、「資料館をよろしくお願ひします」って言っていたね。しゃべれなくなつてから一年も一年半もあったんだけれども。しゃべれる間は「よろしくお願ひします」って。僕もね、「今度、資料館開けたからね」って色々言ってあげたりしましたからね。

まあ他にもお話しなければならないことが色々あるのかもしれないんですけど……

榎澤 色々お話を広げて頂いて、過去の話もして頂いたり、現代の話も折々して下さったので、大変勉強になりました。ありがとうございました。

4. 資料『私の生いたち』(非売品) 一部抜粋

1. 私はウィルタの北川アイ子です。1928(昭和3)年、樺太で生まれました。父は、北川ゴルゴロ、母は北川アンナでした。兄はD. ゲンダーヌです。
2. 戦後、1967(昭和42)年2月28日、樺太から引き揚げ、網走に来て、現在、ウイグルタ協会や資料館ジャッカ・ドフニの仕事のお手伝いをしています。
3. 1981年(昭和56年)6月28日から7月4日まで、サハリン州ポロナイスク市を訪問してきました。育ったオタスには行けませんでしたが、なつかしい友人に会い、お互いに元気だったので、ほんとうに嬉しく思いました。しかし、苦労した年寄りの方が亡くなっていたのは残念でした。
4. 私は、オタスで育ち「土人教育所」に入学しました。六年生までウィルタ、ギリヤーク(ニブフ)、キーリン、サンダー、ヤクトなどの少数民族の友だちと学びました。その時は、それが差別であることは知りませんでした。毎日、日本語で教えられ、日本人になるように教えられました。
街では、どこでも「オロッコ」(樺太アイヌ語でウィルタを言う)といってばかにされました。お母さんを恨みました。それは、今でも忘れられません。
5. 17歳のころから、日本の軍隊の仕事を請け負っているところで働きました。毛皮の仕事や魚の加工でした。
6. 戦争が終るときソビエト軍が入り、日本の軍隊にいた少数民族の青年達はシベリアに送られました。そして、ほとんどはそこで死に、数人だけが日本に帰りました。わたしたち女と子供と年寄りだけが残されました。
7. 19歳の時、キーリンの青年ゲルゴールさんと結婚しました。6ヶ月後、彼は戦犯として捕われて、シベリアへ送られました。
8. わたしは、戦争とはこんなに罪のない人を不幸にするおそろしいものか、と思いました。戦争に負けると日本人は、「お前達はもともとソ連人だからオタスに残れ。」と言いました。日本の教育はウソだったと心から思いました。日本に裏切られたと思いました。心が鬼にならなければ生きていけないと思いました。日本人が信用できなくなりました。
9. 私はポロナイスクの工場(コンビナートの一つ)で働きましたが、絶望のあまり一度はオタスの川を見つめて、ついに身を投げました。しかし死にきれませんでした。兄や親達の苦しさを思って、立ち直ることができました。
10. いまなお、日本政府は、私たち少数民族で戦争で犠牲になった人々には何をしてくれているでしょうか。子供を失った母親達はどんなに悲しい思いで泣いて泣いて死んでいったことでしょう。
11. 1952年朝鮮人の青年、ゴン・アンツリさんと結婚しました。ゴンさんは、15才のとき、日本人に目かくしされたまま拉致され、樺太に強制連行され、炭鉱で強制労働させられました。
戦後、解放(実は捨てられ)、故郷に帰れず、淋しさをこらえて魚網工場で働いていました。
12. やがて長女が生まれ、長男が生まれ、次女が生まれ、次男が生まれました。三男

が生まれた直後、兄ゲンダーヌが日本に帰るとの報せがあり、一家で引き揚げることになりました。

1 3. 長女・長男は中学に、次女・次男は小学校に入りました。そのころ、刑事達に子供達の手紙を調べられたり、時計の中まで調べられたりしました。「いつまでもウィルタを馬鹿にしているんだな」と思いました。子供達は、「サハリンに帰りたい。」と言っては泣き、勉強にもついていけなくなりました。「日本に連れてきたのが悪い。」と私を責めました。

1 4. 夫は、やがて東京に働きに出ました。子供達の学校では、友達どうし差別のようなものはありませんでしたが、生活の貧しさや勉強のおくれから、やがて、次男が悪い友達とグレてしましました。憎らしくてどうにもならなくて苦しみました。とうとう刃物をもって振り回したとき、命がけで棒でたたいてしまいました。息子は、川で死ぬといって外に出ていきました。川で親子で泣きました。それから、息子は本当に約束を守ってまじめになりました。いまは、本当に親孝行な息子だと思っています。

1 5. 父ははじめ、網走の観光行事の一つである「オロチョンの火祭り」のシャーマンをやらされていましたが、それは本当は気の進まぬものでした。ウィルタの火祭りには全くないもので、神様の教えにそむくものだったからです。でも、生活のためでした。父は、家に帰って、神様にお詫びをしていました。「ウィルタってみじめだな」と思いました。

1 6. 夫は祖国に帰りたいといって、とうとう網走には帰らず、行方はわからなくなりました。いまでも、音信不通です。でも、私は彼がどんなに故郷に帰りたかったかと思うと、彼を責める気にはなれません。

1 7. 田中了先生や、多くの先生方の熱意でウィルタの文化と人権を守る運動が拡がり、また、ゲンダーヌの軍人恩給のたたかいや、ジャッカ・ドフニ建設のたたかいがすすめられました。私は、「自分の民族の文化が残る」「私が死んでも残るんだ」と思うと、本当に嬉しいのです。ありがとうございます。

1 8. ここ数年、ジャッカ・ドフニの展示作品を作ったり、イルガ（紋様）の指導をしてきました。熱心に見学したり、学んだりしてくれる人がいます。嬉しいことです。しかし、まだまだ、本当はシシャ（ウィルタ語で日本人の意）とはうちとけないで悩んでいます。

1 9. また、日本人にもウィルタのことを簡単に原始的な民族だと、かたよった見方をする人がいるようです。資料館でもぶしつけな質問にであります。

2 0. 子供達は、「ウィルタは、叔父ゲンダーヌがにせの赤紙でだまされたように、アイヌよりもエンチュー（樺太アイヌ）よりも、下に扱われてきたんだ。だから母さんがウィルタを名のっても、自分は今後、名のらないことにする。」（息子）といっています。

2 1. エンチューやアイヌはやはり私と同じような立場におかれた仲間だと思うと、その苦しさがわかるような気がするのです。私は、エンチューやアイヌやニブヒ（ギリヤークのこと）は、私達の「ナーニエニ」（ウィルタ語で仲間の意）だと思います。

2 2. 今の日本の世の中は、私は「汚い」と思います。非行や犯罪も多いし、政治家も悪いことをしているし、戦争の準備もしているように見えてならないのです。「軍国」

という言葉は嫌いです。そんな国にはぜったいなってほしくないし、息子達の事を考えると、もう私でたくさんだと思います。そのためにもがんばっていきたいのです。

23. 1984年(昭和59年)7月8日、兄ゲンダースが突然亡くなりました。今まで、
　　ウィルタの権利や文化のためにたたかってきた兄です。兄は非常につらい思いをしながらも、三つの夢をひとつひとつ実現してきました。いっしょにやってきた兄を失ったことは本当に大きな悲しみです。

24. キリシェ(慰霊碑)を作ったとき、私は自分の住む大曲団地を一軒一軒お訪ねし、
　　お願いしました。みなさんが協力してくれました。みんな話をすればわかってくれます。

25. また悲しいことですが、1986年1月には、兄平吉(D・ヒラナカ)が、12月には共に資料館をやってきたエンチューの金谷フサさんが亡くなりました。その後も、私たちの運動を支えてくれた方がたがなくなっています。

26. でも今は、悲しんでばかりはいられません。私一人でも、がんばっていきます。
　　みなさんの協力でやりぬいていきたいと決意しています。よろしくお願ひいたします。

* アイ子さんは、1985年原水爆禁止世界大会(長崎)に参加しました。そして、被爆者と共に行進しました。長崎で深められた平和へのあつい想い、ひたむきな願いを胸にがんばっておられます。

* いま、アイ子さんは数年のご苦労のため、時には入院されることがあります。サハリンの事情がかわり、生活や文化や運動の様子も報道されるようになりました。望郷の念はつのるばかりです。何よりも平和と民族の交流を切望し、なつかしい人びとの再会を祈る毎日です。

(1993. 5) (弦巻)

※ 碑 天都山 眺湖台

<表>

静眠

少数民族 ウィルタニブヒ 戦没者慰霊碑

1982. 5. 3

　　ウィルタ協会

君たちの死をむだにしない。平和の願いをこめて。

<裏>

1942年、突如召集令状をうけ、サハリンの旧国境で、そして、戦後戦犯者の汚名をさせられ、シベリアで非業の死をとげたウィルタ・ニブヒの若者達その数30名にのぼる。日本政府がいかに責任をのがれようとも、この碑はいつまでも歴史の事実を語りつぐだろう。
ウリンガジ、アクバッタリシュ(静かに眠れ)

5. 写真 写真1・ゲンダーヌさんとアイ子さん



写真2・イルガ

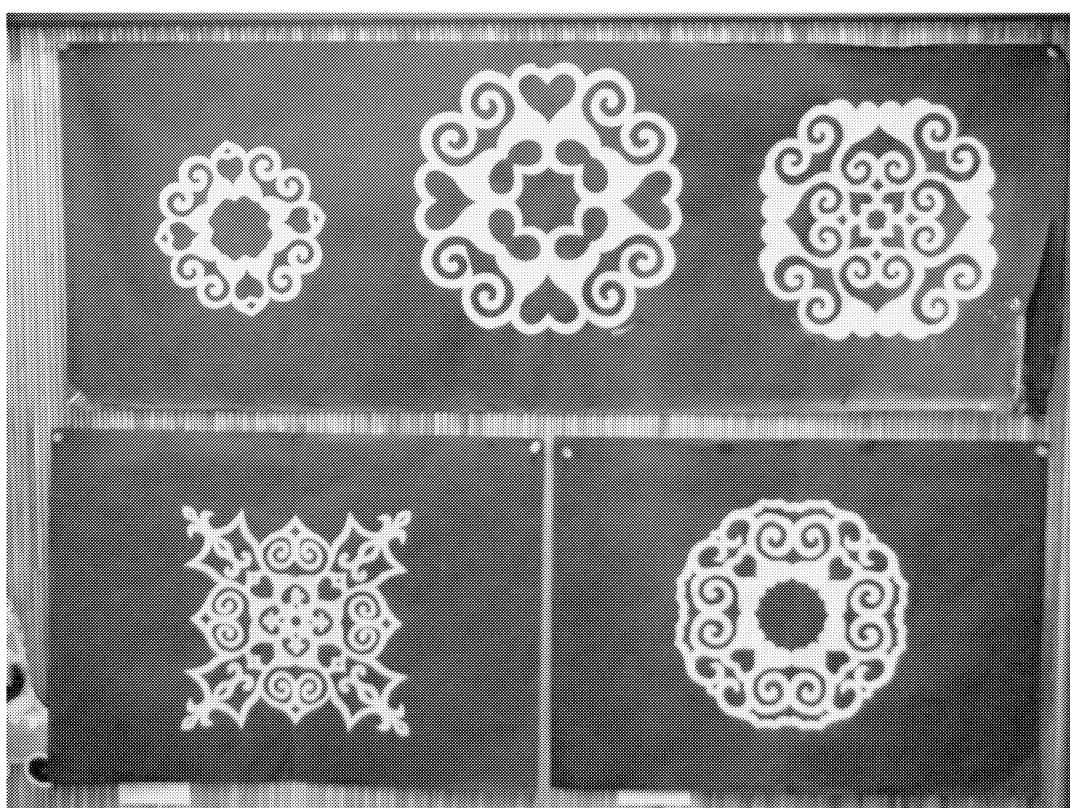


写真3・ジャッカ・ドフニ



写真4・慰靈碑キリシエ



参照・引用文献一覧

- E. A. クレイノヴィチ（中田篤・梅村博昭訳）「訳稿 ニブフのイヌ飼養と宗教觀におけるその反映（1）」北海道立北方民族博物館研究紀要 13 号（2004）、125-134 頁
- E. A. クレイノヴィチ（中田篤・梅村博昭訳）「訳稿 ニブフのイヌ飼養と宗教觀におけるその反映（2）」北海道立北方民族博物館研究紀要 14 号（2005）、127-136 頁
- E. A. クレイノヴィチ（中田篤・梅村博昭訳）「訳稿 ニブフのイヌ飼養と宗教觀におけるその反映（3）」北海道立北方民族博物館研究紀要 15 号（2005）、95-108 頁
- 池上二良編『ウィルタ語辞典』（北海道大学図書刊行会・1997）
- 井原辰五郎『實用樺太案内』（小島大盛堂・1909）
- ウィルタ協会「アルドウ」
- ウィルタ協会『北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニ展示作品集【改訂版】』（ウィルタ協会・2002）
- 榎澤幸広・弦巻宏史「ウィルタとは何か？－弦巻宏史先生の講演記録から彼らの憲法觀を考えるために－」名古屋学院大学論集（社会科学篇）48 卷 3 号（2012）、79-118 頁
- 扇貞雄『ツンドラの鬼（樺太秘密戦編）（第 5 版）』（扇兄弟社・1975）
- 大塚和義「観光地としての「オタスの杜」」Article Circle18 号（1996）、4-7 頁
- 長田英己「サハリンニブフの生業活動－タルルーに生きるニヴウンクー」北海道立北方民族博物館研究紀要 8 号（1999）、57-84 頁
- 樺太関係資料館<<http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/feg/hog/goannai.htm>>
- 樺太序編『樺太序施政三十年史（下）』（原書房・1974）
- 菊池俊彦『オホーツクの古代史』（平凡社・2009）
- 北川アイ子『私の生いたち』（春の風文庫・1983）
- 北川アイ子（弦巻宏史編）『私の生いたち』（非売品・1993）
- 北川アイ子（口述）「「オタス」の暮らしとわたし」北海道立北方民族博物館『第一二回特別展 樺太一九〇五—四五—日本領時代の少数民族 -』（1997）、15-18 頁
- 河野本道選『アイヌ史資料集 第六卷樺太編』（北海道出版企画センター・1980）
- 栗原俊雄『シベリア抑留－未完の悲劇』（岩波書店・2009）
- 小林笑子「北方少数民族 ウィルタの産育」女性と経験 9 号（1984）、34-39 頁
- 小林笑子「北方少数民族 ウィルタの宗教觀」女性と経験 10 号（1985）、52-55 頁
- 小林笑子「北方少数民族－ウィルタの葬制・婚姻」女性と経験 11 号（1986）、103-106 頁
- 小林笑子「北方少数民族 ウィルタの暮らし－社会生活・生業－」女性と経験 12 号（1987）、65-71 頁
- 小林笑子「北方少数民族 ウィルタの衣生活」女性と経験 13 号（1988）、68-71 頁
- 笛倉いる美「ウィルタ語におけるトナカイの名称に関する覚え書」北海道立北方民族博物館研究紀要 1 号（1992）、149-155 頁
- 笛倉いる美「ウィルタ文化聞き書きノート 1－刺繡－」北海道立北方民族博物館研究紀要 7 号（1998）、93-103 頁
- 笛倉いる美「ウィルタ文化聞き書きノート 2」北海道立北方民族博物館研究紀要 8 号（1999）、125-137 頁
- 笛倉いる美「ウィルタ文化聞き書きノート 3 クマ送りに使われた首飾り」北海道立北方

- 民族博物館研究紀要 18 号 (2009)、73-76 頁
- 「笹倉いる美「樺太の博物館 (1)」北海道立北方民族博物館研究紀要 10 号 (2001)、47-55 頁
- 「笹倉いる美編「服部文庫公開シリーズ3 服部健『樺太旅行記 昭和12年』附：日本学術振興会宛て報告書下書き」北海道立北方民族博物館研究紀要 14 号 (2005)、105-126 頁
- 篠原智花・笹倉いる美「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について (1)」北海道立北方民族博物館研究紀要 16 号 (2007)、77-98 頁
- 篠原智花・笹倉いる美「北海道立北方民族博物館所蔵の田辺尚雄氏樺太調査関連資料について (2)」北海道立北方民族博物館研究紀要 17 号 (2008)、59-72 頁
- 白石英才・笹倉いる美「服部文庫公開シリーズ4 ニブフ(ギリヤーク)の縫い方」北海道立北方民族博物館研究紀要 16 号 (2007)、69-76 頁
- タチヤーナ・ローン『サハリンのウィルタ 18-19世紀半ばの伝統的経済と物質文化に関する歴史・民俗学的研究』(2005)
- 田中了／D・ゲンダーヌ『ゲンダーヌーある北方少数民族のドラマ』(現代史出版会・1978)
- 田中了『サハリン北緯50度線-続・ゲンダーヌ』(草の根出版会・1993)
- 田中了編『戦争と北方少数民族』(草の根出版会・1994)
- 千葉茂樹・藤野知明「第6章 踏みにじられた北方民族の軌跡」原田勝弘等編『環太平洋先住民族の挑戦』(明石書店・1999)、203-240 頁
- T. Yu. セム(萩原眞子訳)「〈訳稿〉ロシア民族学博物館所蔵のクマ祭資料(2)アムール・サハリン地域諸民族(ニヴフ、オロッコ)篇一」北海道立北方民族博物館紀要 21 号 (2012)、95-108 頁
- 弦巻宏史『ジャッカ・ドフニリブレット1 自然の民 ウィルタ』(2002)
- 北海道高等学校教職員組合少数民族専門委員会編『生徒とともに考える日本の少数民族－その現状と指導の手引き』(北海道高等学校教職員組合・1982)
- 北海道高等学校教職員組合少数民族専門委員会編『続・生徒とともに考える日本の少数民族－教育実践上の手引き』(北海道高等学校教職員組合・1985)
- 北海道立北方民族博物館編『Northern Peoples(ノーザン・ピープルズ) 北方民族を知るためのガイド』(財団法人北方文化振興協会・1995)
- 北海道歴史教育者協議会編『アイヌ・オロッコの問題と教育』(北海道民間教育研究団体連絡協議会・1976)
- テッサ・モーリス=スズキ『辺境から眺める』(みすず書房・2003)
- 波木里正吉『オロッコ物語』(近代文藝社・1981)
- 濱口裕介「幕末のアイヌ風俗改変政策と対ロシア問題」洋学研究誌一滴 15 号 (2008)、1-13 頁
- ニコライ・ヴィシネフスキイ(小山内道子訳)『オタス』(北海道大学大学院文学研究科・2005)
- 西牟田靖『僕の見た「大日本帝国」』(株式会社情報センター出版局・2005)
- 北海道新聞「ウィルタの切り紙紋様1~7」1984年1月9日~15日掲載記事

舞鶴引揚記念館 <

http://www.maizuru-bunkajigyoudan.or.jp/hikiage_homepage/next.html>
松浦武四郎記念館<<http://www.city.matsusaka.mie.jp>>
松浦武四郎（佐々木利和解説）『蝦夷漫画』（松浦武四郎記念館・1996）
松浦武四郎（松浦孫太解説・佐藤貞夫編集）『武四郎日誌按北扈従』（松浦武四郎記念館・1997）
三木理史『国境の植民地・樺太』（塙書房・2006）
宮崎玲子「ウイルタの暮らしの模型製作について」北海道立北方民族博物館研究紀要9号
(2000)、41-54頁
山田祥子「北の隣人ウイルタのことばを学ぶ」Article Circle69号(2009)、14-17頁
山田祥子・笹倉いる美「北海道立民族博物館所蔵のウイルタ資料I－対応する北方言の語彙を中心に（1）－」北海道立北方民族博物館研究紀要19号(2010)、89-109頁
山田祥子・笹倉いる美「北海道立民族博物館所蔵のウイルタ資料I－対応する北方言の語彙を中心に（2）－」北海道立北方民族博物館研究紀要20号(2011)、97-112頁
山本命『北海道の名付け親松浦武四郎－アイヌ民族と交流した伊勢人の生涯』(十楽・2007)
北大人骨事件真相究明緊急会議編『歴史の真実II（上）「帝国」学問と「オタスの杜」』（労働者共闘・労働運動活動者評議会合同事務局・2005）